

東海地区

大学図書館協議会誌



52

2007

東海地区大学図書館協議会

目 次

巻 頭 言	大学図書館「格差時代」のなかで — 愛知県立芸術大学の現状 — 愛知県立芸術大学附属図書館長 森田 義之	1
講 演 要 旨	平成 18 年度第 2 回研修会「Web2.0 時代の図書館サービス」 Web2.0 時代の図書館 — 大学図書館にとっての Web2.0 — Academic Resource Guide 編集長 岡本 真	3
	図書館利用者の情報探索行動に関する実証的研究 名古屋大学附属図書館研究開発室 寺井 仁	9
	Web2.0 時代の新たな図書館サービスの展開 農林水産省農林水産技術会議事務局 筑波事務所研究情報課（農林水産研究情報センター） 林 賢紀	18
	第 61 回（2007 年度）研究集会 「芸術とヨーロッパの図書館— 過去と現在 —」 ルネサンス期の図書館とパトロネージ 愛知県立芸術大学附属図書館長 森田 義之	27
	新大英図書館：稀覯本と音楽書閲覧室 愛知県立芸術大学音楽学部 中巻 寛子	36
事 例 報 告	平成 18 年度第 1 回研修会「大学図書館の地域連携」 相互利用協定と愛知県内図書館の ILL 定期便設置実証実験 — 愛知県図書館の市町村立図書館支援業務を踏まえて — 愛知県図書館 村上 昇平	43
	静岡県内の大学図書館における連携について 静岡大学附属図書館 大石 博昭	50
	岐阜県内の図書館連携について 岐阜大学学術情報部情報サービス課 木村 晴茂	55
	東海目録（TOMcat）— 病院図書室と大学図書館の連携 — 東海地区医学図書館協議会東海目録ワーキンググループ 愛知医科大学医学情報センター（図書館） 坪内 政義	57
	図書館の教育支援、地域貢献：豊田高専の英語多読を通して 豊田工業高等専門学校電気・電子システム工学科 西澤 一	61

行 事	第 61 回（2007 年度）総会・研究集会	65
新規加盟館紹介	岐阜保健短期大学図書館	72
	四日市看護医療大学図書館	73
新図書館紹介	金城学院大学図書館	74
	名古屋学院大学学術情報センター	75
	名古屋工業大学附属図書館	76
会 則 等		77
総会当番館一覧		80
加盟館一覧		81
役員館一覧		85
研修会一覧		86
広告主一覧		

大学図書館「格差時代」のなかで ——愛知県立芸術大学の現状——

愛知県立芸術大学附属図書館長

森田 義之

今年度の第61回東海地区大学図書館協議会総会・研究集会の開催は、本学が担当することとなりましたが、大学校舎の老朽化と適切な施設がないことを理由に、愛知県立大学学術情報センター図書館の全面的な御協力をいただき、県立大学の会場をお借りして無事日程を終えることができました。開催館として、あらためて県立大学学術情報センター図書館にあつく御礼申し上げます。

今回の総会の中での発言にもありましたが、現在の日本の大学図書館では、国際的な情報基盤整備と電子化の急速な進展の中で、大学間の格差がますます大きくなってきております。その根本には、大学の規模や予算の格差があるのですから、格差の存在自体はいたしかたないこととしても、問題は、本学のような小規模公立大学の図書館予算の削減傾向がとどまるところを知らず、大学図書館としての機能を維持するのにギリギリのところまで追い込まれていることです。

皆さんに現状を知っていただくために、恥をさらすつもりで、愛知県立芸術大学附属図書館の実情を述べさせていただくことにします。

本年、創立41周年を迎えた愛知県立芸術大学は、創立当初は大学キャンパス・デザインのモデルとして全国的にも注目を浴びましたが（東京芸術大学建築科教授吉村順三氏の設計）、40年が経過して施設の老朽化が進み、附属図書館の施設やシステムに関しても大幅な立ち遅れが生じることとなりました。

図書館システムの導入には長年手がつけられず、全国97公立大学中のほぼ最後に予算がついたのが、ようやく2006年のこと。現在蔵書データ入力に3年計画で進行中ですが（2009年完了予定）、いまだに学生は古い目録カードで図書を探している状態です。

所蔵資料への資料ID付与はようやく昨年度完了し、この4月からやっと図書館システムによる貸出ができるようになりました。

創立以来、開館時間はずっと5時までで、学生にとってはまったく不便な状態でしたが、今年4月からようやく悲願の8時までの開館が実現しました。これは公立大学法人化にともなって、県が県立三大学の足並みを揃えるために強制的に実施したためで、本図書館にとっては法人化による最大のメリットといえるかもしれません。しかし、法人化にともなう人員のリストラはきびしいもので、図書館スタッフは6人から4人（正規職員3人、契約職員1人）に減らされ、事務長ポストは消え、カウンター業務2ポストはアウトソーシングに切り替えられました。

バリアフリー化が実現したのも、この4月からですが、それに伴う館内リフォームは中断状態のまま（階段に車いす用の昇降機が設置されたが、返却用ボックスの設置と書架増設は予算カットで中断状態）。

閲覧室やAV室を利用する上での最大のネックは、空調設備が長らく能力不足な状態で放置されていることで、地球温暖化のあおりをくった毎年の猛暑の中で、館内の温度が35度を超えることもしばしばあり、まともに読書や勉強ができる状態ではありません。

しかし、それにも増して危機的なのは、図書購入費のドラスティックな削減です。本学の図書購入費は10年前の1996年には総額14,436千円でしたが、今年度は予算編成上の問題もあり、なんと3,075千円（79%の減少）。購入冊数でいえば、同じ芸術系の東京芸術大学が6,391冊に対して818冊（2005年）、

学生一人当たりの図書購入費は9,439円で、東京藝術大学の半分程度です。外国専門雑誌も、この10年間何度かにわたってカットしてきましたが、今後はさらに大幅縮小を行わざるを得ない状況です。

一方で、本学は現在、2009年度の博士課程設置を準備していますが、学術的基盤の整備が完全に逆の方向を向いているのは、皮肉というほかありません。芸術大学は、実技系（音楽、美術）の教員が大多数を占めており、教員も学生も図書館や図書への認識度や要求度が希薄で、教員の研究費が図書購入費にはあまり回されないという特殊事情もありますが、専門学校ではなく、ユニヴァーシティである以上、芸術分野でも学術的基盤の整備は不可欠です。

法人化され、愛知県立芸術大学は、県立大学および県立看護大学（2009年度より新県立大学に統合）と同じ愛知県公立大学法人の経営下に入りましたが、図書館ははまだ全く別々の組織で、相互連携の動きは出ていません。

大学ごとの図書館予算の確保も重要ですが、2009年度以降は県立芸大と新県立大学が密接に連携しあい、図書購入や図書の貸し出しでも協力してゆく必要があるでしょう。

最近10年間の新刊専門書の購入は劇的に減少しているとはいえ、過去40年間に蓄積された美術書や音楽書、豪華大型画集、ファクシミリ本、楽譜類のコレクションには、芸大が独自に誇るべきものが多くあります。もちろん図書館は「生きもの」であり、絶えず新刊書を吸収して蔵書を拡大していかなければ、博物館か死んだ古書倉庫になってしまいますが、過去のコレクションを大切に守り、公開し、活用を促してゆくことも重要な役割です。

以上、他の大学図書館の方が聞いたら驚くような実情を、恥を承知で書いてきましたが、大学が存続する限り図書館も存続しなければならないのですから、どんなに人員を減らされ、予算を減らされても、へこたれずに頑張るべくほかありません。

今後とも、協議会の皆様の御理解と御支援をよろしくお願い申し上げます。

Web2.0 時代の図書館 —大学図書館にとっての Web2.0—

Academic Resource Guide 編集長

岡本 真

本日の構成— 2つのキーワード

「Web2.0 時代の図書館—大学図書館にとっての Web2.0」と題して、お話をさせていただきます。

さて、本日の話には、2つのキーワードがあります。講演のタイトルに盛り込まれていますが、「Web2.0」と「図書館」です。この2つのキーワードを軸に話を進めていきましょう。

まず Web2.0 です。Web2.0 という言葉がますます盛んに飛び交っています。飛び交うあまり、Web2.0 という言葉の発祥地である IT 業界では、かえって「まだ Web2.0 などと言っているのか」と、やや嘲笑的に見下す風潮すら漂っています。しかし、私は Web2.0 という言葉は依然として非常に優れた言葉であり、発想であり、概念であると考えています。その理由は追って述べていきますが、まず一つお願いです。今日の話がみなさんにとって少しでも有意義なものとなるよう、いまこの場では Web2.0 という言葉に予断を持たないようにしましょう。

さて、Web2.0 という言葉については、後ほど詳しくふれますが、ティム・オライリー (Tim O'Reilly) という人物が提唱したものです。非常に多義的な話であるため、様々な解釈が成り立ちます。そこで今日はこの Web2.0 をトレンド型、サービス型、テーゼ型の3つに分けて論じていきます。というのは、Web2.0 を論じますと、結局 Web2.0 とは何なのかというところから進まないことがあるからです。そうなるのは、ティム・オライリーの最初のメッセージが非常に多義的で論争的で多産的であったからなのですが、今日は少し議論を整理しながら話を進めたいと思っています。

もう一つのキーワードが図書館です。Web2.0 と同様に、図書館も様々な意味を持つ言葉です。国

立図書館もあれば、公共図書館もある。専門図書館もあれば、大学図書館もあるわけです。一口に図書館といっても様々な館種があるわけですが、今日は大学図書館を中心に話を進めていきます。そして、大学図書館にとっての Web2.0 の意味を考えていきましょう。ここで一つおことわりしておきますが、本日の参加者の中には、東海地区の公共図書館にお勤めの方や、独立行政法人や大学共同利用機関の研究図書館にお勤めの方もいらっしゃるようです。副題に大学図書館とついてはいますが、どのような図書館にとっても関わりのある内容です。館種の違いにとらわれることなく、自館に応用可能な部分を見出してくだされれば幸いです。

Web2.0—オライリーによる原則

それでは、まず Web2.0 の話から始めましょう。

アメリカの O'Reilly Media の創立者であるティム・オライリーが 2005 年に Web2.0 という考え方を体系的にまとめて提唱しました。"What Is Web 2.0 Design Patterns and Business Models for the Next Generation of Software" という論文に、彼の考えが集約されています¹⁾。この論文の中で、ティム・オライリーはこれからのウェブは従来のウェブに比して以下のような原則があるのではないかと述べています。

1. サービス提供者である。
2. データソースをコントロールできる。
3. ユーザーの無意識な参加を促す。
4. 集合知を利用する。
5. ロングテールを理解する。
6. プラットフォームを選ばない。
7. リッチで軽い。

ただ、ここで一つ注意しましょう。この7つの原則を逐一覚えることに意味があるわけではないのです。というのは、「Web2.0とは、○○○である」という明確・明瞭な定義はないからです。少なくとも最初の提唱者であるティム・オライリーは、明確な定義を下していません。オライリーは過去10年ほどのウェブの歴史を振り返り、近年ウェブで支持されているサービスを見渡しました。そして、その上で、先に述べたような特徴や原則を備えたサービスが、これからのウェブのスタンダードとなるのではないかと問題提起をしたのです。

そして、もう一つ注意しましょう。オライリーはこの中のどれが特に重要であると述べたわけはありません。また、これらの原則をすべて備えればWeb2.0であると述べたわけでもありません。繰り返しになりますが、オライリーは明確な答えを示したのではなく、論争的な問題提起を行ったのです。

Web2.0 – 様々な解釈

さて、ティム・オライリーの最初の提言が多義的・多産的なものであったため、そこには様々な解釈がなされました。主要なものをいくつか紹介しましょう。

- 小川浩の解釈：
「インターネット上でこの数年間に発生したWebの環境変化とその方向性（トレンド）をまとめたもの」（『ウェブ2.0ブック』インプレス、2006年、18頁）
- 梅田望夫の解釈：
「ネット上の不特定多数の人々（や企業）を、受動的なサービス享受者ではなく能動的な表現者と認めて積極的に巻き込んでいくための技術やサービス開発姿勢」（『ウェブ進化論』ちくま新書、2006年、120頁）
- 大向一輝の解釈：
「2006年現在にうまくいっているサービスをまとめたもの」（国立情報学研究所 平成18年度市民講座「8語で談じる情報学」第2回「次世代ウェブ」、2006-07-12）
- 岡本真の解釈：

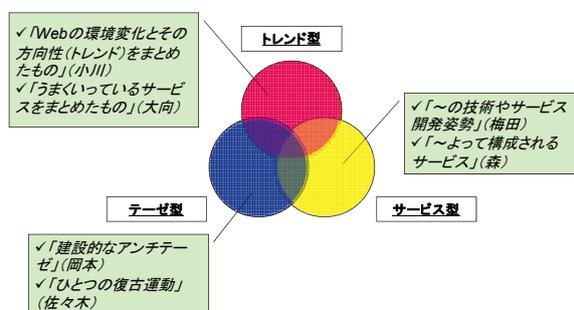
「過去10年に対する建設的なアンチテーゼ」（『Web2.0時代の図書館 – Blog, RSS, SNS, CGM』2006年）

- 森健の解釈：
「「ユーザー参加型」であり、ユーザーが提供したデータに基づく「膨大なデータベース」によって構成されるサービス」（『グーグル・アマゾン化する社会』光文社新書、2006年、60頁）
- 佐々木俊尚の解釈：
「Web2.0というムーブメントは九〇年代に失われつつあったインターネットの理想を取り戻そうという、ひとつの復古運動」（『次世代ウェブ』光文社新書、2007年、81頁）

ここに挙げたのは、最近発表された主な定義ですが、探せばそれこそきりがなくいろいろな解釈があることでしょう。

さて、ここに挙げた私を含め6人の論者の解釈は、決して一様ではありません。このことは先ほどから繰り返し述べているWeb2.0に明確な定義がないことの証明ともなっています。Web2.0には確固たる定義はないのです。しかし、その代わりに多様な解釈が存在します。これがWeb2.0という話題の大きな特徴であり、あたかもブームの様相を呈するほどに人々の関心を集める理由なのかもしれません。

とはいえ、多少の類型化は可能です。たとえば、上記の6人6様の解釈は、以下のように3つの類型化モデルに落とし込めるでしょう。



図：Web2.0 解釈の類型化モデル

一つはトレンド型です。この解釈は大掴みにみれば、良い意味で達観し、Web2.0とは「方向性（トレンド）をまとめたもの」（小川）、「うまくいっているサービスをまとめたもの」（大向）とみるものです。

二つ目は、サービス型です。「～の技術やサービス開発姿勢」（梅田）や「～によって構成されるサービス」（森）という表現にみてとれますが、ユーザー参加型でデータベースの仕組みを生かしたサービスや、その開発姿勢をWeb2.0とみなすものです。

三つ目は、テーゼ型です。「建設的なアンチテーゼ」（岡本）や「ひとつの復古運動」（佐々木）という言葉が示すように、Web2.0をより思想的な観点からとらえる見方です。

Web2.0に向けられた多様な解釈は、このように類型化できるわけです。ですが、大切なことはWeb2.0を語る際には、いったいどのような観点からWeb2.0をとらえようとしているのかを自覚することではないかと思えます。自覚するのは、いま類型化モデルにしたような大きな方向性のレベルで十分でしょう。しかし、自分が聞いたWeb2.0論がどのように類型化できるのか、あるいは自分が考えるWeb2.0論はどのように類型化できるのか、ということ意識しないと、Web2.0をめぐる議論は、なかなか深まることのないように思えます。

Web2.0 — 「Web2.0」という時代認識

Web2.0には明確な定義はありませんが、多様な解釈の余地や可能性があります。しかし、その多様な解釈に呑み込まれないように、様々な解釈の大きな方向性を明確に位置づけることが欠かせません。この認識を前提とした上で、次に進みましょう。多様なWeb2.0解釈を大きくトレンド型、サービス型、テーゼ型と3つに類型化しましたが、相異なる解釈の間には、一つの共通点があります。

その共通点とは、どの類型化モデルであっても、これまでと現在との間にある変化を認めていることです。たとえば、トレンド型に分類した二人は「この数年間に」（小川）や「2006年現在に」（大向）

と明確に時間で前後を区別しています。あるいは。サービス型の二人は、従来は往々にしてお題目に過ぎなかった顧客重視や顧客参加が、Web2.0によって根本的に変わってきていると感じ取っています。トレンド型では、いままでの過去を一面では否定的にとらえ、これから生まれ変わっていくというニュアンスで変化の兆しを見出しています。

このように3者3様ではあります、それぞれに変化を強く意識し、認識しているわけです。この変化の一つにはサービスの変化ですが、変化するのはサービスだけではありません。これまで利用者に提供されるだけだったサービスに利用者が参加していくというという意味では、利用者もまた変容しているのです。この変化・変容は当然ウェブ全体にも影響します。ウェブを形作るサービスが変化し、利用者が提供する側にも参画するという形に変容する以上、ウェブそのものも変革されていくわけです。ウェブはしばらくの間、サービスの提供者が利用者に対して一方向的にサービスを提供する場となっていました。しかし、ここに来て、ウェブは利用者もまた利用と同時に提供にも参画する場へと変革されつつあるのです。

図書館—様々な館種と大学図書館の位置

それでは、もう一つのキーワードである図書館の話へと転じていきましょう。図書館の現状を踏まえつつ、そこに今までお話ししてきたWeb2.0をどう絡めていくか、という点に話を集約させていきたいと思えます。

冒頭でも述べたように、図書館には様々な館種があります。まず国立図書館や公共図書館、あるいは専門図書館に比べて、大学図書館がどのような位置にあるのかを確認しましょう。国立国会図書館は近年目覚ましく電子化事業を進めています。私以上に若いスタッフが登用され、見事な実績を残している状況です。

これに対して苦境にあるのが公共図書館と専門図書館でしょう。特に公共図書館では地域間・自治体間の格差が著しくなっています。たとえば、今日この会場にもお越しですが、静岡県立図書館

のサイトは非常に見事なもので、その内容には目を見張ります。他方、同じ都道府県であっても、あまりにみすぼらしく、目を疑ってしまうような状況にある県立図書館も散見されます。都道府県においてすらこの状況であり、市町村間でみれば、サイトの出来不出来を論じる以前に2000自治体の中でそもそも公共図書館が設置されていない自治体も少なくはありません。専門図書館も同様です。長く続いた不況の影響もあり、専門図書館の閉鎖を伝えるニュースは決して絶えることがありません。専門図書館はいま再編の真っただ中にあるといえるでしょう。

では、大学図書館はどうなのでしょう。国立国会図書館は別とすれば、公共図書館や専門図書館に比べて、大学図書館は比較優位の状態にあるように思います。先ほどの公共図書館の例とは異なり、附属図書館を持たない大学の存在はほとんど考えられず、図書館のサイトもほぼ確実に存在しています。具体的な数値を引きましょう。上田修一さんの2006年の調査によれば²⁾、大学図書館のサイト開設率は90.5%、OPACのウェブでの公開率は76.5%に上っています。図書館そのものがない公共図書館の世界や、存続そのものが危ぶまれることが多い専門図書館に比べれば、はるかに優位な位置にあることは明らかでしょう。

しかし、大学図書館に課題を、特に大学図書館における電子化やウェブ活用の課題を感じないわけではありません。一つは電子図書館をめぐる試行錯誤です。まさかインターネットがこれほど成長し、社会基盤になるとはおおよそ想像しえなかっただけにやむをえないとも言えるでしょう。しかし、それでも一時期非常に盛り上がった電子図書館構想が実質的に頓挫してしまったことは、大きな機会損失ではありました。そして、もう一つがいま国立大学を中心に大学図書館が相当注力している機関リポジトリです。現在をWeb2.0時代ととらえるならば、これほど大学図書館界をあげて機関リポジトリに集中していてよいのでしょうか。機関リポジトリだけに傾斜していて、Web2.0時代に対応していけるのでしょうか。

図書館—大学図書館にとっての「Web2.0」

それでは、もう少しWeb2.0のほうに引き寄せて大学図書館を考えていきましょう。さきほどWeb2.0をトレンド型、サービス型、テーゼ型の3類型に区分しましたが、大学図書館にとってのWeb2.0を考えた場合、そこでいうWeb2.0とはこのタイプのどれにあてはまるのでしょうか。現状において、どれか当てはまるものがあるのでしょうか。

個別にみていきましょう。たとえば、トレンド型です。大学図書館のウェブ戦略として、言ってみれば大学図書館サイトとして、いまの時点でうまくいっているものはあるのでしょうか。あるいは、サービス型でみた場合、学生や教員を中心とした利用者の参加、つまりはユーザー参加をうまく引き出しているところがあるのでしょうか。そして、テーゼ型でみた場合、確固たる思想を抱いてウェブの活用が図られているのでしょうか。

もちろん、大学図書館がWeb2.0に即座に飛びつく必要があるわけではありません。しかし、少なくとも幾分はWeb2.0に学べるところがあるのではないかと思います。たとえば、さきほど機関リポジトリを話題にしましたが、確かに機関リポジトリにはそれはそれで一つの意味があるでしょう。また、同じく先ほど述べたように、公共図書館や専門図書館に比べれば、大学図書館ははるかに優位な立場にあるわけです。人員、設備、予算というリソースの点でも、状況ははるかの良いほうです。であれば、それだけの資産を既存のOPACの維持や機関リポジトリの構築にあてるだけでなく、Web2.0を一つのきっかけとしてもっと根本的でラディカルな変革に一步を踏み出すべきではないでしょうか。

ここで私からの提案です。たとえば今日ご紹介したWeb2.0の3類型モデルを使ってまとめれば、

- これまでの歴史を踏まえ、それを乗り越える意思を持ち（テーゼ型）、
- ユーザー参加によって、ユーザーが提供するデータに基づく「膨大なデータベース」をつくり（サービス型）、
- Webの環境変化とその方向性（トレンド）を

とらえた、うまくいっている（トレンド型）

ウェブ活用を試みてみてはいかがでしょうか。このような大学図書館にとっての Web2.0 的な展開は現実的なものにはみえないでしょうか。

図書館－「Web2.0」な大学図書館に向かって

この投げかけだけで終わってしまっても無責任ですので、たとえば Web2.0 を意識した展開として、たとえばこのようなユーザー参加ができるのではないかと、という案を 2 点述べてみたいと思います。

冒頭で Web2.0 の話をしましたときに、「ユーザーの無意識な参加を促す」と、「集合知を利用する」ということについてふれました。この 2 つを軸にします。ユーザー参加を促し、ユーザーが持つ知識や経験を集合体にして活用する際には、2 つの方法があります。一つは Explicit なユーザー参加であり、一つは Implicit なユーザー参加です。

まず Explicit と Implicit を説明しておきましょう。要するに明確な意思を持ってそうしているのが Explicit、逆に明確な意思はなく無意識にそうしているのが Implicit です。たとえば、本日の参加者の皆さんは明確な意識を持って本日この場にいらしています。これは明らかに Explicit な行動といえるでしょう。逆に偶然にどこかに赴いてしまうことは Implicit な行動です。たとえば、今日私は朝方に名古屋駅に降り立ちました。地下鉄の入口がわからず、人の流れの多いほうが地下鉄の入口であろうと思い、人の流れを追いました。すると、まったくの偶然ですが、ちょうど昨日中部地区では最大級となるミッドランドというビルが名古屋駅前でオープンになった日だったため、人の流れはすべてミッドランドへと向かっていたのです。当然、私も期せずして名古屋の新名所に足を運ぶこととなったわけです。これはまったく意識しなかった結果であり、その行動は極めて Implicit なものといえるわけです。このように我々の行動には、Explicit と Implicit という二つの側面が常につきまとうわけです。

さて、この Explicit と Implicit という行動をどのように生かせるでしょうか。まず Explicit の文

脈でいえば、利用者に意識してデータを作成してもらうという方法が可能ではないかと思えます。たとえば、教員や学生が大学図書館の蔵書に、書評や感想、あるいはメモという形で様々なコメントをつけられるようにしてはどうでしょうか。あるいは、この図書とこの図書は関連が深いというグルーピングを利用者自らができるようにしてはどうでしょうか。

これらの作業はこれまでは図書館員、あるいは図書館システム業者や書誌データ業者に依っていました。しかし、大学というコミュニティーの力を考えた場合、様々な分野で日夜、研究と教育に勤しんでいる教員や、学習に励んでいる学生は、書誌・所蔵データの増強の有力な担い手足りえるはずで³⁾。

では、Implicit なユーザー参加はどのように可能となるでしょうか。個人的には Explicit なユーザー参加より、こちらのほうが重要と思うのですが、たとえば利用者履歴を活用することで、Implicit なユーザー参加を実現できるでしょう。図書館には貸出記録という貴重なデータが蓄積されています。このデータを活用し、たとえば経済学部の学生が頻繁に借り出している経済図書を割り出します。そして、その図書は経済図書のスタンダードであろうと仮定し、OPAC の検索結果では上位に表示するという仕組みは考えられないでしょうか。あるいは、Amazon などでは実際に用いられていますが、学生が同時に借り出す頻度が高い図書 A と図書 B の組み合わせを割り出します。このようなデータを集めて適正な統計処理を加えることで、学生が OPAC で図書 A を予約しようとする際に、図書 B を併読図書として推薦することができるようになるでしょう。

複数の図書の中で優位な図書を決める、あるいは関連する図書を推薦するというのは、これまで主に図書館員によって担われてきました。しかし、もし、貸出記録のような利用者履歴を通して、Implicit なユーザー参加を促すことができれば、図書館におけるレファレンスを図書館員だけで担うのではなく、教員や学生もその輪に加わることを意味します。図書館員の役割を否定するわけで

はありませんが、このような仕組みが実現すれば、ときには決めつけともなりかねない一部の人間の目利きに依存しないサービス提供が実現するのこともまた事実です。これはまさに集合知といえるものでしょう⁴⁾。

さて、Web2.0 に学ぶことで大学図書館が実現できる可能性を二つの側面から語りましたが、最後に一点述べておきたいと思います。利用者履歴の活用というと、図書館の自由や利用者の秘密保持という図書館の文化からすると、暴論のようにも聞こえるかもしれません。そのような違和感が示されること自体は健全なことといえるでしょう。しかし、何事かを考える際に、「できない」を前提にする限り前には進みません。最終的な結論がどうであれ、まずは「できる」という観点から議論を始めるように願います⁵⁾。特に大学という真理を探究する場であればこそ、タブーを排して考える必要があるでしょう。たとえば利用者履歴を用いることで何ができるようになるのか、そのメリットとデメリットを冷静に見定めながら、利用・活用の可能性を追求すべきではないかと思えます。

[筆者注]

本稿は2007年3月7日に名古屋大学附属図書館で行われた2006年度第2回東海地区大学図書館協

議会研修会「Web2.0時代の図書館サービス」で行った講演「Web2.0時代の図書館－大学図書館にとってのWeb2.0」の内容を敷衍し、加筆・修正したものです。

なお、当日使用した報告用資料は以下のURLで公開しています。

[http://www.ne.jp/asahi/coffee/house/doc/tokai_ulib_conference\(20070307\).ppt](http://www.ne.jp/asahi/coffee/house/doc/tokai_ulib_conference(20070307).ppt)

- 1) Tim O'Reilly. What Is Web 2.0 Design Patterns and Business Models for the Next Generation of Software. 2005-09-30 Available from URL <http://www.oreillynet.com/lpt/a/6228>.
- 2) 上田修一. 大学図書館 OPAC の動向. (オンライン). Available from URL <http://www.slis.keio.ac.jp/~ueda/libwww/libwwwstat.html>
- 3) 岡本真. 「Web2.0」時代に対応する学術情報発信へ：真のユーザー参加拡大のためのデータ開放の提案. 情報管理. 49-11. 2007. Available from URL <http://dx.doi.org/10.1241/johokanri.49.632>
- 4) 岡本真. Web2.0時代の図書館－Blog, RSS, SNS, CGM. 情報の科学と技術. 56-11. 2006. Available from URL <http://ci.nii.ac.jp/naid/110004857462/>
- 5) 岡本真. 総論「価値観の交差点」. 情報の科学と技術. 56-9. 2006. Available from URL <http://ci.nii.ac.jp/naid/110004815075/>

図書館利用者の情報探索行動に関する実証的研究

名古屋大学附属図書館研究開発室

寺井 仁

1. はじめに

研究開発室の寺井です。ただいまご紹介いただいたように、私の研究のフィールドは認知科学ということで、人の認知、問題解決とか、ここに挙げていますような、情報探索行動を対象として研究を行ってきました。

本日はタイトルにもありますように、現在の図書館が持っている情報源、従来の伝統的な紙媒体資料である書籍や雑誌、そして近年では OPAC での検索や Web が使えるようになってきましたけれども、そういった複数の情報源を実際に利用者がどう使っているのかということ进行调查した結果についてお話したいと思います。

まず、現在の大学図書館を、図書館が持つ情報源と観点から考えてみたいと思います。一点目は、従来から使われてきた伝統的な紙媒体資料である書籍、雑誌です（物理的情報源）。これに加えて、電子的情報源として、OPAC や Web、電子ブックといったものが使えるようになってきました。さらに近年では、歴史的な貴重資料をどう電子化していくか、学術機関リポジトリの構築や、オープンコースウェアの開発等、電子的なコンテンツやサービスが提供され始めてきています。

ここで重要な点は、従来からある物理的情報源と新たに生まれてきた電子的情報源を如何に効率よく補完的に結びつけていくかという点にあると思います。図書館機能の高度化を支える上で、二つの重要な柱があります。一つが技術的側面で、これは物理的なモノをどう電子化していくか、検索システムをどう向上するか、また高度なナビゲーションというのはどのように考えていけばいいかということです。

もう一つが認知的側面。これは私が行っていま

すような、実際にサービスを受ける利用者の行動の理解です。具体的には、図書館で我々はいかに情報源や情報を活用しているのだろうかといったことや、またそこにどのような問題を抱えているのだろうかといったことの理解です。もちろん、これら二つの側面というのは独立しているわけではなくて、相互に深く結びついています。

今日のテーマである Web2.0、これに関しては岡本さんのほうから詳しいお話がありました、私なりの捉え方を述べておきたいと思います。Web2.0 の定義はさまざまですが、利用者中心的な考え方が大きな特徴であると思います。“利用者の参加”、“利用者の貢献”、“利用者自身の体験”、“利用者の知識”、“利用者間の信頼”といった特徴はすべて、利用者に向かっています。コンピュータの歴史でもそうですが、Web も成熟していくことによって、現在は利用者に向かってくる、それが Web2.0 と呼ばれている段階ではないかと感じています。この点で、私がやっているような認知的視点での研究と Web2.0 という考え方は、つながりが深いと思っています。

2. 問題解決と情報探索

では、私がこれまで行ってきた利用者の情報探索行動について、紹介していきたいと思います。実験の話をする前に、まず情報探索について、少し詳しく考えてみたいと思います。

我々の日常は、問題解決の連続だとよく言われます（スライド 1）。問題解決は、次に示した四つの要素で規定されます。自分が現在置かれている状態である「初期状態」があり、到達すべき「目標状態」、つまりゴールがあります。「操作子」というのは、ある状態から別の状態に変化させるた

めの操作、行動のことです。問題解決において、我々はいろいろな行動を試行錯誤するだけでなく、過去の経験などを用いて適度に「制約」を加えて結構効率よく問題を解いています。

「問題解決」の連続

- 現在自分が置かれている状態 → 解決すべき目標
 - “今日の朝ごはんは何を食べるか?”
 - “面白いミステリーが読みたい”
 - “テレビのリモコンがない”

全問題空間

問題解決を規定する4つの要素

- 初期状態: 現在置かれている状態
- 目標状態: 到達すべき状態
- 操作子: ある状態から別の状態に変化させるための操作
- 制約: 操作子の適用に課せられている制約条件

2007/03/07 東海地区大学図書館協議会事務局 5

スライド 1

問題は大きく二つのタイプに分けられます (スライド2)。一方が、「よく構造化された問題」、他方が、「構造化されていない問題」です。よく構造化された問題というのは、先ほど示した問題解決の四つの要素がはっきり定まっている問題で、手続き的に問題を解決できます。一方、構造化されていない問題というのは、問題解決の要素がはっきり定まっていない問題のことです。日常の問題というのは、多くが構造化されていない問題に分類されます。つまり、目標が曖昧であったり、何をすればよいか明確に定まっていないものがほとんどです。このような問題解決において不足している情報を入力するための行動として、情報探索が行われると考えることができます。

問題の2つのタイプ

- よく構造化された問題 (well-structured problem)
 - 問題解決の要素がはっきり定まっている
- 構造化されていない問題 (ill-structured problem)
 - 問題解決の要素がはっきり定まっていない
 - ex. 目標がはっきりしない、手続きが明確でない

情報探索

- 問題解決において不足している情報を入力するための行動

2007/03/07 東海地区大学図書館協議会事務局 7

スライド 2

情報探索の研究というのは歴史が古く、様々なモデルが考えられてきました。最も単純には、情報ニーズが生まれて、それを満たす情報が見つかった時点で情報探索が終了するというモデルで表されます。しかし、一般的には、情報探索というのはそんなに単純なものではないということが明らかになってきました。

その一例を示したのが、こちらの Ellis と Wilson による情報探索の段階的なモデルです (スライド3)。左から情報探索が始まって、連鎖探索と書いてありますけれども、欲しい情報が見つかり、そこから新たに情報のニーズが生まれ、情報探索が連鎖的に進んでいきます。それと並行して、例えばブラウジングのような行動であったり、それほど優先度は高くないけれども、何かのついでに見つかればいい情報をチェックしているモニタリングのような行動など、複数の情報探索が並列的に進行しています。その後、情報源を選別して、抽出したり、妥当性を検証したりして、行きつ戻りつしながら情報探索が進んでいきます。

情報探索の段階モデル [Ellis, 1969; Wilson, 1999]

```

    graph LR
      A[探索開始 (starting)] --> B[連鎖探索 (chaining)]
      B --> C[情報の選別 (differentiating)]
      C --> D[情報抽出 (extracting)]
      D --> E[妥当性の検証 (verifying)]
      E --> F[探索終了 (ending)]
      G[ブラウジング (browsing)] --> B
      G --> C
      H[情報監視 (monitoring)] --> B
      H --> C
      H --> D
      H --> E
  
```

2007/03/07 東海地区大学図書館協議会事務局 11

スライド 3

特に連鎖的に情報探索が進んでいくことを示したものが、この Berry picking Model における発展的検索です (スライド4)。情報探索の過程で、ある情報を見つけ、そこからさらに別の情報ニーズが生まれて、というように、情報探索における受動的な側面というものを非常に重視したモデルになっています。

先ほど日常における問題というのは、構造化されていない問題がほとんどだということを述べま

情報探索

- 「ベリー・摘みモデル(Berrypicking Model)」における発展的検索[Bates, 1989]

スライド 4

情報探索

- 構造化されていない問題における2つのゴール
 - 目標状態
「～についてレポートをまとめる」
 - 情報ニーズ
「～についての情報がほしい」
- 情報探索プロセス
 - 知識構造を変化
 - 必要とする情報(情報ニーズ)が変化
 - 目的(目標状態)も変化

[Bandura, 1986, 三輪, 2003]

スライド 5

したが、構造化されていない問題には大きく二つのゴールがあります(スライド5)。一つは「目標状態」、もう一つがそこから生まれる「情報ニーズ」です。ちょっとここで想像してほしいのですが、大学の授業で、来週までに“認知科学についてのレポート”を書いてきてくださいと言われた学生がいたとします。そうすると、まさに“認知科学についてのレポートを書く”ということが目標状態になるわけです。そして、この学生が認知科学についてあまり詳しくないとすると、“そもそも認知科学って何だろう”ということで情報ニーズが生まれて、情報探索が始まります。

その結果、例えばWebを検索して、実験心理学とか人工知能というキーワードが関係しているということに気がつくだろうと予想されます。そこからまた新たな情報探索が生まれます。もちろ

ん情報ニーズが変化するだけでなく、情報ニーズの変化は目標状態にも影響を与えます。初めは“認知科学についてのレポート”というかなりあいまいな目標状態でした。それが例えば“情報処理システムとしてみた人の認知過程”という具体的なタイトルでレポートを書こうというような状態に変化するだろうということが予想されます。つまり、ここで強調したいのは、情報探索は、情報ニーズを変化させるだけでなく、その結果として目的(目標状態)自体も大きく変化させるプロセスだということです。

近年では、情報探索を通して生まれる予期せぬ発見、「情報遭遇」と言われていますけれども、こういった現象が注目されています。ここに図示しましたが(スライド6)、ある目的で情報を探している過程で、本来の目的とは関係ないけれど、気になる情報が見つかり、いったんわき道にそれて情報探索を行うプロセスを情報遭遇という言い方であらわしています。

探索を通じた予期せぬ発見

- 情報遭遇 (IE: Information Encountering)
 - 情報探索において本来の目的とは異なるが興味ある情報を発見すること
- セレンディピティ
 - 掘り出し物的発見

情報探索 ≠ 必要とする情報を単に取得する過程ではない

[CROMBIE, 2004]

スライド 6

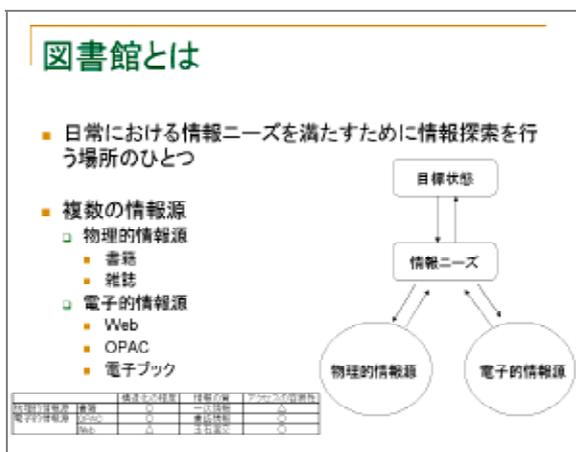
こういった情報遭遇の概念は、科学的発見などにおいて重要な役割を果たしていると考えられている「セレンディピティ(掘り出し物的発見)」につながるプロセスであると考えられます。

これまで見てきたように、情報探索というのは、必要としている情報を見つけて、そこで終わるような単純なプロセスではなくて、探索すること自体に大きな意味があると言えるのではないかと思います。

3. 図書館における情報探索行動

では、以上の話を背景として、実際に私がこれまで図書館で行ってきた研究について、具体的なお話をしたいと思います。

図書館は、日常において情報ニーズを満たすために情報探索を行う場所の一つです。特に大学図書館であれば、大学生、また教員にとって、この側面は非常に強いと思われます。図書館において、我々は目的を持って情報を探すが、冒頭で述べたように、現在の図書館には物理的情報源である書籍や雑誌がある一方、電子的情報源である Web、OPAC、また最近では電子ブックなどが利用可能になっています (スライド7)。



スライド 7

情報ニーズを満たすために情報探索が行われますが、同じ情報を探すにしても、それが含まれる情報源の性質は大きく異なります。構造化の程度であったり、含まれる情報自体の質であったり、情報源へのアクセスの容易性といったもの、それぞれすべて異なっているわけです。そのため、問題解決や情報探索は、利用される情報源からも大きく影響を受けているだろうことが予想されます。

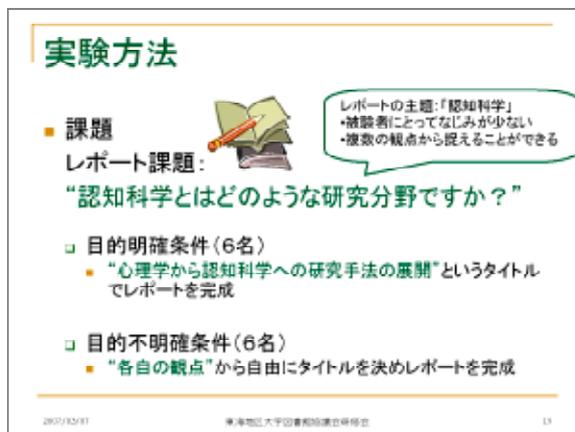
実験では、利用者の情報探索行動を明らかにする際に、利用される情報源 (「物理的情報源」と「電子的情報源」) と、目標状態の質が情報探索に与える影響に着目しました。図に示した下の部分 (利用される情報源) と、上の部分 (目標状態) に相当します。

3.1 実験方法

実験は、大学生 12 名を被験者として、名古屋大学附属図書館 3 階の学習用書籍のフロアで実施しました。

課題は、先ほど少しお見せしましたが、「認知科学とはどのような研究分野ですか?」というレポート課題を使い、実際に被験者に取り組んでもらいました (スライド 8)。レポートの主題として「認知科学」を選んだ理由ですが、一つは被験者にとってなじみが少ないことがあげられます。つまり、被験者にとって既知の問題ではないということです。もう一つは、認知科学は学際的な研究分野であるため、複数の観点からとらえることができ、少しネットで調べただけでは回答できない問題だからです。つまり、少し複雑な問題になっています。

実験では 12 名の被験者を 6 名ずつ異なる 2 つの条件に割り振りました。「目的明確条件」と「目的不明確条件」です。目的明確条件ですが、こちらは「心理学から認知科学への研究手法の展開」というタイトルでレポートを完成させてくださいと教示を行いました。目的不明確条件では、「各自の観点で自由にタイトルを決めてレポートを完成させてください」と教示を行いました。つまり、目的不明確条件に対して明確条件は心理学の研究手法という点を出発点として、そこから認知科学の研究手法との違いを述べていけばよいため、ステップ・バイ・ステップで段階的に問題を解いていけるような条件になっています。



スライド 8

3.2 データの収集方法

データの収集方法ですが、三つの手法を併用しました（スライド9）。一つが頭部カメラです。写真に実験時の被験者の様子を示してありますが、頭のところにヘッドバンドの先に小さいカメラがついています。これによって、被験者が実際に何に注目していたのかがわかります。もう一つがコンピュータの操作記録です。Web探索やOPAC検索における行動、どういったキーワードが使われていたのか、どういったページを見ていたのかということがわかります。またレポートの執筆の過程も捉えることができます。最後が発話プロトコルです。発話プロトコルというのは、実験を行っている際に、被験者にそのとき考えていることをそのままひとり言として口に出してくださいというものです。これは認知研究において、ブラックボックスである心の働きというものをとらえるために使われてきた方法論の一つです。もちろんこれですべてがわかるわけではないため、先の2つの行動データも含めて複合的に被験者の行動・思考を明らかにしていきます。

実験方法

- データの収集
 - 頭部カメラによるビデオ画像
 - 何に注目していたのか
 - 無意識的な行動を含んだ豊富なデータが得られる
 - コンピュータの操作記録
 - Web探索やOPAC検索における基本的行動(検索キーワード、閲覧されたページ等)を明らかにする
 - レポート執筆の過程を明らかにする
 - 発話プロトコル(海保・原田, 1993; Simon, 1988)
 - 認知研究において、心的な問題解決プロセスの分析に効果的に用いられてきた
 - 行動だけでは捉えきれない高次の認知プロセスについて明らかにする

スライド 9

3.3 データ分析

実際に先ほどの三つのデータを対象に、被験者の各行動にタグを付与していきます。具体的には、どのような対象に対して、どういった行動を行っていたのかという単位でタグを付けます（スライド10）。例えばレポートという対象であれば、執筆するとか読むといった行動にコード化します。

また、Webであれば、どのようなキーワードを入力していたのか、どのような検索結果を閲覧していたのか、どのようなページを見ていたのかとコード化します。

これが分析中の画面です（スライド11）。左上は頭部カメラ映像、右側はコンピュータの操作記録です。左下は、前述のタグになります。どのような対象に対して、どのような行動が行われていたのかをコード化していきます。ここには、具体的な内容や発話も記述しています。

実験方法

- データの分析
 - 被験者の各行動にタグを付与[海保・三輪, 2003を採用]

対象	行動
レポート	執筆する 読む
Web	キーワード入力 検索結果閲覧 特定ページ閲覧
OPAC	キーワード入力 検索結果閲覧 特定ページ閲覧
書籍	書目名閲覧 書籍を挟む
その他	移動

スライド 10

スライド 11

3.4 手続き

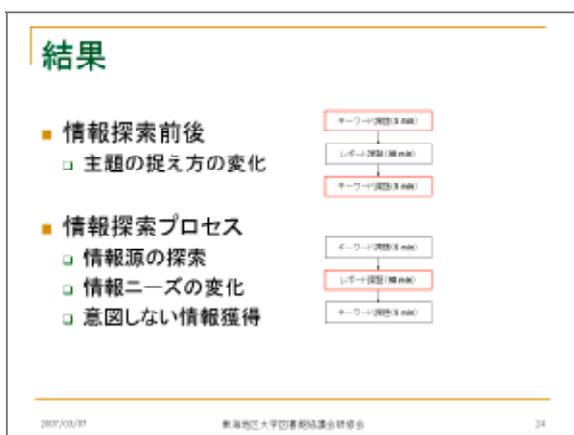
実験では、90分間のレポート課題の前後に「キーワード課題」というものを課しています。これはそれぞれ5分ずつですが、主題に関連するキーワードを列挙してもらうというを行っています（スライド12）。なぜこのようなことを行ったのかについては、次に述べます。



スライド 12

3.5 実験結果

結果は、大きく二つに分かれています（スライド13）。情報探索前後と情報探索プロセス自体の結果です。情報探索前後については、先ほど述べたレポート課題の前後で行ったキーワード課題を分析しています。これを比較することによって、情報探索を通してどのように主題の捉え方が変化しただろうかということがわかります。もう一つの情報探索プロセスは、レポート課題を行っている間の行動記録をもとに、情報探索の過程でどのような情報源が用いられ、情報ニーズがどのように変化していたのか、また意図しない情報の獲得は起こっているだろうかということを分析しています。

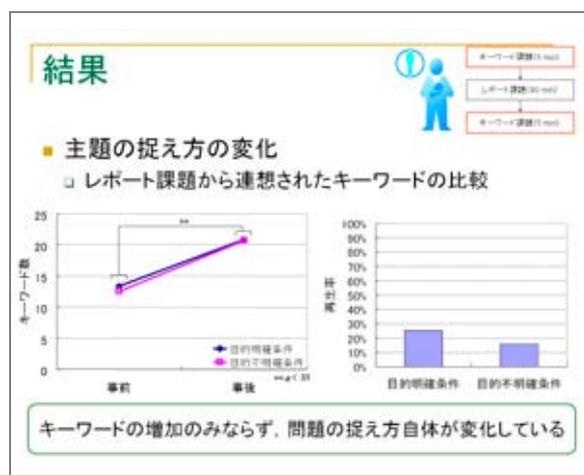


スライド 13

主題の捉え方の変化

では、最初に、前後のキーワード課題を比較した結果を示します（スライド14）。主題のとらえ

方が情報探索を通してどのように変化したのかを示しています。横軸がレポート課題の前後を表しています。縦軸がキーワードの数で、想起されたキーワードの数を表しています。青い線と赤い線はそれぞれ目的明確条件と目的不明確条件です。条件間の差はなく、事前・事後の間に差がありました。つまり、条件には関係なく、事前よりも事後においてキーワード数が増えていました。これは予想される結果で、情報探索を通して主題に関して連想されるキーワードが増加したことを意味しています。



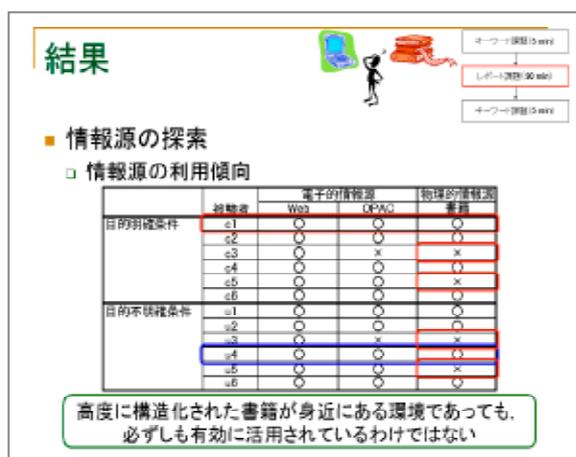
スライド 14

おもしろかったのは、右側の結果です。再生率と書いてありますが、どういう意味かということ、事前のキーワード課題で想起されたキーワードが、事後においても同様にキーワードとして想起された割合です。事前に想起されたキーワードに、単に、情報探索を通して新しいキーワードが追加されただけであれば100%になります。これも条件間に差はないのですが、両条件共に再生率はわずか20%前後にとどまっています。これは、情報探索を通して単にキーワードが増えただけでなく、問題の捉え方自体が大きく変化していたことを示しています。

情報源の探索

続いて、レポート課題中の情報探索のプロセスについて見ていきたいと思えます。まず、情報探索の中で、情報源がどのように使われていたのか

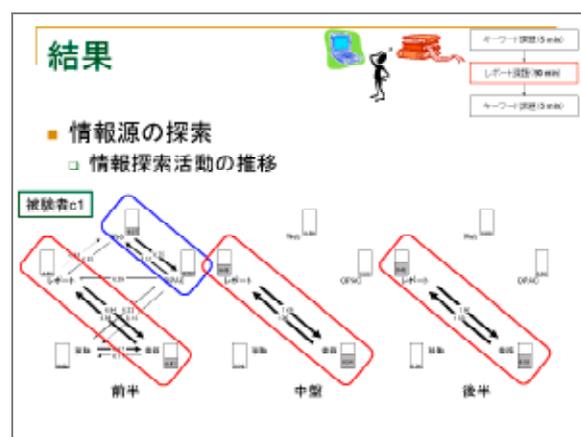
について分析しました（スライド15）。表では、電子的情報源である Web と OPAC、そして物理的情報源である書籍の利用についてまとめてあります。「○」がレポート作成時に利用された情報源、「×」が利用されなかった情報源です。赤で囲まれた部分、それぞれ条件ごとに2名ずついますが、書籍を全く使っていない様子でした。全体で12名のうち4名は書籍を全く使わなかったこととなります。図書館で実験を行ったわけですが、構造化された書籍が身近にあるような環境であっても、必ずしも活用されていないというのは、驚きでした。



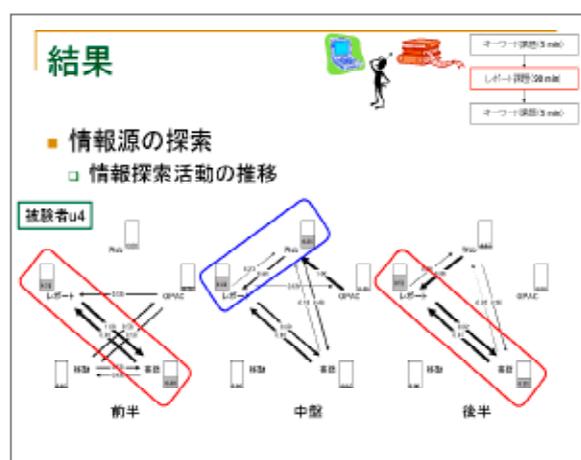
スライド 15

次に、各情報源を使っていた被験者 c1 と u4 を対象に、もう少し細かく見ていきます。まず、被験者 c1 です（スライド16）。これは何をあらわしているかという、レポート課題には90分間取り組んでいます、それを前半と中盤と後半という形で3フェーズに分けて、各フェーズにおいてどのような行動が現れていたのかを分析した結果になります。レポートに対する行動だったのか、Web に対する行動だったのかという形で5つの行動に分けています。図中の四角いバーは、各フェーズの中でどれぐらいの時間、その行動を行っていたのかを割合であらわしています。各矢印はそれぞれの行動間の遷移率になっています。数字が遷移確率で、矢印の太さはそれに対応したものになっています。

被験者 c1 は、前半では書籍および Web を頻繁に使ってレポートに取り組んでいます。しかし、



スライド 16



スライド 17

後半以降では書籍だけしか使用しなくなりました。Web は全く使わないというような状態でした。

同様に、物理的情報源・電子的情報源の両者を利用して被験者 u4 を見てみると、パターンは違うのですが、前半は書籍、中盤は Web、後半はまた書籍というように、情報源の利用にフェーズごとの偏りが見られました（スライド17）。

そこで情報源利用の推移という形で、前半・中盤・後半でどの情報源がより使われていたかを比較したところ、全体的に全フェーズを通してバランスよく情報源を利用している被験者というのは、わずかに1名だけでした。図書館の中は、書籍も身近にあり、コンピュータも使えますので、情報源間の渡り歩きというか、頻繁な行き来が生まれると予想していたのですが、どうもそうではないようです。

情報ニーズの変化

レポート課題を行っているときの、情報ニーズの変化について分析した結果について紹介します。ここでは検索キーワードの変化として情報ニーズの変化を捉えています。これがその一例です(スライド18)。左側が時間で、その横が利用されたサーチエンジンが示されています。さらにその横に、どういったキーワードが入力されていたのかが示されています。ここで注目したいのは情報ニーズの変化、つまり、情報探索を通して生まれる新規キーワードの数の変化です。

結果

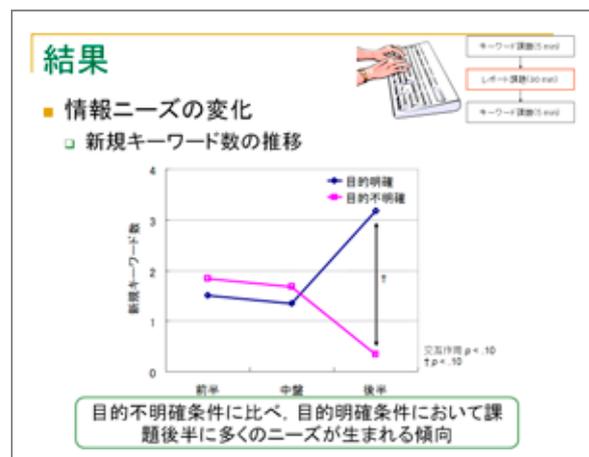
■ 情報ニーズの変化

□ ≡ 検索キーワードの変化

時刻	検索エンジン	キーワード	検索対象
0:21:04	Google	心理学	心理学
0:22:00	Google	心理学の歴史	心理学
0:23:00	Google	心理学	心理学
0:24:00	Google	心理学	心理学
0:25:00	Google	心理学	心理学
0:26:00	Google	心理学	心理学
0:27:00	Google	心理学	心理学
0:28:00	Google	心理学	心理学
0:29:00	Google	心理学	心理学
0:30:00	Google	心理学	心理学
0:31:00	Google	心理学	心理学
0:32:00	Google	心理学	心理学
0:33:00	Google	心理学	心理学
0:34:00	Google	心理学	心理学
0:35:00	Google	心理学	心理学
0:36:00	Google	心理学	心理学
0:37:00	Google	心理学	心理学
0:38:00	Google	心理学	心理学
0:39:00	Google	心理学	心理学
0:40:00	Google	心理学	心理学
0:41:00	Google	心理学	心理学
0:42:00	Google	心理学	心理学
0:43:00	Google	心理学	心理学
0:44:00	Google	心理学	心理学
0:45:00	Google	心理学	心理学
0:46:00	Google	心理学	心理学
0:47:00	Google	心理学	心理学
0:48:00	Google	心理学	心理学
0:49:00	Google	心理学	心理学
0:50:00	Google	心理学	心理学
0:51:00	Google	心理学	心理学
0:52:00	Google	心理学	心理学
0:53:00	Google	心理学	心理学
0:54:00	Google	心理学	心理学
0:55:00	Google	心理学	心理学
0:56:00	Google	心理学	心理学
0:57:00	Google	心理学	心理学
0:58:00	Google	心理学	心理学
0:59:00	Google	心理学	心理学
1:00:00	Google	心理学	心理学

■ 新規キーワード
※課題文に含まれる
語句は除く

スライド 18



スライド 19

新規キーワード数の変化を先ほどと同様に前半・中盤・後半という形で分析したのが、こちらのグラフです(スライド19)。縦軸は新規キーワード数です。青い線が目的明確条件、赤い線が目的不明確条件を表しています。後半の部分で目的明

確条件が不明確条件よりも、より新規キーワードを生成しているということが、統計的な差として表れました。これは、目的が明確であるほど課題後半においてより多くの情報ニーズが生まれる傾向があるということを示しています。

意図しない情報獲得

最後に、情報探索の過程で、意図しない情報獲得が起こっていたのかについて見てみます(スライド20)。実験ではOPACで検索をした後に、書誌情報についてメモをとることを許していました。このメモを頼りに、被験者は館内を歩いて書籍を探しに行っていたわけです。分析では、これに着目し、メモされていた書籍を、獲得しようと意図していた情報としました。被験者毎にメモされていた書籍の数をカウントし、借りてきた本が、メモに一致していたか否かを比較しました。その結果、メモをとったすべての被験者において、館内を探索し書架をブラウズする過程で、目的の書籍以外の書籍をピックアップしてくる行動が認められました。

結果

■ 意図しない情報獲得

目的明確	被験者	メモ	一致	新規
01		3	1	3
02		2	1	1
03		2	1	1
04		2	1	1
05		2	1	1
06		2	1	1
07		2	1	1
08		2	1	1
09		2	1	1
10		2	1	1
11		2	1	1
12		2	1	1
13		2	1	1
14		2	1	1
15		2	1	1
16		2	1	1
17		2	1	1
18		2	1	1
19		2	1	1
20		2	1	1
21		2	1	1
22		2	1	1
23		2	1	1
24		2	1	1
25		2	1	1
26		2	1	1
27		2	1	1
28		2	1	1
29		2	1	1
30		2	1	1
31		2	1	1
32		2	1	1
33		2	1	1
34		2	1	1
35		2	1	1
36		2	1	1
37		2	1	1
38		2	1	1
39		2	1	1
40		2	1	1
41		2	1	1
42		2	1	1
43		2	1	1
44		2	1	1
45		2	1	1
46		2	1	1
47		2	1	1
48		2	1	1
49		2	1	1
50		2	1	1
51		2	1	1
52		2	1	1
53		2	1	1
54		2	1	1
55		2	1	1
56		2	1	1
57		2	1	1
58		2	1	1
59		2	1	1
60		2	1	1
61		2	1	1
62		2	1	1
63		2	1	1
64		2	1	1
65		2	1	1
66		2	1	1
67		2	1	1
68		2	1	1
69		2	1	1
70		2	1	1
71		2	1	1
72		2	1	1
73		2	1	1
74		2	1	1
75		2	1	1
76		2	1	1
77		2	1	1
78		2	1	1
79		2	1	1
80		2	1	1
81		2	1	1
82		2	1	1
83		2	1	1
84		2	1	1
85		2	1	1
86		2	1	1
87		2	1	1
88		2	1	1
89		2	1	1
90		2	1	1
91		2	1	1
92		2	1	1
93		2	1	1
94		2	1	1
95		2	1	1
96		2	1	1
97		2	1	1
98		2	1	1
99		2	1	1
100		2	1	1

メモ: OPAC検索でメモした書籍の数
一致: メモした書籍を借りた数
新規: メモした書籍以外を借りた数

スライド 20

4. まとめ

結果をまとめます。情報探索前後に主題から想起されるキーワードの変化から、情報探索を通して問題のとらえ方が大きく変化していることが確認されました。また、情報探索プロセスという観点からは、電子的情報源をより好んで使用していることが明らかになりました。12名の被験者のう

ち4名は、図書館館内であっても書籍を全く使っていませんでした。物理的情報源・電子的情報源の双方を利用していた被験者も、プロセスとしてみると、その時々で情報源の利用に偏りがありました。一方、明確な目的を持っていた場合（目的明確条件）には、後半に行くに従って情報ニーズが増加していく傾向が認められました。また、情報探索の過程で、意図しない情報獲得が起こっていることが確認されました。以上が、私が図書館で行った被験者実験の結果です。

情報探索というのは冒頭でも述べましたように、単に必要とする情報を得るための手段として考えるのではなくて、探索という行為自体に大きな意味があるだろうと思っています。これは実験の結果からも裏づけられたかと思っています。

最後に、これまでの図書館とこれからの図書館について利用者の観点からまとめてみたいと思います。これまでの図書館というのは、図書というモノの管理に重きが置かれていたと思います。例

えばOPACは、モノとして図書を管理し、検索された図書に関する情報が提供されます。つまり、利用者が必要だと意識できるモノに関する情報を提供するためのシステムです。

探索すること自体の意味ということ考えた場合、これからの図書館というのは探索を通して何か新しい発見の機会を提供するような場であったり、探索すること自体の楽しさというものを提供できる場であってほしいと思っています。私の研究室は図書館の一角にあり、研究に行き詰ったとき、図書館内を昼夜構わず歩きまわることがあります。その中でたまたま目にとまった本などから、“あ、こういった観点っておもしろいんじゃないかな”といった感じで、いろいろなことがつながっていくときがあります。もちろんそれが身になっているかどうかは別ですが。図書館は、そういった楽しさが感じられる、発見の場を提供できるようなところであってほしいと思っています。以上です。

Web2.0 時代の新たな図書館サービスの展開

農林水産省農林水産技術会議事務局筑波事務所研究情報課

(農林水産研究情報センター) 林 賢 紀

1. はじめに

この講演では、先の岡本さんの講演「Web2.0 時代の図書館－大学図書館にとっての Web2.0」での、Web2.0 とは何か、何が変わったのか、というお話を受けて、図書館では何ができるのかについて触れたいと思います。Web2.0 はパスワードではなく、図書館の世界でも活用でき、もう実際にその要素を生かしたサービスが始まっています。

スライドが間に合わなかったので、スクリーンだけとなりますが、大学図書館の方が作られた検索インターフェース「所蔵館マップ」¹⁾ をご紹介します。このサービスでは、ISBN を入力すると Amazon から書誌情報と書影を取得して表示するほか、NACSIS WebCATPlus を検索し、所蔵機関を Google Map を利用して地図上に示すことができます。画面では、岡本さんの著作「これからホームページをつくる研究者のために」を検索した結果が表示されています。これで、例えば静岡県立大学短期大学部附属図書館や、静岡県立大学附属図書館などで所蔵していると言うことが地図上で分かります。本の表紙等の画像は Amazon から引っ張ってきます。画像は Amazon.co.jp へリンクしているので、そのまま書籍を購入することもできます。Amazon, WebCATPlus, Google MAP という 3 つを組み合わせたこのサービスの作成は、多少プログラミングの知識は必要になりますが、普通の図書館員でもこのようなサービスを作ることができる、これも Web2.0 がもたらした効果の一つだと考えます。

ここで、私も農林水産研究情報センターのご紹介を簡単にいたします。農林水産省の試験研究機関は北海道の紋別から沖縄、石垣島まで全国に 65 の研究拠点があり、それぞれの地域に分散し

て、地域に適した農業、林業、水産業の研究を行っています。これらのユーザーに対して均一で偏りのないサービスを実現するためにネットワークの整備を進め、現在はインターネットを中心としたサービスの展開を図っています。

インターネットと関係の技術はどんどん進歩しています。また、サービスも進化する一方で、一度導入したシステムもどんどん陳腐化してゆきます。これらのリニューアルを常に繰り返しながら、利用者にとって最適なサービスを提供し続けていきます。

2. Web2.0 とその進化

2.1 ユーザ参加型への変化

Web2.0 とは、新しい環境変化とそのトレンドである、ということが先の岡本さんの講演でも触れられていました。その要素もいくつかあげられていましたが、例えばデータソースをコントロールできるということ、それはユーザー側で例えば Amazon や Webcat のデータをコントロールする、中身を変えるというより、むしろ手元に引っ張ってきて自分の好みに合わせて使うようになる、ということです。さらにサービスを利用するプラットフォームも、Web ブラウザさえあればよく、また、そのインターフェースもリッチで軽くなっています。このように、発信手法や利用方法がどんどん進化してきました。

では、Web2.0 の前はどうか。簡単な比較表を作ってみました(表1)。一時、ホームページを作成することがブームであった時代は、これからはホームページで情報発信だといってエディタで Web ページを書き、またユーザーからコメントが欲しいから掲示板も付けようというのが、

Web2.0 より前のホームページの例です。

表1 Webの進化-情報発信と共有への参加

Web2.0 以前	Web2.0	進化した点
個人のホームページ、掲示板	blogでの記述とRSSでの記事配信	blog同士がコメント、トラックバックでつながるRSSで更新情報を自動通知
パソコン通信のフォーラム	ソーシャルネットワーク (mixi など)	「個人」同士がネット上でつながる
Webブラウザのブックマーク	ソーシャルブックマーク (はてなブックマーク (http://b.hatena.ne.jp) など)	ブックマークを共有し、関心のある情報源をみんなで公開、共有する

これが最近になると、自分の意見や日記的な記事を書いたりコメントを受け付けるシステムとしてblogが利用されるようになりました。Webブラウザを使ってフォームに必要な単語や文字を入れると、blogのシステムがHTMLを自動的に生成して、ホームページ全体を仕上げます。非常に便利です。更新した後は、こちらから知らせることなく、RSSを使って自動的に新着情報を配信することができます。

では、これらはWeb2.0以前と何が違うのか。これは先ほどの岡本さんの事例にもあったように、自分の発言したblogに対して、コメントやトラックバックができる、あるいはRSSを配信することで、ほかのblog同士、あるいはソーシャルブックマークによって、他者とだんだん繋がってゆくという進化を遂げています。

個人同士の繋がりと議論の場、というと、一昔前、特にインターネット以前のクローズドな世界ではNiftyServeのようなパソコン通信でフォーラムに入ってそこでディスカッションをする、というのが当たり前でした。これは会員限定でさらにフォーラムに加入して、というクローズドなイメージがあり、また敷居が高く感じられました。これが現在ではmixiなどのソーシャルネットワークによって、個人同士がコミュニティを作って

ネット上でどんどん繋がってゆく。初めにすでにmixiを利用している友人などから招待されることが必要ですが、一度入れば中にあるコミュニティに参加することは簡単で、敷居もとても低いです。

さらに、自分の興味のある情報を共有しよう、という動きもあります。今まで自分のパソコンの上にしかなかったお気に入りのサイト、ブックマークを共有しましょうというサービスが、ソーシャルブックマークです。例えば、誰かのblogの記事が興味深い、参考になりそうだと言うことでブックマークすると、他にも何十人もブックマークをしている。すると、この情報は人気があるから見た方がいいかもしれないという判断ができた、今こんなことに関心を持っている人がいる、ということが分かります。

このように、情報を発信することの敷居やコストは下がり、さらにインターネット上の情報をみんなで公開し共有することができる環境へと変化してきました。これがWeb2.0の根幹になるものだと考えます。今は情報発信と共有、また利用者がこれに参加するネットワークへと変わっていく状態にあると言えます。

2.2 図書館と周辺環境の変化

オンライン書店も古くからあるサービスです。丸善さん、紀伊国屋さん、ほかにもシロネコ八重洲さんとかいろいろありますが、特に今、オンライン書店といえばAmazonというイメージがあります。では、Amazonは何がすごいのかについてお話しします。

オンライン上で検索して、購入して、すぐ届く。追加料金を払うと24時間以内に注文した本が届きます。また、販売している書籍についての利用者のレビューが載っている。本の感想が自由に書き込めて、この本は良かった、この本は全然だめでしたという内容が批評として載っていて、自由に見ることができます。ここまでなら、bk1など他のオンライン書店でもサービスしていますが、Amazonがほかより前に一歩出たのはなぜか。それはAPI (Application Program Interface) が公開されているからです。APIが用意されると何がで

きるのかというと、自分の PC 上の Web ブラウザでなくプログラム上で直接相手のデータを読み出し、好きなように表示することができるようになります。先の、「所蔵館マップ」もこの仕組み、API を利用しています。API を公開することで、Amazon は単なるオンライン書店ではなく、いわば書誌データを提供するプロバイダに変化してきたのです。

Amazon ではこのサービスを AWS (Amazon Web Service) と呼んでいます。基本的な書誌情報である定価、タイトル、責任表示、書影などを取得できるサービスを無料で提供しています。AWS を利用することで、提供されている書誌情報に第三者が付加価値を付けた形のサービスを行うことができます。

「所蔵館マップ」では、ぱっと見た画面のどこにも Amazon や Webcat をイメージさせるロゴなどはありません。このように、利用者の目に見えないところで、様々なサービスを部品のように組み合わせる Amazon やほかの Web サービスからデータを持ってくるのが個人でも簡単にできる時代になりました。

従来の図書館のサービスについて振り返ってみます。情報発信だというと、例えばホームページを作ったり、電子メールを使って SDI (Selective Dissemination of Information) サービスを行ったり、図書館発のメールマガジンを出す、などが従来から行われているサービスです。また、大学図書館の Web サイトの設置率は 90%²⁾ ですが、Web サイトによるサービスは基本的にはお客さんが来てくれるのを待っているサービスです。例えばホームページができましたと言えど誰かアクセスには来てくれますが、逆に言わないと誰も来てくれない。発信と言っているのだけれども実は誰かが来てくれないと成立しない受け身のサービスだったのでないでしょうか。

では、自分のサイトにお客さんが来てくれるために、Yahoo! のような大きなディレクトリに登録する、あるいは検索エンジン最適化 (SEO: Search Engine Optimization) という技術を使って、検索エンジンで検索したら結果の上位に来るように

ページを作り込むなど、いろいろ方法はあります。しかし、ホームページまで来てもらって、初めてサービスが提供できるというところには変わりはありません。

3. Web2.0 の要素技術を使った情報発信

このような状態を、Web2.0 の要素技術を活用して変えてゆこう、というのが農林水産研究情報センターでの取り組みです。まず始めたのは、SDI サービスに近いもので、RSS を使った新着情報の配信を始めました。このサービスは正式には 2006 年 2 月 20 日にプレスリリース³⁾ をしております。RSS で情報配信を始めたり試行をしたりという中から、RSS の中身は XML のデータですから、XML のデータを何かに使えないか、新着情報の配信以外の使い道はないか、と考えるようになりました。

その中で、OPAC についても見直してみました。現状の OPAC のデータというのは基本的には Web ブラウザからしか検索できない。データもそこに書いてあるものしか出てこない。本当はもっと詳細なデータがあるはずなのに、要る要らないは別にして、詳細な情報を取得して、利用者の側で別のサービスの部品として使い、新たなサービスを展開できないだろうか。RSS で新しい本や雑誌の到着情報、受入情報の発信ができるのであれば、これに書誌情報全体を入れて提供することができるのではないかと思いつきました。

この発想から生まれたのが、データを自由に引き出せる次世代型の OPAC、OPAC2.0 です。これによって、OPAC を単なる目録検索のシステムではなくて、XML をデータフォーマットとした情報配信システムに変えていく。例えて言うなら、先ほどの Amazon のようなサービスで、利用者の目に見えないところで書誌データを公共財として利用できる目録データ配信システムにできないかということを考えてみました。

3.1 RSS とは

先にも述べた RSS とは、Web サイトの要約を記述するための仕組みです。これで Web サイト

の更新情報や雑誌の目次などを自動的に配信します。

RSS による情報配信の事例としては、例えば「Science」「Nature」、ほかに「Proceedings of the National Academy of Sciences」など、今は主要な学術雑誌であれば、その目次は電子メールのほか、RSS でも配信しています。この中には、論文タイトルや著者名などに加え、巻号、ページなどの書誌的情報、また DOI (Digital Object Identifier: デジタルオブジェクト識別子) などが含まれていることが多いです。もし、RSS リーダが DOI や OpenURL を解釈してくれれば、これを Link Resolver 経由で原報やドキュメントデリバリーサービスへリンクさせる、などの面白いサービスができるのではないかと考えています。また、生物系・医学系の方にはおなじみの PubMed の検索結果通知も、メールでもらうかデータでもらうか、あるいは RSS で受信するかという選択肢が用意されています。また、私どもの図書館は全部で 65 拠点ありますが、その図書館の到着情報の通知と、各種の blog の更新情報の配信が、RSS の主な使われ方ではないのでしょうか。

オレンジ色で RSS と書いたアイコンや、ピーコンのような波が出ている四角いアイコンが、RSS を提供しているという目印です。Internet Explorer 7 や Firefox をお使いでしたら、RSS を提供しているページを表示すると URL のバーに RSS のマークが出て、このサイトには RSS があるということを自動的に通知してくれます。また、そのまま Web ブラウザにその RSS を登録して、到着情報を受信できるようにすることもできます。

3.2 RSS を利用するメリット

情報を配る側の RSS のメリットは何かについてまとめてみました。

農林水産研究情報センターでは、各試験研究機関図書室の到着受入情報や Web サイトの更新情報を、自動的にかつ定期的に知らせることができます。これは人手をかけずに、使用している図書資料管理システムを改良して前日の受入データを出力し、これを専用の配信サーバで XML に変換し

て定期的に到着受入情報として流すという仕組みを採っています。

Web サイトの更新情報については、対象となる Web サイトのプレスリリースや更新情報の Web ページが更新されると、これらの Web ページを配信サーバが取得して RSS に加工、配信しています。RSS は XML で記述されており、HTML など他の形式に変換することも容易です。これを利用して、RSS で配信されている到着情報を HTML に変換してホームページに張り付けるなど、いろいろな形に変換して提供することができます。

このように、単にホームページを開設してアクセスを待つサービスではなく、今日こんな本が入りましたという情報を、欲しい人に直接届けるサービスへの転換を図っています。

RSS を受信して活用するためについては、主に 3 つの利用方法があります。

- 1) Web ブラウザ (IE7, Firefox)
- 2) 専用のアプリケーション (RSS リーダ)
- 3) Web 上のサービス (goo, livedoor, feedpath, blogline など)

Web 上のサービスについては、Gmail や Yahoo! Mail のように電子メールを Web ブラウザで使うのと同様な感覚で RSS を受信し、読むことができます。いずれも無料のサービスですので、もしご興味があればお試しください。

到着情報を知るために RSS を使うメリットはいくつがありますが、更新情報と概要だけ素早く受信することができることがまず挙げられます。RSS リーダの設定で、自分の好きな間隔で情報の更新ができます。1 時間に 1 回でも、3 時間に 1 回でも、1 日 1 回でも、お好きな間隔を設定できます。それではメールマガジンとはどう違うのか、というご質問も頂きますが、最近はいわゆる迷惑メールがどんどん増えてきて、その中に埋もれている本物のメールを探さなくてはいけないという状況にあるのではないのでしょうか。そのような迷惑メールに埋もれることなく、欲しい情報を確実に収集することができるのが RSS です。

さらに、Web サイトの更新情報や図書館と雑誌の到着情報、あるいは PubMed の検索結果等々、

いろいろな異なる種類の更新情報を、RSS リーダという1個のインターフェースでまとめて取得して閲覧することができることも、また一つのメリットです。

さらに、XMLでデータを受信するということは、利用者側でそのデータを変換して再利用や提供もできるということです。これによって、RSSの利用者と配信者の立場がどんどん近づいて、ある日入れ替わるかもしれません。誰でも自分で加工して、もう一度配ることができるようになる。例えば、RSSのデータを取ってきてデータベースにして、その新着情報を配信することができるなど、さまざまな形で再利用、提供が利用者側でできる可能性を持っています。

3.3 RSSの利用の現状

他の企業や自治体などで、RSSについてどのくらい取り組まれているのかについて、サイドフィールド株式会社が調査したデータが「第2回全国自治体・上場企業・官公庁のRSS導入・配信調査」です⁴⁾。これは2007年1月現在のもので、官公庁が3.7%、地方自治体は9.2%、上場企業が5.6%で合計すると調査した5,478の主体に対し6.9%、380の企業等でRSSを利用しているとのことです。なお、これには農林水産研究情報センターは入っておりません。また、官公庁での事例はまだ少ないです。

自治体については取り組み例が多いのですが、これは自治体の方がWebサイトの構築に関しては後発で、おそらく構築の際に自動的にRSSを出力するようなCMS(Content Management System)の導入が進んでいるからではないかと思えます。CMSにもさまざまなものがありますが、あらかじめ決めたデザインに基づきHTMLを手で書かなくてもフォームに必要事項を入力してWebページを作れる、あるいは手持ちのWordファイル等々から変換してWebページを作成するなどの機能があり、この中にRSSの配信機能が入っているのではないかと想像しています。

上場企業についてはほとんど、といっても5.6%ですが、大きな企業ですと例えばサイトの新着情

報や新製品の情報などはRSSにより配信が行われるようになってきています。

3.4 RSSを配信するには

RSSを作成し配信するには、自分で作るか、コンピュータが作ってくれるかの二通りがあります。自動で作る場合は、各種のblogシステムやWikiなどに更新情報をRSSで出力する機能が標準で付いていますので、これを利用することができます。自分たちでサーバを用意して、blogシステムを立ち上げて利用することもできますし、一方でYahoo!, nifty, gooなど、あちこちで無償のblogのサービスが提供されており、これらを利用する、というのも一つの方法です。

図書館で実際に使っている例としては、千葉県横芝光町立図書館のホームページのblogは、gooのサービスを使っています。先日、専門図書館協議会のセミナーで担当者の方にお話を伺ったのですが、必ずしも自分の町や図書館のドメインを使わず、gooのような民間のサービスを利用することについては、周囲のコンセンサスは必要だけれども、特段こだわりはないということをおられました。

できれば図書館システムに新着情報配信、特に新着図書や新着雑誌の配信機能が備わっていれば楽なのですが、今のところ筆者の知る範囲では図書館システムに標準でRSSの配信機能を持っているものはないようです。

手で作るしかないという場合は、Headline-Editor Liteというツールもあります。これを利用すると、Excelに似た帳票形式で必要事項を入力しRSSを自分で作ることもできます。Excelからのコピー&ペーストにも対応していますので、例えば新着図書のリストをシステムからCSVで出力して、Excelに貼付、そこからまたコピー&ペーストしてRSSを作ることも可能です。この他にも、RSSを自動で生成するツールは様々ありますので、お試し下さい。

3.5 農林水産研究情報センターでの事例

農林水産研究情報センターでは、RSSを以下の

ように利用しています。

Webサイトの更新情報、プレスリリース、研究員の募集、物品調達といった情報を、12機関25種類のRSSで配信しています。アクセスログを分析したところ、プレスリリース、研究員募集、物品調達あたりの情報がよく読まれていました。当所は、研究者などが読むだろう、と考えていたのですが、もっと幅広い利用者、例えば様々な業者さんなどにもご利用頂いていることが分かりました。

これに加え、農林水産研究情報センターはじめ試験研究独立行政法人の65拠点の図書室の図書・雑誌新着受入情報をRSSで発信しています。これは図書・雑誌とありますので、65×2で130という計算です。これらは前の日の受入情報を次の日の朝、未明に図書資料管理システムから受信してRSSを更新し、1日1回配信しています。

また雑誌別の新着巻号の配信、例えば農林水産研究情報センターで「Nature」の最新号がいつ入荷したか、という情報も配信しています。図書資料管理システムで受入作業が完了するとRSSが即時に更新されて、「Nature」の何巻何号がいつ受入されました、という情報をRSSで配信しています。これらを広報し、かつRSSについて知ってもらうために「MAFFIN News Feeds Center」⁵⁾というポータルサイトを作りました。MAFFIN News Feeds Centerでは、RSSで配信している情報を、JavaScriptを使ってHTMLに変換して張り付けています。また、各機関のWebサイトの更新情報

のほか、農林水産研究情報センターの雑誌と図書の新着情報なども提供しています。

やはりRSSを使ってくださいと言っても、馴染みのないものはなかなか使ってもらえません。そこで、そもそもRSSとは何か、というところから解説するまずはポータルサイトを作り、配信しているRSSのタイトルやヘッドラインをHTMLで見ることができるページを作りました。

4. XMLを活用した新たなサービスの展開一次世代のOPAC、OPAC2.0に向けて

これまで述べましたRSSによる新着情報の配信を通じて、XMLで配信されるデータを何かに活用できないか、またこれを活用してOPACの新たな方向性があるのではないか、というアイデアが生まれました。これを次世代型OPACと位置づけ、OPAC2.0と呼んでいます⁶⁾。

既存のOPACのインターフェースには、例えばWebのブラウザ、Telnet、Gopherなどいろいろありますが、これらに既存のインターフェースに依存せずに書誌情報を取得できるAPI⁷⁾を作りました。データフォーマットは汎用性、高可用性のあるものとしてXMLとしています。これにより、誰でもどこからでも書誌データを引き出して利用できるシステムを作ることが目標です。例えば、以下のURLからは、MODS⁸⁾で記述された「図書館雑誌」の書誌情報と所蔵情報が参照できます。

<http://library.affrc.go.jp/api/MODS/03854000>



図1 MAFFIN News Feeds Center

OPACとは、今まではonline public access catalog、オンラインでアクセスできる利用者向けの目録システムでしたが、OPAC2.0では単なる目録検索サービスから「データプロバイダ」へ変化するでしょう。図書館は書誌情報という情報を持っている、そして書誌情報を提供するサービスも図書館サービスの一つになる可能性があるのではないかと考えています。次のOPAC、ということでOPAC2.0と呼んでいます。これが実現すればOPACという名前そのものが変わるかもしれません。



図2 a9.comでの横断検索結果

4.1 OPAC2.0 へ向けた取り組み例

4.1.1 OpenSearch への対応

先に整備した API 等による XML 出力を応用して、様々な新しいサービスの可能性を試行しています。

まず、OpenSearch という横断検索用の仕組みがあり、これに対応しました。OpenSearch は Amazon.com の子会社である A9.com が提唱する横断検索のための仕組みで、各検索システムが受け取った検索語に対して検索結果を XML (RSS2.0) で出力する、ということが定義されています。これにより、検索インターフェースを作成する側では、共通の XML を処理するプログラムを書くことで横断検索システムが容易に構築でき、また検索結果の加工や再配信が行えるようになっています。a9.com でも横断検索インターフェースを提供していますが、農林水産研究情報センターを初めとする各試験研究機関の総合目録も検索対象に加えることができます。図2は、「BSE」をキーワードにした PubMed との横断検索結果です⁹⁾。右が PubMed、左が農林水産関係試験研究機関総合目録の検索結果です。

4.1.2 タグクラウド

本のタイトルから単語を切り出して、キーワードの一覧を作ります。そのキーワードの多い少ないで、例えばフォントサイズを変えたり、色を変えたりといったことをしています。雲のように見えることから、これはタグクラウドと呼ばれています。

図3がタグクラウドの表示例です。これらは過去1週間の新着図書受入情報の RSS から生成して

います。この例ですと、研究や農業経営という言葉が大きくなっており、最近受け入れた資料にこれらをキーワードに持つ書誌が多い、ということを目視的に表現しています。この例ではキーワードを100個並べています。キーワードをクリックすると、そのキーワードがある新着資料が表示されます。

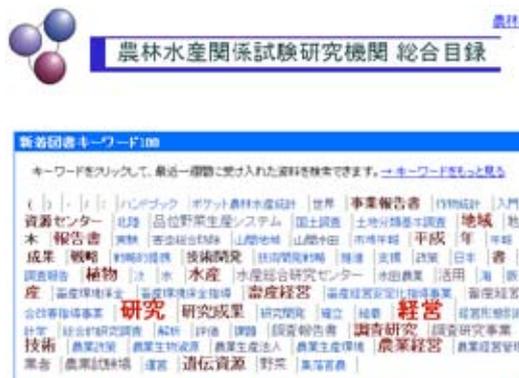


図3 タグクラウド例

このように、まず検索するのではなく、ぱっと見てどんな本があるか掴むのに使えないのかと考えるタグクラウドで新着図書を表示させてみました。現在も、既存の OPAC で難しかったブラウジングや、新たな情報を見つけやすくするための一手法として試験を進めています。

4.1.3 blog との連携

blog のシステムには、たいていの場合記事の検索機能や携帯電話など外部から記事の投稿ができるの機能があります。これを活用して、図書の書誌1件を1記事として投稿して、時系列で表示し、かつ検索もできるというシステムを試作しました。

blog のシステムで目録を提供すると、何ができるのか。大きなところでは、blog が持つコメントやトラックバックの機能が利用できる、という点があります。今までの OPAC では、ある資料、雑誌、本について、感想やコメントを加える場がありませんでした。また、自分の blog から、「この本はおもしろい」ということをトラックバックで知らせる機能もありません。これが amazon ですと、blog に書影と amazon へのリンクを張って詳

しく紹介することができるのですが、OPACにはそれはありません。このようなサービスが図書館でもできないかと考え、新着図書のRSSを加工して、書誌情報と所蔵機関をblogに毎日自動的に投稿する仕組みを作りました。これで特定の資料にコメントやトラックバックを付けることが可能になりました。さらに、既存のOPACで困難であった感想の共有ができるのではないかと考えています。

また、blogに投稿するとその情報はXMLからHTMLに変換されます。すると検索エンジンが収集して、googleやYahoo!等の検索対象になることもあるでしょう。また、この例で使用したblogのシステムはMovableTypeですが、簡単な検索のインターフェースが付いています。これを使って、新着資料の検索システムとしたり、また検索結果をRSSで通知する機能があれば、例えば「生産管理」というキーワードで毎日システムが自動的に検索をし、タイトルに「生産管理」が含まれた本が受入されるとRSSリーダーが通知する、システムも作ることができます。

4.1.4 Webブラウザから直接OPACを検索

OPACの窓口は1個ではない、「どこからでも検索可能なOPAC」を目指して先のOpenSearch対応を行いました。ここではWebブラウザから直接OPACを検索する仕組みを紹介します。

最近のWebブラウザ、Internet Explorer 7¹⁰⁾やFirefox¹¹⁾では、googleやYahoo!を検索する機能が標準で付いています。また、Googleツールバー等、Googleなどで提供されているツールバーをWebブラウザにインストールすると、WebブラウザにGoogleの検索窓が追加され、ここからGoogleを検索することができます。これにOPACを対応させてみました。

図4は、FirefoxにOPACの検索機能を追加している様子です。Firefoxのツールバーから[ツール] - [アドオン]を選択し、「新しい拡張機能を入手」をクリックして、アドオンのページを開きます。左側のメニューの「検索エンジン」をクリックすると、利用できる各種の検索エンジンが表示され

ます。ここで、「ALIS WebOPAC」をクリックするとアドオンが自動的にインストールされます。

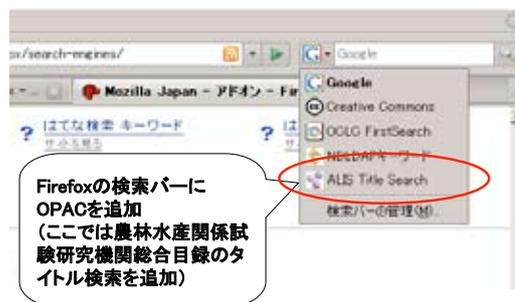


図4 Firefoxへの検索エンジンの追加

あとは、Firefoxの検索バーから「ALIS Title Search」を選択して検索すれば、OPACの検索結果が表示されます。

4.1.5 全文検索エンジンでのOPACの構築

先にblogに展開された書誌情報は検索エンジンの収集対象になりますが、これを自分のシステムで行うこともできます。農林水産研究情報センターでは、無償の検索エンジン「IBM OmniFind Yahoo! Edition」を利用して試行的に新着図書の検索システムを構築しました。収録できるデータが最大60万件までという上限はあるのですが、60万件あれば、中小規模の図書館なら間に合うかと思えます。ちなみに、農林水産関係試験研究機関総合目録の書誌データは約68万件です。このシステムは、いわゆる検索ロボットを持っています。これで先ほどのblogのページを収集し、全文検索が可能なデータベースを構築しました。

これを応用して、データベースを構築する前に取得対象の書誌情報をフィルタリングして、自分の研究分野の書誌情報だけ検索できる、自分専用の検索エンジンを作ることができます。

5. まとめ

RSSによる新着情報配信を行うことで、ホームページを作ってお客さんに情報を取りに来てもらうサービスから、こちらから積極的に情報を届けるサービスへ転換することが可能になりました。

また、OPAC上の書誌データや検索結果などをXMLで出力することで、OPACから派生したサー

ビスとして、今までご覧いただいたようなサービスを提供できることが分かりました。既存の図書館システムには XML 出力の機能のみ追加し、タグクラウドを生成したり blog に投稿する、という追加機能は図書館システムの中ではなく外部のサービスを利用して実装しています。

このように、従来 OPAC でため込んでいた書誌データを XML を使って開放することで、全く知らない第三者が図書館システムとは別の新しいサービス、あるいは図書館員が思いつかなかったようなサービスが生まれる可能性があると考えます。

書誌データ自体が販売されていたりする現状もありますが、最終的には書誌データを誰でも利用できる公共財にできないか。これによって、いろいろなサービスの可能性や個人での利用の可能性が広がるのではないかと考えております。

ご清聴ありがとうございました。

注：

本稿は、平成 18 年度第 2 回東海地区大学図書館協議会研修会(2007 年 3 月 7 日開催)での講演、「Web2.0 時代の新たな図書館サービスの展開」を元に加筆修正をしたものです。また、本稿中の情報は、一部注記をしていますがいずれも講演時点のものであり、現在は変更されていることがありますのでご了承下さい。

- 1) Myrmecoleon, 「所蔵館マップ」. <http://myrmecoleon.sytes.net/map/> (参照 2007-08-29)
- 2) 上田修一, 「大学図書館 OPAC の動向」. <http://www.slis.keio.ac.jp/~ueda/libwww/libwwwstat.HTML> (参照 2007-08-29)
- 3) 農林水産省, 「RSS を使って最新の農林水産研究情報(新着図書・雑誌等)を配信」. 平成 18 年 2 月 20 日付けプレスリリース. <http://www.affrc.go.jp/ja/press/2005/060220/060220.HTML> (参照 2007-08-29)
- 4) 原稿執筆時点の最新のデータは、サイドフィード株式会社, 「第 3 回全国自治体・上場企業・官公庁の RSS 導入・配信調査」. 2007 年 8 月 29 日,

http://press.sidefeed.com/archives/2007/08/3_rss.html (参照 2007-08-29) この調査は、54 の官公庁、2,052 の全国自治体、3,406 の東証 1 部・東証 2 部・JASDAQ 上場企業ら合計 5,512 の Web サイトを対象に実施され、個別の RSS 配信率を見ると、官公庁が 7.4%、自治体が 10.5%、上場企業が 7.4%。全体の 8.5%にあたる 471 サイトが RSS 配信に対応しているなど、2007 年 1 月の調査より全体的に増加傾向にある。

- 5) 「MAFFIN News Feeds Center」 <http://www.affrc.go.jp/ja/rss/> (参照 2007-08-29)
- 6) OPAC2.0 の詳細については、以下を参照されたい。林 賢紀, 宮坂和孝, 「RSS(RDF Site Summary) を活用した新たな図書館サービスの展開：— OPAC2.0 へ向けて—」. 情報管理. 49 (1) p.11-23, 2006.4 http://www.jstage.jst.go.jp/article/johokanri/49/1/49_11/_article/-char/ja (参照 2007-08-29)
- 7) API の仕様詳細については、ALIS WebOPAC XML 出力インターフェース (<http://library.affrc.go.jp/api/>) (参照 2007-08-29) を参照されたい。
- 8) Metadata Object Description Scheme の略。LC で開発され、XML で記述される書誌情報を表現するメタデータ標準。MARC21 のサブセットとして構成され、MARC21 とは異なり文字ベースのタグで表現される。Dublin Core より豊富な要素を持つが、MARC21 より詳細でないのが特徴。仕様の詳細は <http://www.loc.gov/standards/mods/> (参照 2007-08-29) を参照されたい。
- 9) 本稿執筆時点(2007 年 8 月 29 日)では、a9.com から PubMed は横断検索対象から外れている。
- 10) インストール方法など詳細は IE7 beta 用 ALIS WebOPAC 検索プラグイン <http://library.affrc.go.jp/api/opensearchIE7.html> (参照 2007-08-29) を参照されたい。
- 11) インストール方法など詳細は Firefox 用 ALIS WebOPAC 検索プラグイン <http://library.affrc.go.jp/firefoxplugin.html> (参照 2007-08-29) を参照されたい。

ルネサンス期の図書館とパトロネージ

愛知県立芸術大学附属図書館長

森田 義之

本日は、「ルネサンス期の図書館とパトロネージ」というテーマで、お話をさせていただきます。

私は、西洋美術史が専門で、とくにイタリア・ルネサンス期の美術史や都市史、パトロネージ史を研究しておりますが、大学図書館協議会の研究集会という場で何をお話したらいいのか、色々と考えたあげく、こういうテーマを選んでみたわけです。

考えてみますと、「ルネサンス」という時代は、美術の歴史においてのみならず、書物の歴史、書物のコレクションと図書館の歴史においても画期的な時代でした。

書物とそのコレクションの歴史において、この時代 (15-16 世紀) に起こった重要な出来事として、次の 3 つのことが挙げられます。

(1) 都市生活の活発化にともない、書物の需用と生産が増大し、聖職者が独占していた修道院文化 (ラテン語文化) にかわって、市民層に俗語本が急速に普及し、紙の普及にともない写本が産業化したこと。

(2) 15 世紀中頃のグーテンベルク革命、つまり活版印刷術の発明により、写本にかわる印刷本が全ヨーロッパに普及し、16 世紀には写本文化を席卷したこと。

(3) 都市の裕福な知識層の間で古典書籍のコレクション熱が高まり、古代の公共図書館の理念が再生したこと。その結果、フィレンツェでメディチ家のパトロネージによって近世で最初の公共図書館が創設されたこと。

I. 古代と中世の図書館

まず最初に、ルネサンス以前のヨーロッパの図書館の歴史を簡単にふりかえっておきましょう。

[因みに、library (英) や libreria (伊) の語源はラテン語の liber (樹皮、本) に、biblioteca (伊) や bibliothèque (仏) の語源はギリシア語の biblion (本) にあり、後者は、小アジアのパピルスの貿易港 Byblos に由来するといわれます。]

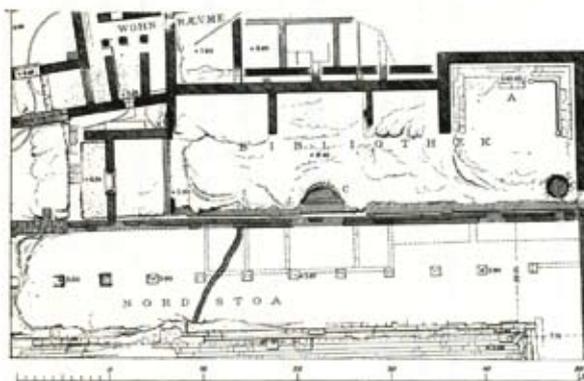
古代世界では、アッシリアのニネベの王宮やエジプトの神殿に付属して図書館がつけられたことが知られていますが、最も有名なのは、ギリシア末期 (ヘレニズム期) にアレクサンドリアにムセイオン (Museion / 王立学士院) の付属機関としてプトレマイオス 1 世によって創設された図書館 (前 3 世紀) です。

王は、権力を駆使して、アレクサンドリアに入港するすべての船が積んでいた書物 (パピルスの卷子本) のコピーを作って、原本を図書館に納めさせ、分類目録を作成し、その蔵書数は 70 万巻に達したといわれます (前 48 年、カエサルのアレクサンドリア攻略により焼失)。

古代ギリシア世界のもう一つの有名な図書館はペルガモンの神殿図書館。アッタロス朝のエウメネス 2 世の創設 (前 2 世紀) で、アレクサンドリアの図書館と蔵書を競いあい、従来のパピルスの卷子本にかわって、羊皮紙の冊子本をつくらせたといわれます。羊皮紙のことを parchment / pergamenus (Pergamon に由来) と呼ぶようになったのはそのためです。

ローマ時代にもヘレニズム王朝の図書館の伝統は引き継がれ、首都ローマには、皇帝たちの宮殿に 30 ちかくの公共図書館がつけられました。地方都市にも、現地の執政官の個人的パトロネージによって、いくつもの図書館がつけられました (なかでもエフェソスのケルスス図書館、ティムガドのロガティヌス図書館、アテナイのハドリヤヌス

帝による図書館が有名)。古代ローマ時代には、円形闘技場も劇場もバシリカも、皇帝や有力者個人が出資して造営する「パトロヌス」の伝統があり、これが後にルネサンス時代のパトロネージとして再生することになります。



(図1) ペルガモン図書館
(出典／L. カットン『図書館の誕生』刀水書房)

古代の都市文明が崩壊して農村中心の中世の封建社会になると、学問文化の中心はキリスト教の修道院に移り、教会や修道院が書物の生産とコレクションの拠点になります。皇帝や王の宮廷文庫の伝統も細々と続いてはいましたが(カール大帝やシャルル5世の宮廷文庫)、学問文化はラテン語を使用する聖職者の独占物となります。ヨーロッパ各地の主要な修道院には、写本室(スクリプトリウム)と図書室が置かれ、修道士たちは聖書や教父たちの著作の写本に多くの時間を費やしました。一方、12-13世紀に大学が創設され始めると、教会や修道院と並んで、大学も図書館の拠点となります(オックスフォード大学、ケンブリッジ大学)。

1289年に、ロベール・ド・ソルボンが、パリの学寮に約1,000冊の図書室(28の書見台をもつ)

を附置したのが、ソルボンヌ大学図書館の前身といわれます。

中世の書物は、羊皮紙にペンで書かれた大型の写本(冊子本)で、しばしば豪華に装飾されたり厚い皮革や貴金属で装幀され、きわめて高価な貴重品であり財産でしたから、その保存と紛失防止のために本には鎖がとりつけられ、書棚や書見台に固定されていました。このため、中世の図書館は「鎖でつながれた図書館」(chained library)といわれます。



(図2) 鎖のついた書見台
(出典／W. レーンシュブルグ『ヨーロッパの歴史的図書館』国文社)

II. ルネサンス期における図書コレクションと公共図書館の理念

さて、本題であるイタリア・ルネサンス期の図書館と図書コレクションの話に入りますが、この時代(14-16世紀)が、ヨーロッパの書物とそのコレクションの歴史において画期的な時代であったことは、既に述べたとおりです。

その背景には、12-13世紀以来の都市の勃興と「商業の復活」による都市生活の急速な発展、都市市民層の知的要求の拡大があり、その結果として、ラテン語文化にかわる新しい俗語文学が誕生します(ダンテ、ボッカッチョ、ペトラルカ等)。また民間の写本工房の活動によって書物が市民のあいだに普及し、キリスト教文化にかわる古代の古典的教養(フマニタース)への憧憬が高まって都市の君主や富裕知識層のあいだで古典書籍のコレクション熱が高まったことが挙げられます。

こうした新しい都市文化と古典文化の復興運動

(ルネサンス)の中心地となったのが、都市共和国として政治的にも文化的にも「新しきアテナイ」「ローマの娘」を自覚していたフィレンツェであり、図書文化のルネサンスもまさにこのフィレンツェを中心に展開したといえます。



(図3) ペトラルカとボッカッチョ
(アンドレア・デル・カスターニョ画)

フィレンツェにおける古典書籍コレクションは、ダンテとともに「イタリア文学の祖」とされる14世紀のペトラルカとボッカッチョに始まり(彼らはすでに公共図書館の理念をもっていたことが知られ、ペトラルカはヴェネツィア市に蔵書を寄贈する計画をもち、ボッカッチョはフィレンツェのサント・スピリト修道院にその蔵書を遺贈します)、15世紀になると古典収集熱は人文主義者や教養ある富裕市民のあいだで一段と高まりました(コルッチョ・サルターティ、レオナルド・ブルーニ、カルロ・マルススピーニ、ニッコロ・ニッコリ、ポッジョ・ブラッチョリーニ、ジャンノッツォ・マネッティなど)。

なかでもニッコロ・ニッコリ(1364-1437)は、私財を投げうって古今東西の古典文献を買いあさり、800冊にのぼる書籍を収集します。フィレンツェ随一の大富豪で後にコジモ・デ・メディチにより追放されるパツラ・ストロツィは、ギリシアから著名な古典学者クリュソローラスを招いて、フィレンツェの大学にギリシア語講座を開設し、ギリシアから取り寄せたギリシア語文献の目録を作成させます(サンタ・トリニタ聖堂に図書

館をつくる計画は実現せず)。

こうしたコレクション熱の高まりのなかで、最大のパトロンとして登場したのが、コジモ・デ・メディチ(1389-1464)でした。



(図4) ボッカッチョの筆写によるダンテ『神曲』
(出典/『フィレンツェ-芸術都市の誕生』展図録)

Ⅲ. メディチ家による図書館の創設—サン・マルコ図書館とラウレンツィアーナ図書館

コジモは、15世紀におけるメディチ家の独裁体制を確立した大富豪=政治家であり、ルネサンス・パトロン の代名詞ともいえる人物ですが、学者肌の非常に豊かな人文学的教養の持ち主で(ラテン語にも精通)、若い頃から外国を旅行してみずから貴重な写本を収集すると同時に、ニッコリやブラッチョリーニらの友人たちの収集活動を財政的に支援しました。美術や建築の偉大なパトロンであり、フィチーノを中心とするプラトン・アカデミーを私的に援助してフィレンツェをヨーロッパにおけるプラトン研究の拠点にしたことでも知られます。

ちなみに、コジモ自身が集めた書籍には、ギリシア・ローマの歴史・哲学・文学(アリストテレスの全著作と註解、リウィウス、スエトニウス、プルタルコス、ウェルギリウス、オウィディウス、

プラウトゥス、キケロー、セネカ、クインティリアヌス等）から中世の教父や教会学者の宗教書までが含まれていたことが知られています。

このコジモのパトロネージによって創設された近世ヨーロッパで最初の公共図書館が、サン・マルコ図書館（Biblioteca di San Marco）です。

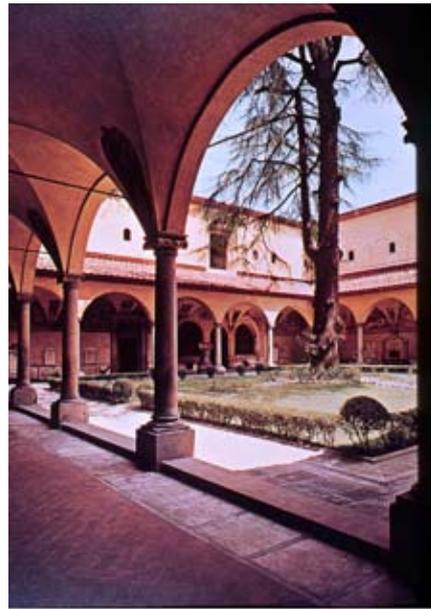


(図5) コジモ・デ・メディチ（ポントルモ画）

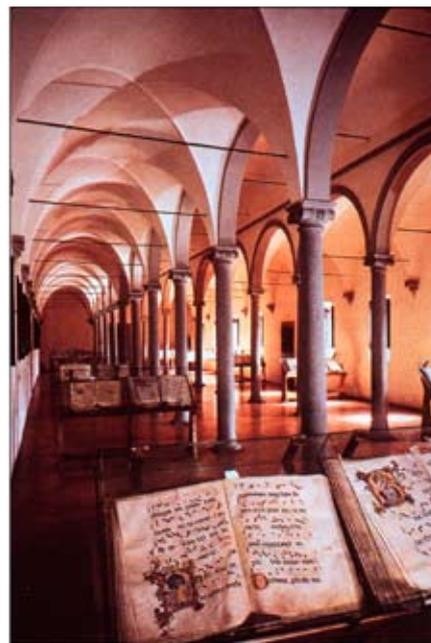
この図書館は、ニッコロ・ニッコリが全市民に公開することを条件としてフィレンツェ市民に遺贈した蔵書約600冊（6,000フィオリノ＝およそ3億円に相当）を収蔵するために、コジモの出資によって創設されたもので、1444年に建築家ミケロツォの設計によって、ドメニコ修道会厳修派が所轄するサン・マルコ修道院の2階に設置されました。

大きさは縦48メートル、横11メートルの長方形で、列柱で三つに分節された小教会堂風の空間に64の書見台が置かれました。修道院という宗教的空間に付設されたこと、またもっぱら貴重な写本を閲覧するための場所としてつくられたことでは「中世的」な性格がつよいと言えますが、修道士専用ではなく、都市市民に開放された公共図書館であった点で、きわめて「近代的」かつ市民的な性格をもっていたことは強調されねばなりません。

コジモは、サン・マルコ図書館の蔵書の整理と目録作成を、かつての政敵パツラ・ストロツィ



(図6) サン・マルコ修道院回廊



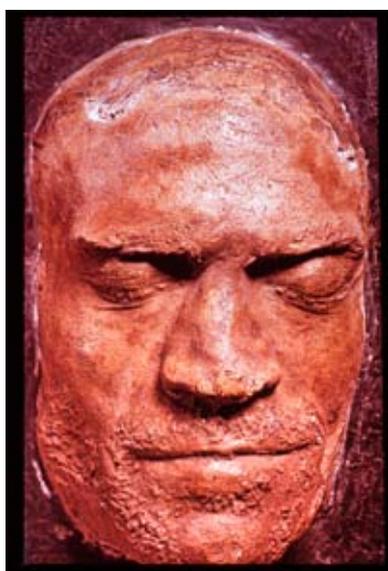
(図7) サン・マルコ図書館

によって支援を受けていた人文学者トマーズ・パレントゥチェッリ（のちの教皇ニコラウス5世）に委ねます。そして、このパレントゥチェッリは、やがて教皇となると、ローマのヴァチカン図書館の実質的な創設者となるのです。

サン・マルコ修道院は、この図書館のみならず、その建物のすべてがコジモの個人的パトロネージによって建設されました（1434-44）。そして、

コジモとも親しかった敬虔な画僧フラ・アンジェリコの壁画によって飾られることになるわけですが、コジモは、この後にも、郊外のフィエゾレ修道院（バディア・フィエゾラーナ）に宗教書の図書室を付設し、そのために書籍商ヴェスパシアーノ・ダ・ビスティッチに手配させて45人の筆写家を雇い、2年間で約200冊の写本を作らせたと伝えられます。

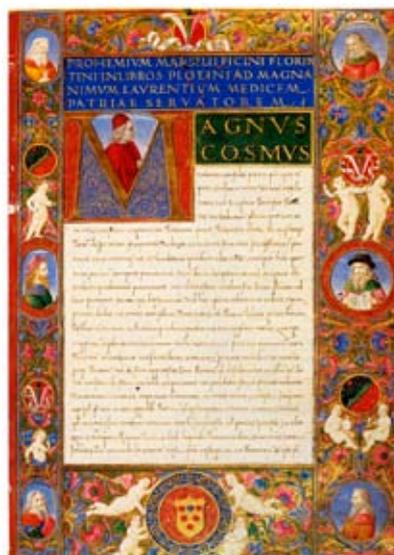
コジモ・デ・メディチの図書コレクションは、後継者のピエロ・イル・ゴットーゾ、そして孫のロレンツォ・イル・マニフィコ（1449-92）に引き継がれますが、特に蔵書の大幅な拡充に貢献したのはこのロレンツォでした。



(図8) ロレンツォ・デ・メディチ（デスマスク）

ロレンツォは、15世紀末期のフィレンツェ・ルネサンス文化の「黄金時代」の立役者、偉大なパトロンとして、生前から「イル・マニフィコ」（豪華公）という尊称で呼ばれた人物です。また彼自身、祖父と同様、玄人はだしの人文的教養の持ち主で、多作な詩人でもあり、みずから「万能の芸術家」として、つねに多くの学者、文人、芸術家たちのサークルの中心にいた人物でした（実業家としては無能で、メディチ銀行の没落をもたらすこととなります）。

ロレンツォは、メディチ家の菩提聖堂であるサン・ロレンツォ聖堂に新しい図書館を計画していたといわれますが、それが実現されるのは、彼の



(図9) メディチ家の図書コレクション
(出典／『フィレンツェー芸術都市の誕生』展図録)



(図10) ロレンツォ・デ・メディチと人文学者サークル

死の30年後のこと、ロレンツォの子の世代になってからのことです（1523年）。

メディチ家のパトロネージによってルネサンス期に建造された2番目の図書館、ラウレンツィアーナ図書館（Biblioteca Laurenziana）は、ロレンツォ・イル・マニフィコの甥の枢機卿ジュリオ・デ・メディチ（1478-1534 / のちの教皇クレメンス7世）によって計画され、建造が推進されました。設計を委嘱されたのは、当時、同じ聖堂内のメディチ礼拝堂に2つのメディチ墓碑を制作中だった大巨匠ミケランジェロ（1475-1564）です。

ミケランジェロは、周知のように、ルネサンス最大の彫刻家であり、ヴァチカンのシステーナ礼拝堂に巨大な天井画を完成した大画家であり、のちにローマのサン・ピエトロ大聖堂の造営（とくにドームの建造）に深く関わることになる



(図11) メディチ邸

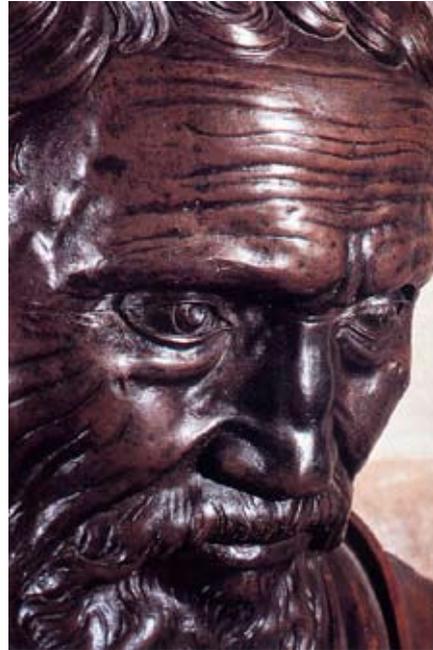


(図12) メディチ家の教皇 レオ10世とジュリオ・デ・メディチ (クレメンツ7世) (ラファエッロ画)

大建築家でもありましたが、設計から完成まで、中断をはさんで約半世紀を要したこのラウレンツィアーナ図書館は (完成したのは巨匠の死後の1571年)、建築家ミケランジェロの最高傑作のひとつとなります。

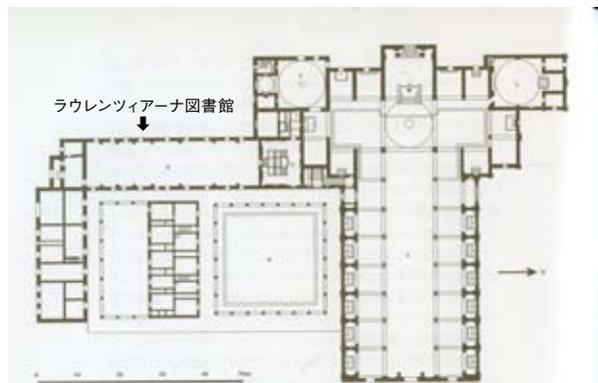
ラウレンツィアーナ (ロレンツォ=ラウレンティウスの形容詞化) 図書館は、メディチ邸のすぐ裏手にあるサン・ロレンツォ聖堂の中庭回廊2階に付設され、奇抜なマニエリスムのデザインによる有名な玄関室、サン・マルコ図書館より大きな規模 (長さ50メートル×幅12メートル、80の書見台を付設) の長方形の閲覧室 (列柱による分

節はなく、天井は平らな格天井)、そして稀覯本室からなっています。



(図13) ミケランジェロ像 (ダニエーレ・ダ・ヴォルテッラ作)

玄関室は、君主化したメディチ一族やその宮廷の学者たちの荘厳な入場を念頭においたと思われる「落下する滝」のような堂々たる大階段によって知られていますが、閲覧室のシンプルな長方形空間と書見台のシンメトリカルな配置には、近代的な機能性を予感させるものがあります (木製の格天井とテラコッタ・タイルの豪華な床装飾は別人のデザインになるもの)。



(図14) サン・ロレンツォ聖堂・修道院の平面図

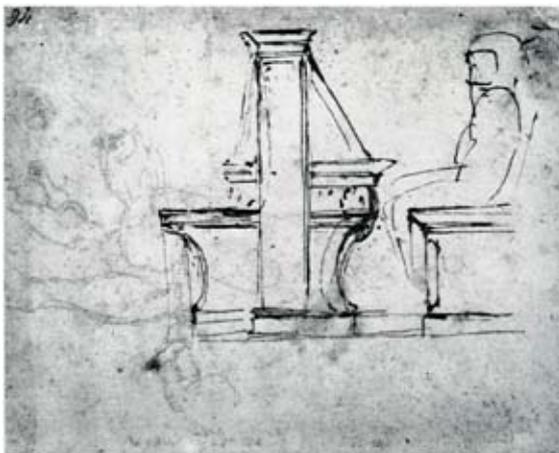


(図15) ラウレンツィアーナ図書館の玄関室

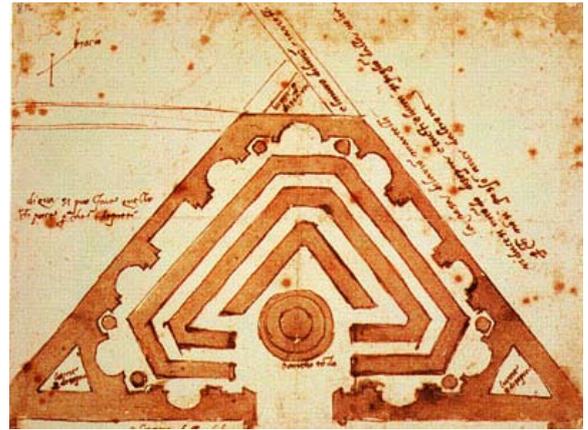


(図16) ラウレンツィアーナ図書館閲覧室

ミケランジェロ自身による書見台のめずらしい素描が残っていますが、書見台の構造にも彼が機能性を配慮していたことがわかります。



(図17) ミケランジェロの書見台スケッチ



(図18) 稀覯本室の設計図（ミケランジェロ）

一方、実現されることがなかった稀覯本室の設計案（入れ子構造の三角形の迷路のような書見台のプラン）には、ミケランジェロの自由な奇想が横溢していて、もし実現されていれば図書館建築史でも特筆される傑作になったものと想像されます。

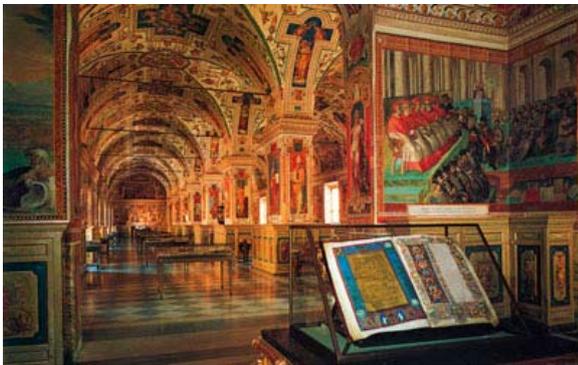
フィレンツェでつくられた2つの図書館、とくにラウレンツィアーナ図書館は、ルネサンス後期の他の大都市の公共図書館のモデルとなり、ヴェネツィア、ローマ、ミラノなどに都市の文化的威信のシンボル＝モニュメントとして、次々に大規模な図書館が建てられることとなります。

ヴェネツィアでは、ギリシア人枢機卿ベッサリオンが遺贈した図書コレクションを収蔵するために、共和国政府の委嘱で、パラッツォ・ドゥカレの向かい側の都市の最中心部に（サン・マルコ広場に続くピアツェッタに面して）、壮麗な古典主義様式のファサードをもつマルチャーナ図書館（Biblioteca Marciana；またはサン・マルコ図書館 Biblioteca di San Marco）が、ヤコポ・サンソヴィーノとヴィンチェンツォ・スカモッツィの設計で建造されます（1536-83年／閲覧室の長さは27メートル）。

ローマでは、教皇シクストゥス5世の時代に、ヴァチカン宮殿内に教皇庁図書館／ヴァチカン図書館（Biblioteca Apostolica / Biblioteca Vaticana）がドメニコ・フォンターナの設計によって完成しますが（1587-88）、これは15世紀以来、ニコラウス5世（トマーズ・パレントウチェリ）



(図19) マルチャーナ図書館 (ヴェネツィア)



(図20) ヴァティカン図書館 (D. フォンターナ設計)



(図21) アンブロジアーナ図書館 (ミラノ)

やシクストゥス4世によって営々と積み上げられてきた図書コレクションと図書館構想の帰結として、実現されたものです。

ミラノでは、1603-09年に、枢機卿フェデリコ・ボッロメオによってアンブロジアーナ図書館 (Biblioteca Ambrosiana) が創設されます。これは絵画館を含むアカデミアの一部として建てられたもので、天井までの高い書架が閲覧室全体を取り囲むという新しい公共図書館のタイプを示しています。

IV. 西洋近世の図書館の発展

イタリアの図書館の影響は、イタリア文化の吸収に熱心だったフランスやスペインの絶対君主国の宮廷にも伝播します。フランスでは、国王フランソワ1世が先代のルイ12世の図書館を継承拡充し、1537年には、フランスで刊行されたすべての本を1冊ずつ王の図書コレクションに収めさせる納本制度が始まります。

スペインでは、国王フェリペ2世がマドリッド郊外に造営した壮大な宮殿=僧院、エスコリアル宮に、名建築家ホアン・デ・エレラの設計で壮大な宮廷図書館 (長さ65メートル×幅11メートル) が創られました。しかし、カトリックによる宗教裁判と絶対王政の時代に入っていたスペインでは、図書館の公共性の理念や人文主義者による自由な書籍収集活動が変質と抑圧をこうむったことを忘れるべきではありません。

1559年のローマ聖庁による「禁書目録」の作成は、ルネサンスの人文学研究 (ストゥーディア・フマニターティス) の発展のなかから生まれた市民的な公共図書館とその理念が危機にさらされたことを意味しています。

しかし、その一方で、グーテンベルク革命による印刷文化の波及は、16世紀を通じてとどまるところを知らず、宮廷や大学の図書館と並んで、特に宗教革命後のプロテスタント国では、都市が創設する公立図書館 (都市図書館) が発展し、ルネサンスに生まれた公共図書館の理念は市民社会にいつそう密着したかたちで継承されることになります。

そして、19世紀になると、フランス革命後の国民国家の形成にともない、国家の文化的シンボルとして、国立劇場や国立博物館・美術館と並ぶよ

り壮大な文化的殿堂＝モニュメントとしての国立図書館（パリの *Bibliothèque Nationale* やロンドンの *British Museum* の図書館など）が誕生することになるのです。日本の明治政府による帝国図書館（1896、国立国会図書館の前身）はこうした流れのなかで創られることになったのです。

以上、ルネサンス期の図書コレクションと図書館の歴史を中心に駆け足で見えてまいりましたが、最後に、ルネサンスの科学的人文主義の偉大な後裔でもあった17世紀の哲学者ライプニッツ——彼はドイツのブラウンシュヴァイク大公の領主図書館の司書であった1689年に、フィレンツェのサン・マルコ図書館を訪れ、長年探していた14世紀の数学書 *Liber calculationum* の初版本を発見したことを友人に知らせている——の言葉を引用して、私の話を終わらせていただきたいと思いません。

「(a) 図書館は人間精神の宝庫となるべきであ

る。独創的な思想はそれが書いたものとして定着している限りすべて保存しておく必要がある。・・・(b) 必要なのは年度ごとのしっかりした予算であって、これにより学術上価値ある新刊書すべてが「調和のとれた継続」として供給されねばならない。(c) 図書館の至上の職務は、その貴重な財産を、著作者、出版年を示す系統立った形の綿密な目録（必要ならば事項索引も）により利用しうるようにすること、それから公開の時間をできるだけ広げ、暖房、照明をできるだけ良くし、自由な貸出しをできるだけ広げて、利用しやすくすることである。」

（ヨリス・フォルシュティウス&ジークフリート・ヨースト著『図書館史要説』藤野幸雄訳、日外アソシエーツ）。

いうまでもなく、ここには、現代の情報化時代の図書館にも通底する普遍的な理念と理想が息づいているといえるでしょう。

新大英図書館：稀覯本と音楽書閲覧室

愛知県立芸術大学音楽学部

中 巻 寛 子

はじめに — 大英図書館との出会い —

私が初めて大英図書館を訪れたのは、今から 14 年前、1993 年 7 月のことであった。当時、私は東京芸術大学大学院音楽研究科博士後期課程に在学中で、17～18 世紀にヨーロッパで隆盛を極めたカストラート歌手について研究していた。だが、博士後期課程の 2 年生となったこの頃、すでに日本国内での資料入手に限界を感じていた。そこで私は、この年の夏休みを利用して、ヨーロッパでの資料収集を行うことにしたのである。

ヨーロッパ行きを決意した当初、まず私が行き先の候補地として考えたのは、イタリアであった。これは、イタリアという国がバロック音楽の一大中心地あり、数多くのカストラート歌手をヨーロッパ各地へ送り出していた故郷であったという事実からすれば、当然の発想であったと思う。それが、結果的には大英図書館を目指して、イギリスへと向かうことになった。これについては、同図書館の国やジャンルを超えた蔵書量の多さもさることながら、図書館およびその所蔵資料について、日本国内で得られる情報量の多さが決め手となった。貧乏学生がヨーロッパへ出かけようというのであるから、事前にできるだけ準備が可能で、短期間で効率良く資料を収集できる場所へ行こうと考えたわけである。現在であれば、世界各地の主な図書館とその蔵書に関する情報は、インターネットでの収集が可能であろう。しかし、14 年前にはそれは未だ望むべくもなかった。その点、大英図書館の場合は、様々な種類の蔵書カタログが豊富に出版されており、楽譜については手稿譜カタログや印刷譜カタログがあって、東京芸大の図書館にも所蔵されていたし、一般図書館のカタログは永田町の国立国会図書館に所蔵されていたの

で、事前にそれらのカタログをチェックして、入手したい資料が同図書館に所蔵されているか否かを確認することが可能であった。そこで、私はそれを実行に移し、閲覧を希望する資料の請求記号付リストを作り上げ、さらには、市ヶ谷のブリティッシュ・カウンシルで入館証の請求書を入力して事前に図書館に送り、「入館証を発行するから、写真を持って来るように」という図書館からの返事をもらったうえで、夏のロンドンへと向かったのである。

旧図書館と円形閲覧室

当時、大英図書館は未だ大英博物館内に複数の閲覧室を持っていた。その主たるものが、シドニー・スマーク Sydney Smirke (1798-1877) がデザインし、1857 年に完成した、あの有名な円形閲覧室 (Round Reading Room) であった。

ここで、改めて大英図書館 The British Library の歴史を紐解いてみると、同図書館は、かつての大英博物館図書館 The British Museum Library (国立科学創造情報図書館 National Reference Library of Science and Invention を含む)、国立中央図書館 The National Central Library、国立書誌局 The British National Bibliography、国立科学技術参考貸出図書館 The National Lending Library of Science and Technology 等の、複数の機関を統合して 1973 年に成立した、英国の国立図書館である。つまり、大英図書館自体の歴史は、意外に浅いものなのである。但し、その前身の一つである大英博物館図書館とその閲覧室の歴史は、18 世紀の半ばにまでさかのぼることができる。

大英博物館は、サー・ハンス・スローン Sir Hans Sloan (1660-1753)、サー・ロバート・コッ

トン Sir Robert Cotton (1571-1631)、そして、初代および第2代のオックスフォード伯であったロバート・ハーリー Robert Harley (1661-1724) ならびにエドワード・ハーリー Edward Harley (1689-1741) の収集品を基礎コレクションとして、1753年に創設された。創設当初は、現在の博物館と同じ場所にあった17世紀の館、モンタギュー・ハウスが博物館のための施設として用いられていた。

博物館創設から4年後の1757年、国王ジョージ2世は王室の図書を博物館に寄贈すると同時に、国内で出版されるすべての本について納本を受ける権利を博物館に授けた。このことが、その後の博物館の蔵書数増加に大きく寄与した。そして、1759年には博物館が一般公開され、それと同時に図書閲覧室も開室した。但し、この初代の閲覧室はわずか20席しかない部屋だったという。明らかに、その座席数では不足だったのだろう、その後、閲覧室はたびたび変更され、そのつど拡大して行った。

1823年、時の国王ジョージ4世は、父ジョージ3世の蔵書を大英博物館に寄贈した。これを機にロバート・スマーク Robert Smirke (1780-1867) デザインによる、現在の博物館の建物が建設され、1838年には新しい閲覧室も新博物館内に開室した。だが、大英博物館はこの頃すでに230,000冊もの印刷本の収集を終えており、その数はさらに増えようとしていたにもかかわらず、新しい閲覧室には拡大の余地が全く無かった。それゆえ、間もなく、新博物館の中庭部分に新たな閲覧室が建設されることとなった。これが、かの円形閲覧室である。

円形閲覧室のユニークな形状は、建設当時の印刷本部門の担当者であった、アントーニオ・パニッツィ Antonio Panizzi (1797-1879) のアイデアによるものであったという。閲覧室の内部には、中央のカウンターを取り巻いて、同心円を描くようにカタログ・テーブルがあり、閲覧者用の机はその外側に、放射線状に並んでいた。そして、壁は一面が参考図書で埋め尽くされていた。この配置は、基本的に完成当時から1993年の閉室の日ま

で変わらなかった。そして、現在もそのままの形で博物館内で公開されている。

私がこの歴史ある円形閲覧室を訪れた頃、ここを利用するに当たっては、「まず座席を確保する」というのが鉄則であった。というのも、書庫から取り出された資料は係員によって、それぞれの閲覧者の席に配達されていたからである。誰もが黙々と資料と向き合っている閲覧室の静寂の中で、係員が資料を運ぶワゴンのガタゴトという音のみが、ドーム型の高い天井を持つ空間で響いていた。その音は今も耳に残っている。また、この閲覧室では、円形であるがゆえに、参考図書を求めて壁際を巡っていると方向感覚を失い、いつの間にもやら一周していたという笑い話のような経験もした。いずれも今となっては懐かしい思い出である。

新大英図書館

ところで、1973年に組織としては一つになった大英図書館だったが、セント・パンクラスに新図書館のための建物が完成し、所蔵資料までもが統合されて、実際上も一つの図書館として機能し始めるまでには、それからさらに25年の歳月を待たねばならなかった。

そもそも、すでに円形閲覧室が手狭になっていた大英博物館図書館と、博物館の版画素描部門を移転するアイデアは、1950年代初頭からあった。その頃の計画では、移転先は博物館の南側、グレート・ラッセル・ストリートとブルームズベリー・ウェイに挟まれた地区であった。その後、1962年には計画が具体的に進み出し、1964年の半ばには最初の設計作業が完了した。だが、それ以降の作業は難航した。環境保護運動の高まりによって建設予定地の一部が削られ、その一方で、1973年の大英図書館の発足によって、収蔵すべき資料が飛躍的に増えてしまったのだ。そこで、一旦は新たな条件に合わせて設計がやり直されたものの、結局はブルームズベリー地区への移転計画は断念されることとなった。そして、その後はすみやかに代替地の選定が行われ、国鉄が立ち退く事になっていた、現在のセント・パンクラス土地が購入

された。そして、1976年に着工された新図書館は、1998年、ついに公式開館の日を迎えたのである（一部の閲覧室は前年11月に先行して開室していた）。

セント・パンクラスの新図書館は、西にユーストン駅、東にセント・パンクラス駅、キングズ・クロス駅を臨む、ロンドンの交通の要所にある。特に本年（2007年）秋には、大陸からのユーロスターがセント・パンクラス駅まで延長されることになっており、この地域はさらなる活況を呈すると予想されている。

新図書館の面積は、建物部分が約3.1ヘクタール、その他が約2ヘクタールである。これは、ほぼ東京ドームの敷地面積に匹敵するものである。新図書館の外観は、隣にあるセント・パンクラス・チェインバーズ（19世紀に建設された、セント・パンクラス駅の正面玄関と元ホテル。現在、ユーロスターの延長を受けて、新たなホテルの開業に向けて改修工事中）と色彩的に調和するように配慮されており、そのために、外装にはセント・パンクラス・チェインバーズと同じレスターシャー産のレンガが用いられている。そこには、レンガの外装にしておけば、歳月を経ても建物が古びず、むしろ風合いを増すという、設計者の計算もあったようだ。

赤い砂岩で出来た新図書館のエンタランス・ポーチをくぐると、そこには広場（piazza）がある。ここは図書館を利用する人にとっても、しない人にとっても憩いの場であると同時に、交通量の多い図書館前のユーストン・ロードと図書館本体との間であって、騒音の緩衝地帯となっている。

図書館の玄関を入るとエンタランス・ホールが広がっている。正面には総合案内が、左手には売店とピアソン・ギャラリーがある。総合案内の左手にある階段を上がった中2階（upper ground floor）には、臨時的展示スペースやカフェ、さらには王室文庫（King's Library）とサー・ジョン・リトバルト・ギャラリーがある。王室文庫は六層から成るガラスとブロンズの塔で、中には、前述のジョージ3世の蔵書が納められている。一方、サー・ジョン・リトバルト・ギャラリーには、マ

グナカルタを始めとする、大英図書館の宝とも言える資料が展示されている。現在、図書館の内部は閲覧室以外の部分が広く一般に開放されており、こうした展示スペースには、バッグ等の所持品を持ったまま、誰でも自由に入ることができる。一方、「社会科学」、「人文科学」、「稀覯本と音楽書」等、研究分野別に分けられた閲覧室に入室する場合には利用証が必要であり、荷物は中地階（lower ground floor）にあるクロークかコインロッカーに預けて、研究に必要なものだけを、無料で提供される厚手のビニール袋に入れて持って行くことになっている。

閲覧室の利用証発行受付は、中2階東側に専用の部屋が設けられている。かつては、この受付はエンタランス・ホールに隣接した小部屋で行われていたが、今回、図書館に行ってみると、一つ上の階層のより広い部屋に変更されていた。

現在、大英図書館の閲覧室利用証を入手するためには、二種類の証明書が必要である。一つは本人確認のできるもの、これにはパスポートが利用できる。そして、もう一つが本人の現住所の確認のできるもの。これが日本人にとっては意外に厄介である。日本には、英文で住所を証明してくれる公共性の高い書類というのは意外に無いものだ。しかも、大英図書館では受付可能な書類の種類を限定しており、英文でありさえすれば、郵送されて来る公共料金等の通知書であっても受付可能とされている反面、我々がそれぞれの所属機関等で、住所に関する証明書を英文で発行してもらったとしても、「それは我々が要求している書類のリストに入っていないから」と受け付けてくれない。そこで、今回改めて「それでは、我々、日本人はどうすれば良いのか」と係員に尋ねてみたところ、図書館には日本語の読めるスタッフが数名いるので、日本語の公共料金通知書を持って来ても構わないという回答であった。但し、その日本語の読めるスタッフが常時いるとは限らないので、書類提出から利用証の発行まで一週間の余裕をみて欲しいということであった。しかし、はるばる日本から出かけて行って、利用証の発行を待つだけのために、現地で漫然と一週間を過すというのも不

都合な話である。それゆえ、大英図書館で閲覧室
利用証を申請する予定のある方は、まずは図書館
のホーム・ページで必要書類を確認し、できれば
事前に e-mail 等でコンタクトを取って相談をし、
十分な準備をして現地へ赴かれることをお勧めす

る。

さてさて、利用証発行受付室で時間を取られ過ぎ
たようだ。それでは、急いで「稀観本と音楽書閱
覧室」へ向かうことにしよう。

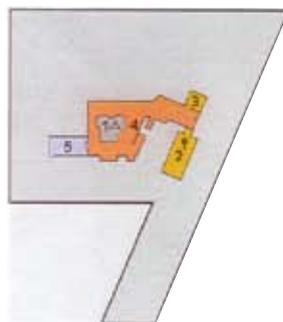
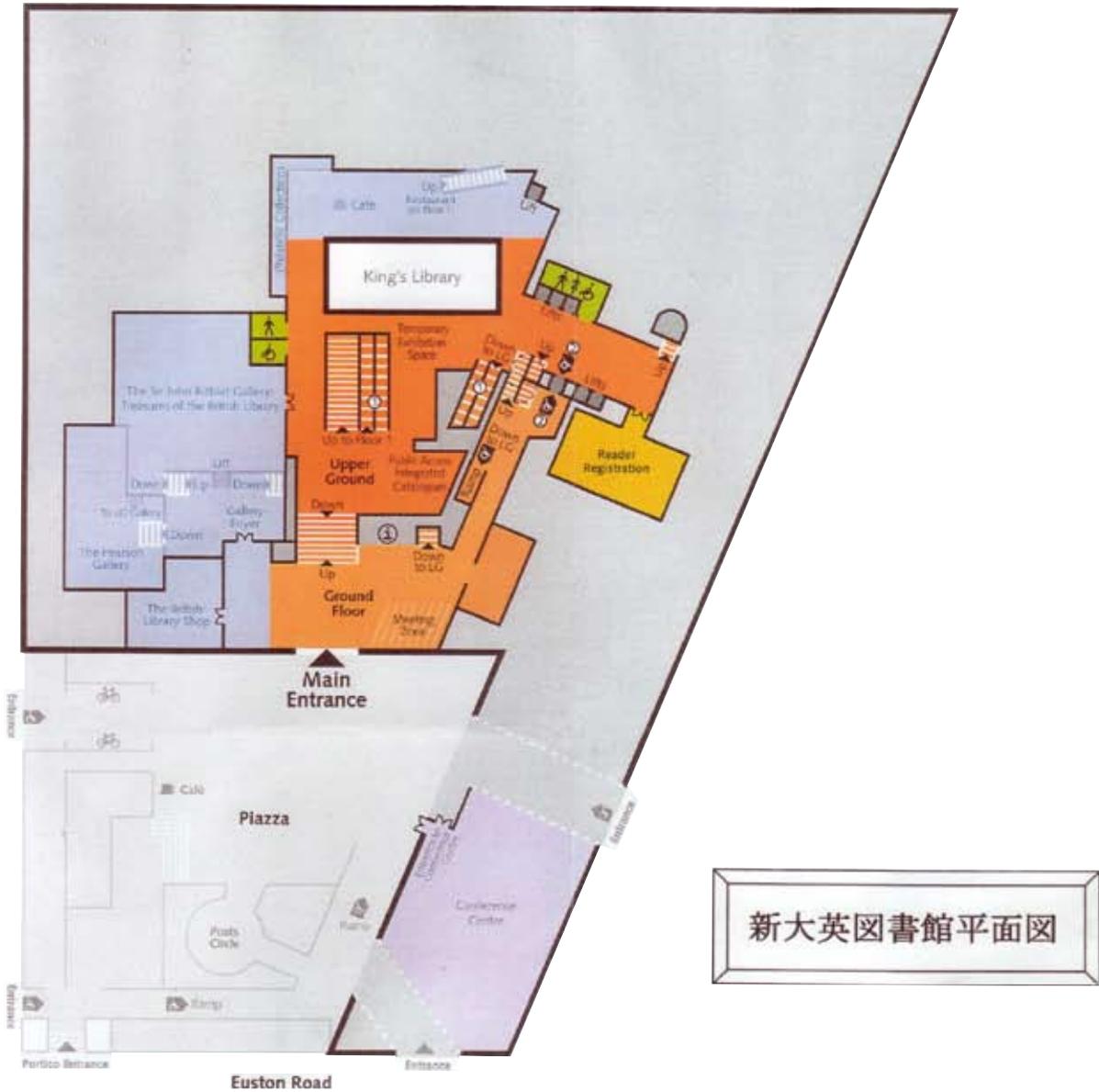


新大英図書館：エンタランス・ポーチコ
(隣の尖塔を持った建物がセント・パンクラス・チェインバーズ)

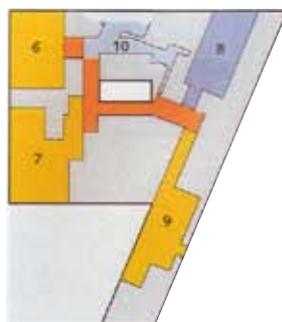


新大英図書館：広場と正面玄関

地上階および中2階



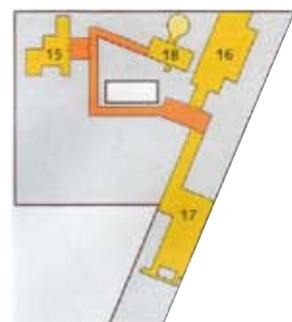
- 1 Cloakroom
- 2 Locker Room
- 3 Education Room
- 4 Clear bags
- 5 Gallery



- 6 Humanities – floor 1
- 7 Rare Books & Music
- 8 Business & IP Centre – floor 1
- 9 Social Sciences
- 10 Restaurant



- 11 Humanities – floor 2
- 12 Manuscripts
- 13 Business & IP Centre – floor 2
- 14 Science – floor 2



- 15 Maps
- 16 Asian & African Studies
- 17 Science – floor 3
- 18 Cotton Room and Friends Room

稀観本と音楽書閲覧室

「稀観本と音楽書閲覧室」は図書館西翼の二階（first floor）に位置している。

新大英図書館の閲覧室は二つのタイプに分類される。一つは開架タイプの閲覧室で、部屋のスペースの大半は資料のための書架で占められており、利用者用の机は窓際に並べられている。このタイプには、図書館東翼の「社会科学閲覧室」等が属する。一方、「稀観本と音楽書閲覧室」を含む、図書館西翼の閲覧室は閉架タイプの閲覧室で、部屋の大半は利用者用の机で占められている。また、こちらのタイプの閲覧室は、側面には窓がなく、壁一面に参考図書の本棚が並んでおり、自然光は天窗と明かり層から取り入れられている。こうした閲覧室のタイプの違いは、それぞれの部屋における利用者の滞在時間の差を考慮して決められたという。

「稀観本と音楽書閲覧室」の上には、これよりやや小さい「手稿閲覧室」があり、その真下に当たる部分では天井がかなり低くなっている。「稀観本と音楽書閲覧室」の資料出納カウンターや案内カウンターは、まさに、この「手稿閲覧室」の真下に当たる部分に設けられている。これは、この低くなった天井自体が防音効果を持つように設計されており、カウンターでの会話や物音が、他の閲覧室利用者の邪魔にならないようになっているのである。

新図書館での各閲覧室利用の手順としては、「まずは席を確保する」、これは旧図書館時代と何ら変わっていない。変わったのは、資料の請求がすべてコンピュータを通して行うようになったことと、資料は各席に配達されるのではなく、利用者が自らカウンターに取りに行くようになったことである。そのため、すべての利用者用の机には、個別の照明とコンセントに加えて、資料の到着を知らせるランプが備えられている。現状では、請求からほぼ30分以内に目的の資料が閲覧室に到着する。また、同一の資料を翌日以降も利用したければ、返却の際にカウンターの係員にその旨を伝えて、取っておいてもらうことも可能である。

「稀観本と音楽書閲覧室」には、音楽専用の案

内カウンターが別に設けられている。このカウンターの係官は「スーパー・ヴァイザー」と呼ばれており、利用者から音楽関連の質問を受け付けるだけでなく、楽譜の複写を希望する者に対しては、資料の状態をチェックし、最も適切な複写方法を指示してくれる。そして、それがオリジナル資料からの電子複写である場合には、その許可証を発行する役目も担っている。さらに、貴重書に指定されている資料を閲覧する際には、音楽専用の案内カウンター前の席を利用することになっており、貴重書の利用者が一時的に部屋を退出する場合は、このスーパー・ヴァイザーに資料の保管を依頼して出て行かねばならない。なお、「稀観本と音楽書閲覧室」では、鉛筆以外の筆記具の使用は禁止されている。

中巻の研究ノートから

それでは、最近の私が、この「稀観本と音楽書閲覧室」を利用してどのような研究をしているのか？ ここで、その一端をご紹介させて頂くことにしよう。

愛知県立芸術大学に奉職して以来、私の主要研究テーマは、「イタリア古典歌曲」になった。いわゆる「イタリア古典歌曲」とは、17～18世紀に作曲された、イタリア語の歌詞を持つ種々の声楽作品を、19世紀以降の音楽家たちがピアノ伴奏付の歌曲に編曲したもので、わが国では声楽初学者用の教材としてよく利用されている。しかし、編曲作品であるがゆえに、その様式は原曲の作曲当時のものを失い、あまりにもロマン的になり過ぎている。しかも、実は作曲者名が間違っているという例も枚挙に暇がないのである。私の研究の目的は、まずは作曲者や各曲の出典といった基本的な情報を正し、各曲を作曲当時の様式に戻して演奏できるようにすることである。

なぜ、作曲者の名前が間違ってしまったのか？ それぞれの曲にはそれぞれの歴史があり、その理由もまた様々だが、大英図書館の所蔵資料によって、その間違いと本当の作曲者を確認した例を一つ上げてみると、サルヴァトーレ・ローザ Salvatore Rosa (1615-1674) の作品としてして

広く知られている、《私はよく場所を変える Vado ben spesso cambiando loco》という曲がある。実はこの曲、ジョヴァンニ・ボノンチーニ Giovanni Bononcini (1670-1747) が作曲した、あるカンタータの中のアリアだったのである。そのカンタータの楽譜、それもボノンチーニを作曲者と明記した18世紀中の手稿譜が、大英図書館には複数所蔵されている。

《私はよく場所を変える》の場合、誤った作曲者名によってこの曲が普及する原因を作ったのは、イギリスの音楽学者、チャールズ・バーニー Charles Burney (1726-1814) であった。バーニーは音楽史を執筆するための資料収集を目的として、1770年にイタリアを旅行し、その際に、ローザの子孫という人物から音楽帳を購入した。そして、彼は、その中に記されていたこの曲をローザの自作と思い込んでしまい、書き上げた『音楽史 A General History of Music』(4 vols, 1776 - 1789) 中でそのように紹介したのである。その間違いが、今だに受け継がれているのだ。しかも、この曲を元に、フランツ・リスト Franz Liszt (1811-1886) が《サルヴァトーレ・ローザ氏のカンツォネッタ》というピアノ曲を作曲したことによって、この曲は誤った作曲者名とともに、声楽家だけでなく、ピアニストにも広く知られることになった。というわけで、すでに200年余りもローザ作で通って来た《私はよく場所を変える》が、実はボノンチーニの作品であったという事実が一般に知れ渡るまでには、まだまだ相当な時間が掛かりそうだ。

終わりに

講演終了の一週間後、私は2年ぶりに大英図書

館を訪れた。毎年、夏休みのこの時期は最も混雑が予想される時期として、図書館のホーム・ページにも警告が出されるほどだったのだが、今年の混雑はこれまでとはやや様子が違っていた。閲覧室の利用証を持っていないのだろうか、廊下でコンピュータを広げて勉強中の人々を多数見かけた。おそらく、家でやっているよりも涼しいし、気分も変わるということなのであろう。かつての大英図書館はアカデミックな研究者のみを受け付けるという方針であったが、税金から巨額を投じて新図書館が建設されてからは、広く一般の人々の利用に供するという方向へと方針が変更された。この方針転換の結果が、今夏の状況であることは確かである。この状況下に身をおいてみて、図書館の新たな方針は公共機関としては当然のものだと思う反面、何となく館内が騒然としていて、かつてのように落ち着いて研究をする雰囲気では無いと感じたのも事実で、その点はいささか残念な気がした。しかし、デジタル化した資料のネットを利用しての提供サービスを開始する等、時代の要請に従って進化し続ける大英図書館が、今後も我々、研究者にとって、重要な知の拠点の一つであり続けることは間違いない。

*

本稿は、2007年8月1日に開催された、「第61回東海地区大学図書館協議会総会・研究集会」において中巻が行った講演に基づいて、新たに書き下ろしたものである。但し、今回、大英図書館を再訪してみて、講演時に紹介したものとは多少、状況が変化していた部分があった。そこで、本稿においては情報を適宜新たなものに修正させて頂いたことをここでお断りしておく。

相互利用協定と愛知県内図書館の ILL 定期便設置実証実験 —愛知県図書館の市町村立図書館支援業務を踏まえて—

愛知県図書館

村上昇平

はじめに

2004 年 11 月に発足した東海地区図書館協議会は、公共図書館と大学図書館が館種を越えて連携と協力を進めることにより、利用者への一層のサービス向上と地域貢献の拡大を目指すこととして相互利用協定を締結し、さらなる連携体制の確立に向けての協議を進めてきた。

その連携方法のひとつとして、愛知県内の同協議会理事館の間に、相互貸借 (ILL) を円滑に行うための定期便を設置する実証実験を 2006 年 5 月から開始した。

本報告は、実証実験の前提となる愛知県図書館での市町村立図書館支援業務と定期便実証実験の内容、今後の展望についてまとめたものである。

1. 愛知県図書館における市町村立図書館支援業務

1991 年開館した愛知県図書館では、新館構想の中で次の 4 つの基本理念を打ち出した。

- ① 県民に開かれた図書館 … 幼児から高齢者、障害を持つ人まで広く使える図書館を目指す
- ② 資料情報センターとしての図書館 … 図書館の基礎となる資料を広く収集・保管し、提供することを旨とする
- ③ 県内の市町村立図書館のバックアップを行う図書館 … 県立図書館が行うべきバックアップ機能を果たす
- ④ 愛知芸術文化センターの一翼を担う図書館 … 建物が離れても連携したサービスを展開する

この基本理念は現在も引き継がれており、来館者に対する直接サービスとともに、市町村立図書館を支援することによる県域での図書館サービス

の拡充を目指している。

開館から十数年を経、改めて今後の県図書館の運営のあり方を検討した結果をまとめた「愛知県図書館のあり方に関する報告書」(2003 年 11 月)でも、レファレンスの強化、県域全体へのサービスの展開、利用者層に応じたサービスの実施とあわせて、市町村立図書館への支援の強化を進めることとしている。このように、市町村立図書館への支援は、県立の図書館として最も求められる責務であるというのが、当館での共通認識である。

こうした県立図書館の市町村立図書館への支援は、法的にも位置付けられており、図書館法の改正にあわせて告示された「公立図書館の設置及び運営上の望ましい基準」¹⁾で、県立図書館が行うべき責務として示されている。

具体的には、県立の図書館は、市町村立図書館への援助(資料の紹介・提供、情報サービスに関する援助、図書館の資料を保存、図書館運営の相談に応じる、図書館の職員の研修等)を行うこと、都道府県立図書館と市町村立図書館とのネットワークの構築(市町村立図書館との間に情報ネットワークを構築し、情報の円滑な流通の確保、資料の搬送の確保)を求め、さらに図書館間の連絡・調整の推進に努めることとしている。

2. 愛知県図書館での市町村立図書館支援の考え方

愛知県図書館での市町村立図書館支援の考え方を示したものが図 1 である。

まず、県民に等しいサービスの展開が可能になること。当館以外の県立の図書館はいくつかあるが、すべて特定の分野を対象とする専門図書館であり、公共図書館としては当館のみである。名古屋

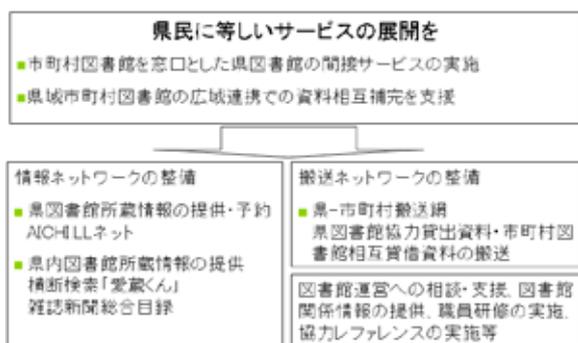


図1 愛知県図書館の市町村立図書館支援の考え方

屋市中区の官庁街にあり、名古屋市近隣に在住・在勤される方には利便性の高いロケーションではあるが、遠方に居住する方には利用しにくいのが実情である。そうした遠方の県民の方にも、市町村立図書館を窓口として県図書館の資料や情報を提供する。

多くの県立図書館では、市町村立図書館への資料の貸出を「相互貸借」ではなく「協力貸出」と呼び、県立図書館の固有業務として、市町村立図書館への県立図書館の第一義的機能としている²⁾。当館でも協力貸出は、市町村立図書館への資料提供の支援であると同時に、来館できない県民への県図書館の間接サービスであると考えている。

また、出版点数が増加し、資料収集費の制約を受ける中で、1館の図書館だけでは住民からの資料要求にすべて対応することはできない。当館も所蔵していない資料を市町村立図書館がどう提供するか。所蔵している他の市町村立図書館などに依頼して相互貸借することになるが、この際に経費が発生する。当館が県内市町村立図書館の所蔵情報と搬送手段を提供することにより県域の公立図書館を連携させ、当館が所蔵しない資料の市町村立図書館間の相互補充活動を支援しようとするものである。

ここで、公立図書館の特徴として触れておかなければならない点は、「図書館無料の原則」である。図書館法第17条では、「公立図書館は、入館料その他図書館資料の利用に対するいかなる対価をも徴収してはならない。」としている。これは、図書館の利用を無料にすることにより、すべての住民に対し、図書館が有する資料・情報の公開性

を担保しようとする考えから設けられた規定である。

住民からの資料の求めに対して、未所蔵の資料でも適正な要求であれば、できる限り購入や他館からの借受で応える。購入については当然だが、借受の経費も図書館が負担する館も多い。こうしたことから、県域を網羅する搬送ネットワークの運営が県図書館に求められており、全国の都道府県立図書館がそれぞれの方法で搬送ネットワークの構築に取り組んでいる。

3. 県域情報ネットワークと搬送ネットワーク

当館では、こうした考えに基づき次のような情報ネットワークと搬送ネットワークの整備を行っている。

(1) 県域情報ネットワークの構築

まず、当館の所蔵情報の提供のため、蔵書検索・予約・利用状況確認が行える市町村立図書館向けの「AICHI.LL ネット」をインターネット上で提供している。これは、1993年に開始した「オンライン検索システム」から引き継がれているものであり、県内全ての市町村立図書館で利用されている。

また、県内の公立図書館の所蔵する情報の提供方法として、県内公立図書館横断検索「愛蔵くん」と「雑誌新聞総合目録」がある。いずれもインターネット上に公開しており、県図書館で所蔵していない資料でも、県内の公立図書館を検索することで、訪問して閲覧することも最寄りの公立図書館に取り寄せることもできる。

当館では保存性を重視するため雑誌の貸出しは行っていないが、多くの市町村立図書館では雑誌も貸出しており、雑誌も相互貸借の対象になっている。

(2) 搬送ネットワークの整備

こうしたツールで所蔵が判った資料の協力貸出・相互貸借のために当館が運営している搬送ネットワークが通函（つうかん）である。通函という箱を用意し、これを宅配業者により当館と市町村立図書館との間を週1便往復させている。写

真1が通函で、単行本なら50冊程度を収納して搬送することができる。



写真1 通函

通函には、市町村立図書館間の相互貸借資料などの搭載を認めており、当館が所蔵していない資料でも所蔵する他館から無料で借受けることができたため、市町村立図書館の資料提供能力が大きく向上した。また、通函を廻すまでは送料の経費を利用者負担としていた図書館も、その負担を解消することができるようになった。

名古屋市だけは、当館が名古屋市内にあり、市内の1拠点図書館と位置付けていることから、分館との物流を行っているメールカーが毎日立ち寄り、資料を配送していただいている。

県内搬送ネットワークを概念図に表すと図2になる。

市町村立図書館間の相互貸借資料は、当館で積替えて配送している。

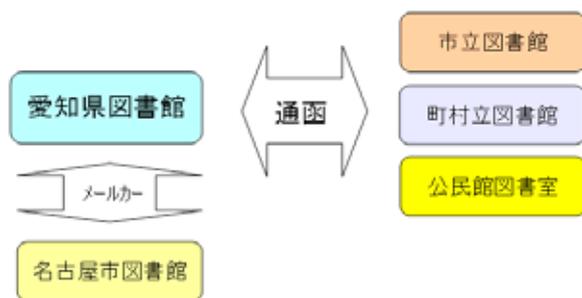


図2 県内搬送ネットワーク概念図

2005年度の当館からの協力貸出冊数は約1万5千冊、搬送ネットワークを介して相互貸借された市町村立図書館等の資料数が約2万冊となっている。当館では、今後も協力貸出の拡充と搬送ネットワークの機能強化に努めていくこととしている。

(3) 東海北陸地区県立図書館との連携

当館では、岐阜県、三重県、富山県との間とも定期便を運行している。東海北陸地区の相互協力協定³⁾があり、また、協力貸出の推進に努めるという当館の方針により、東海北陸地区の公立図書館に対して相互貸借貸出時の経費を負担してきた。相互貸借資料を個別に配送するより、相手県の県立図書館に一括して送付し、さらに相手県の県域搬送ネットワークで市町村立図書館に配送することにより、相互協力の理念を生かしながらお互いに経費の大幅な削減ができるため、2001年から合意のできた県立図書館と定期便搬送を開始した。年を追って、搭載する資料も県立図書館の資料のみから市町村立図書館の貸借資料に拡大し、回数も週2回に増やした。

その結果、県外定期便と県内の搬送ネットワークとを組み合わせで、県域を越えた市町村立図書館間の相互貸借も無料で行うことができるようになり、例えば、岡崎市の利用者がほしい本を多治見市が持っていたときに、それぞれの県図書館を経由して相互貸借を受け、提供するということが可能となった。

(なお、2007年4月から石川県とも定期便を開始し、福井県とも協議中である。こうしたことから、2007年度から発送経費負担は廃止することになった。)

4. 東海地区図書館協議会での連携協力の検討

東海地区図書館協議会の設立については、他の論文等でその詳細が紹介されており⁴⁾、今回の報告では割愛するが、同協議会で連携・協力のテーマとした項目は、「会員相互間の資料の相互利用、分担収集・保存及びサービス連携・協力のための事業」「レファレンス・サービスに関わる協同事業」「電子的資料コレクションの協同構築と公開事業」「図書館サービスに関わる情報交換と、職員の育成事業」である。これらの課題について大学と公立の実務責任者がペアを組み、それぞれ検討を進め、その結果を部会で調整することとした。

分担収集・保存のように実現化には目標が大きく長期の協議が必要なものもあり、まずは、既に

実現している相互利用・ILLをさらに円滑にするための検討や、各館が開催している研修に相互の参加を認めるなど、若干の対応を変えることで双方のメリットにできることから手をつけることになった。

こうした検討を進めるなかで、大学と公立の認識に食い違う点も現れた。

まず、公立図書館間の相互貸借と大学図書館間のILLの経費負担の違いであり、「受益者負担の原則」と「図書館無料の原則」の相違である。

大学図書館の設置は、「大学設置基準」第36条第3号で図書館の設置を定め、第38条第2号で「他の大学の図書館等との協力に努める」としている。そのため、ILLは「研究」を目的とするもので、受益者負担が原則となる。一方、公立図書館には、前述のように「図書館無料の原則」がある。

この違いから資料搬送の負担方法にも違いが出てくる。公立図書館が大学図書館にILLを申込み場合、着払いで行われるため必ず郵送等の経費負担が発生するが、県内及び近県の公立図書館間では搬送ネットワークにより無料で貸し借りできる。図書館が経費を負担する場合、この違いは大きな問題となってくる。

また、貸出資料の制約がネックになることが多い。大学図書館の学生図書や学習用図書などは貸借できないことが多く、OPACやNACSIS-Webcatなどで所蔵が判っても貸出の可否は申込んでみないと判らない。

中央館と学部図書室の対応の違いも、公立図書館側からはよく見えない点である。大学図書館に席を置くことの多い当館の職員には理解されているが、市町村立図書館では、同じ大学の資料なのに中央館の資料は借受けでき、部局図書室がだめなのが良くわからない。また、同じ大学にまとめて依頼したいが、それぞれの部局図書館での対応となる。市町村立図書館ではその辺が良く分からず混乱が見られる。

また、大学図書館では一般化しているNACSIS-ILLは公立図書館では普及しておらず、料金相殺制度も会計規則の関係から活用できない。

こうした相違点をどう整理するかは手間取った

が、大学図書館と公立図書館はともに連携を図るべき、という前向きな姿勢のもと、現状でできることを積み上げながら協力体制を作る方向で協議が進められた。

大学図書館との連携の協議については、市町村立図書館から大きな反響があった。2004年4月開催の愛知県公立図書館長協議会4月定例会の席で、当館から東海地区図書館協議会の設立と連携協力の協議を進めている旨の報告を行ったところ、ある市立図書館長から、「大学の所蔵する専門書は、市町村立図書館が持てない貴重な資料が多い。大学との連携・協力体制ができるよう是非進めて欲しい。」との発言がなされた。同年10月に開催された定例会でも、協議の進捗について質問がなされ、市町村立図書館でも、大学との連携の方法を模索していることがうかがわれた。

連携・協力部会での協議も進み、現在各館が行っている相互貸借の取扱いを前提として、公立図書館と大学図書館の連携を明文化することにより、その根拠を明確にして協力体制の基盤を作ること、参加する図書館での更なる経費の負担は困難であることから特段の経費負担の発生をさせないこと、連携協力の趣旨に賛同する図書館から順次参加できる穏やかな連携を目指すことでまとめ、「資料相互利用に関する協定」が制定された。

市町村立図書館の参加は、この協定が2005年7月に発効したことを受け、当館で県内市町村立図書館に参加の照会と取りまとめを行った。その結果、待ちかねたように、25館の市町村立図書館から参加の申込みがあり、既に理事館として参加していた当館と名古屋市の中央館及び分館の46館が県内の参加館となった。その後も参加申請が続き、2006年12月現在、この協議会の参加館79館のうち51館と過半数にのぼっている。

5. ILL 定期便実証実験に向けての検討

愛知県図書館ではこうした状況を受け、大学図書館との定期便設置についての検討をはじめた。各館が個別に行う配送では市町村立図書館の経費負担の負荷が大きく、せっかく協定に参加しても気軽には申込みできない。当然「通函のような搬

送ネットワークがあれば」という声が市町村立図書館からあがってきた。

また、公立図書館と大学図書館の間に個別の協定が相次ぎ締結され、物流の実績も増えている現状もある。三重県立図書館と三重大学が双方で経費を負担し定期便を運行し、岐阜県図書館と岐阜大学、また、静岡県立図書館と静岡大学が、公用車等による搬送を開始していた。

市町村立図書館でも、大学コンソーシアムせと（瀬戸市立図書館と瀬戸市近隣に位置する6大学）や春日井市図書館－中部大学、豊田市立中央図書館－豊田市内4大学などで徐々にネットワーク構築が進みつつあった。県外の事例では、神奈川県厚木市が市内大学を市図書館のサービスポイントと捉えて市の搬送車での運行を行い、成果をあげているという報告もなされている⁵⁾。

こうした連携の事例では、大学図書館も経費を負担していることも多く、受益者負担の原則があっても、その利便性が確認され負担が軽ければ定期便の設置も可能であろうと考えられた。

一方、当館での経費負担は可能かという問題もある。当館では大学図書館にお願いするILLがあり、経費を当館が負担していることから、この経費を転用できないかということになった。

2005年度の大学図書館からの借受状況は、全国の26大学図書館に51冊依頼しており、そのうちの1/4にあたる13冊は、名古屋大学を始めとする同協議会の理事館に依頼していた。往復の経費がかかるため、簡易書留書籍小包として1冊あたり1千円ちょっと、理事館だけでも1万4千円程かかったことになる。そう大きくない額ではあるが、今後、連携が順調に進むと大きな負担になると見込まれるため、当館だけに限っても大学へ依頼するための経費を集約化して転用することにメリットが見出せる。これに、市町村立図書館から依頼する分が加わると、県域での大きなコストメリットが生まれることが予想された。

また、当館が契約している宅配便に切り替えることで、その配送単価を大きく引き下げることが可能になる。さらに、県内大学図書館への協力貸出の経費は、当館から発送する経費を当館が負担

しており、その分も集約化できる。

以上のことから、大学図書館との定期便構想の具体化が可能という判断に至った。

この検討結果から、2006年2月に開催された連携協力部会で公立・大学間定期便実証実験を提案することになった。

実験の目的は、定期便設置による相互貸借の利用状況の変化を把握し、今後の公立図書館と大学図書館間の相互協力体制の構築に向けて基礎データの収集、定期便の運用によるコストパフォーマンスの検証に置く。

実験館は、愛知県内の東海地区図書館協議会理事館（愛知県図書館と名古屋大学、名古屋市立大学、南山大学、金城学院大学、中京大学の各図書館）で実験に参加を希望する図書館とする。

搬送回数は週1便。期間は、2006年5月～2007年3月。その間に、問題があれば事前通知のうえ中止できるようにする。また、必要なら成果が検証できるまで実験を続ける。

経費の負担は、それぞれの発送館が負担する。搭載できるものは、相互貸借資料と依頼された複写物、両館の事務連絡文書等とする、という提案である。

この実験に参加を表明された名古屋大学、名古屋市立大学、南山大学と定期便を運行するようになったが、その運行方法の概念図を図3にまとめた。

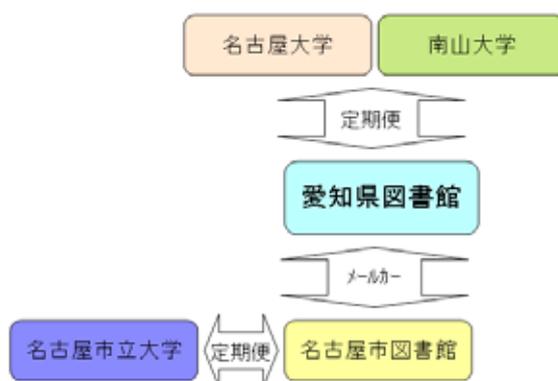


図3 公立・大学図書館間実証実験搬送概念図

名古屋大学・南山大学には、個別に宅配便で配送している。量がまだ多くないため、梱包用の封筒や小さなダンボール箱などを使用している。両

大学からは、これも量が少ないため、ゆうパックなどが使われる。名古屋市立大学とは、2006年4月から名古屋市立図書館との定期便が始まり、この便と市のメールカーを經由して行っている。

この定期便を市町村や他県の搬送ネットワークと重ねると図4になる。

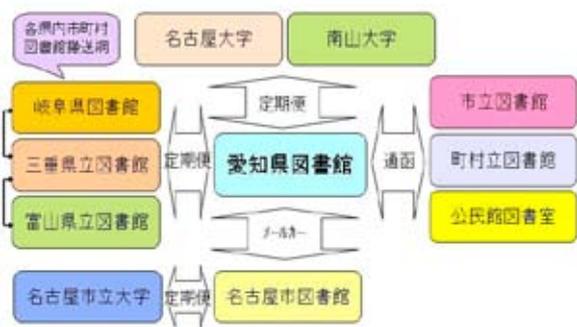


図4 愛知県図書館を中心とする搬送概念図

県内の市町村立図書館を始め他県の図書館でも利用することができるので、ブロック内の一部ではあるが大学を含めた搬送ネットワークができたといえる。

6. 実証実験の状況

こうしてスタートした実証実験は、半年余りである程度の成果が見えてきた。2006年5月～10月までの6ヶ月で、発送便数（県図書館→大学図書館）が月平均5.5便で、1大学あたり2.8便/月となる。大学から公立への貸出冊数が37冊（平均6.2冊/月）。大学から公立への返却冊数即ち公立からの貸出冊数が49冊（平均9.8冊/月）であった。

2005年度の実績と比較すると、大学からの貸出が月平均4.1冊から1.5倍、公立からの貸出が同2.1冊から5倍に増えたことになる⁶⁾。

定期便で把握している数字以外に、当館が中継しない相互貸借が別途あり、実際の相互貸借はさらに増えていると考えられるが、定期便が東海地区図書館協議会の連携活動の推進に貢献しているのではないかと考えている。しかし、総数がまだ少なく、これによってその効果が計れたとはできない。この実験はもう少し長期に行なう必要がある

と考えている。

7. 今後の展望

以上のことから、当館ではILL実証実験を2007年度以降も継続し、その活用状況を検証していく必要があるとして実験の継続を決定したが、これまでのところでみえてきた課題や展望を最後に示すまとめでしたい。

まず、1点目は、部局図書室との連携の問題である。同じキャンパス内でも、部局図書室には依然として個別に配送する必要がある、折角の定期便のメリットが生かしきれない。大学内での連携が図れないか検討をお願いしたい。（なお、この点については、名古屋大学では2007年2月から中央図書館を經由して、学部図書室等の部局図書室とのILLが行えることになった。）

2点目は、現在行っている理事館以外の大学図書館との定期便の運行への対応である。実証実験の結果によって、今後の対応を判断することになるが、基本的方針を定めておく必要がある、当面は次の対応によることとした。

まず、当館には県立の図書館として県内への公平な利便の提供が求められている。定期便の設置は公立図書館だけがメリットを受けるのではなく、公立図書館の持つ入門書や一般書籍を大学図書館で貸出することができるという大学図書館のメリットもある。先ほどの実績を見ても、公立からの貸出冊数が多いことや増加率が著しいことは、無料化による利用の増加である。従って、定期便を現行の3大学に留めるのではなく、もっと広範に運用すべきであると考えている。他方、そのための予算は認められる要素がないため、既存予算の枠内で対応する必要がある。

従来も愛知県内の大学図書館への貸出しの際は、当館が送料は負担しており、貸出実績の多い大学図書館であれば定期便の設置を前向きに検討できると考えられる。ただ、さらに経費の上積みが必要となるため、県域への資料提供に協力いただくという立場から、大学図書館での県域の公立図書館への資料提供の実績や今後の取組みという観点を踏まえながら判断する必要がある。今後、

定期便設置について相談いただく大学図書館と、個別に協議し対応を決めてゆくことになろうと考えている。

最後に、公立図書館と大学図書館の個別に行われる連携活動との協調をどう図るかという点もある。春日井市と中部大学、大学コンソーシアムせと、豊橋市と豊橋科技大、豊田市と豊田4キャンパスなどの地域ごとの公立・大学間の連携が進みつつある。例えば、こうした個別のネットワークとの連動の可能性も検討する必要があると考えられる。

今回始まった公立図書館と大学図書館との定期便は、まだその検証の結果を明確に示しうるものには至っていないが、連携協力的手段として大きな力を秘めていることは間違いなく、推緯を見守りながら定着化に向けて取り組んでゆきたい。

【注・参考文献】

- 1) 「公立図書館の設置及び運営上の望ましい基準」平成13年7月18日文部科学省告示第132号
- 2) 新出「県立図書館の「第一義的機能」(特集：地方自治制度の変貌と都道府県立図書館)」『現代の図書館』44(4)(通号180), 2006.12, pp.202-213
- 3) 「東海北陸地区県立・政令指定都市立図書館相互貸借協定」(平成7年2月15日施行)をいう。この協定の第8条で経費の負担を、「資料の送付に要する経費は、貸出については貸出館が、返却については借受館がそれぞれ負担するものとする」と定めている。
- 4) 伊藤哲谷「社会の共有財産としての図書館－大学図書館の社会との連携と貢献(小特集 社会連携)」『大学図書館研究』76, 2006.3, pp.1-14
伊藤哲谷「公共図書館と大学図書館の連携・協力を目指して－「東海地区図書館協議会」の新事業」『東海地区大学図書館協議会誌』通号50, [2005], pp.39-43
- 5) 藤沢みどり「大学図書館と公共図書館の相互貸借の事例－厚木方式とは(特集：ネットワーク時代の図書館資料相互貸借)」『現代の図書館』39(3)(通号159), 2001.9, pp.146-152
- 6) 「資料相互貸借協定に基づく実施状況集計(2005年7月～2006年2月末)」(東海地区図書館協議会調査)のうち、愛知県内の協議会に参加する公立図書館(個別協定を結ぶ春日井市、瀬戸市立を除く)が加盟大学図書館との間で行った貸借実績。

静岡県内の大学図書館における連携について

静岡大学附属図書館

大石博昭

はじめに

この報告は、静岡県における図書館連携の状況を大学図書館の視点から紹介することを意図している。しかし、本協議会での静岡県の報告がほとんど過去にないようだったので、概要的な紹介をあまり省けなかった。表題にもあえて「大学」の字を入れておくことにする。

1 大学図書館における連携

(1) 静岡県大学図書館協議会

静岡県大学図書館協議会（以下、「協議会」）は、「県内大学図書館の健全なる発展を図る」ことを目的にしている。2007年7月開催の年次総会が11回目を数え、ちょうど10周年を迎えた。1995年1月に静岡県内大学等附属図書館長懇談会の第1回を13大学出席で開催しているが、1997年11月の第4回（20大学出席）を協議会の設立総会として発足した。

事業は、県内大学図書館の振興に関する調査研究、県内大学図書館における相互協力の推進、図書館に関する研究会・研修会・講演会等の開催、関係団体との連絡・連携の強化、その他必要な事業、と会則に掲げている。

組織は、現在あるほとんどの大学図書館が参加していて、21館。予算は、各館ごと年会費5,000円徴収の規模。役員館は、会長館1、幹事館若干、監査館1で、任期2年、互選で選ばれており、現在の会長館は静岡大学附属図書館が務めている。他に、事業の推進について具体的に協議する役割の運営委員会を置き、委員若干名（個人）を当てている。

定期の総会を年1回開催し、事業計画や予算、役員選出等の議決を行うとともに、国・公・私立

や大学・短期大学・高専ごとの状況報告を行っている。総会開催は会場当番をまわりもちで実施しており、その機会に当番館大学の教員による講演や図書館見学を行っている。会議は、この他に、幹事会を年度2回程度開催している。

行事等では、一般向けの学術講演（他と共催の場合あり）、図書館職員向けの講演、データベース検索や電子ジャーナルについての実習説明会などを開催してきた。テーマを設定してのグループ討議型実務担当者研修も実施している。

これら諸活動を記録し報告するために『静岡県大学図書館協議会会報』（1999年4月創刊）を年刊で発行し、その他にも、職員名簿の作成・配付を行っている。また、加盟館職員相互の情報や意見の交換のため、利用は少ないが、メーリングリストを運用している。

なお、静岡県では、日本図書館協会主催の全国図書館大会を2003年に開催した。他県開催でも同様だろうが、この大会の第2分科会（大学・短大・高専）は、協議会が受け皿となって組織した準備委員会が企画・運営し、当日要員も加盟館から動員した。この分科会への参加を、協議会研修活動の参加とみなして対応した。

(2) その他の大学連携組織

静岡県には、短大・高専まで含めて約20の大学がある。図書館は学部・キャンパス等で別々に置かれている例もある。連携組織への加盟状況を一覧表で示しておいた。以下は大学としての連携組織だが、図書館に関わる活動を含む例だ。

a) 大学ネットワーク静岡（図書館連携企画分科会）

2003年12月発足の大学ネットワーク静岡は、

学長等の懇談会を足がかりに、県（大学室）の肝いりで設立された。学長が4年制と短大を兼ねる場合は1大学とカウントしているため、図書館単位の数え方とは微妙に異なる。役員には各大学の学長が名を連ねており、事務局は県関連の財団法人である静岡総合研究機構（SRI）が担当する。

事業は、県から委託される科学交流フォーラム開催等の事業もあるが、連携事業の柱として、当初4つのテーマで検討分科会が立ち上げられた。そのうち1つが「図書館連携」で、分科会幹事には協議会会長館の静岡大学附属図書館長が当たることになった。実質的な連携協力活動は既に協議会で行われていて、検討分科会が何を指すべきか曖昧だったが、手始めに連携の状況・取り組み可能事項についてアンケートを実施した。その結果、メンバー館全体ですぐに取り組むべき事項は見出されなかったため、提案された事項のうち、個別の館で、あるいは、いくつかの館が共同で実現できるものから取り組んでみて、成果のあがったものを全体で紹介しながら拡大を図るという方針を確認した。実質的には協議会を受け皿に進めるということにし、平成19年度に企画分科会が2つに整理されたため、図書館連携についての分科会活動は休止となった。

b) 静岡県西部高等教育ネットワーク図書館連絡会

全県的組織ではないが、静岡県西部高等教育ネットワーク会議が西部地域の3つの自治体（浜松市、磐田市、袋井市）と所在する9大学（学部等を数えている）とで組織されている。主として共同授業等を実施しており、その会議に参加している大学及び短期大学の図書館を会員とし、会員の相互協力を促進し、共同授業等を支援する目的で図書館連絡会が1999年3月に発足した。実質8館で、会長館1、幹事館2を交代で担当し活動している。相互利用実施要領を制定しており、参加大学の正規学生、教職員に加え、共同授業受講生を利用対象にしているが、当分の間は利用を館内閲覧に限るとしているため、具体的なサービスは個別館のスタンスにまかされている現状だ。

2 図書館全般における連携

(1) 静岡県図書館協会

静岡県図書館協会（以下、「協会」）は、「静岡県内における図書館事業の発展を図るとともに、本県文化の振興に寄与する」ことを目的に1980年から運営されている。平成19年度総会現在で加盟館数74館（分館を含まず）、分館まで含めると126館になる。大学図書館も、数え方が異なるだけで、前述の協議会加盟館すべてが加盟している。

事業は、会員相互の連絡提携、図書館事業の調査研究・促進及び奨励並びに広報、図書館職員の研修、図書館活動及び読書の普及活動、その他目的達成に必要な事業、と会則に掲げられている。

役員は、会長1、副会長2を含む理事（現在9名）と監事2で構成されており、大学図書館枠でも理事が出ている。事務局が県立中央図書館に置かれ、企画振興課職員が担当している。

会議としては、総会、理事会が開かれるほか、館長会や相互貸借担当者会議がある。専門委員会、企画情報専門委員会、資料専門委員会、図書館大会運営委員会の3つが置かれており、県内各図書館等から多くの委員が参加している。

研修行事は、基礎研修、レファレンス研修（基礎・応用）、運営・館長研修、児童・青少年サービス研修、大学・専門図書館研修、県外視察などが年間計画に組まれている。大学図書館としても、各研修に職員を参加させており、重宝している。

なお、静岡県図書館大会は、参加者が1,000人規模の特筆すべき行事となっている。協会と静岡県教育委員会、静岡県読書推進運動協議会の三者共催になる。ここ何年かは、大学図書館枠の分科会も設けられており、企画・運営を担当する運営委員に大学図書館職員が加わっている。

(2) 相互貸借協定と横断検索システム

静岡県内の図書館資料相互貸借制度は、協会が主体となって「静岡県公共図書館等の資料相互貸借に関する協定」が結ばれ、実施要領に基づき1995年から実施されている。自治体単位ではすべてが参加しており、大学図書館も16館が参加し

表. 静岡県内大学図書館の連携組織等加盟状況一覧

大学名等 (五十音順)	大学ネットワーク静岡 22 大学	静岡県大学図書館協議会 21 館	備考	所在地	静岡県 図書館 協会	静岡県 西部高等 教育社	東海地区 大学図書館 協議会
静岡英和学院大学、同短期大学部	静岡英和学院大学図書館	21 館		静岡市	●		13
静岡県立大学、同短期大学部	静岡県立大学附属図書館 静岡県立大学短期大学部附属図書館			静岡市	●		●
静岡産業大学	静岡産業大学図書館 静岡産業大学藤枝図書館			磐田市 藤枝市	●	●	●
静岡大学	静岡大学附属図書館		(本館) 浜松分館	静岡市 浜松市	●	●	●
静岡福祉大学	静岡福祉大学附属図書館			焼津市	●		
静岡文化芸術大学	静岡文化芸術大学図書館・情報センター			浜松市	●	●	●
静岡理工科大学	静岡理工科大学附属図書館			袋井市	●	●	●
聖隷クリストファー大学、同看護短期大学部	聖隷クリストファー大学図書館			浜松市	●	●	●
総合研究大学院大学 生命科学研究所遺伝学専攻 (情報・システム研究機構 国立遺伝学研究所)			国立遺伝学研究所 図書室 (*総研大附属図書館とは独立した運営)	三島市			
東海大学 開発工学部	東海大学付属図書館沼津図書館			沼津市	●		●
東海大学 海洋学部	東海大学付属図書館清水図書館			静岡市	●		●
東海大学 短期大学部	東海大学短期大学部静岡図書館			静岡市	●		●
東京女子医科大学 看護学部			東京女子医科大学図書館 大東分室	掛川市			
常葉学園大学	常葉学園大学附属図書館			静岡市	●		●
常葉学園短期大学	常葉学園短期大学附属図書館之山文庫			静岡市	●		
日本大学 国際関係学部、日本大学短期大学部	日本大学国際関係学部図書館			三島市	●		●
沼津工業高等専門学校	沼津工業高等専門学校図書館			沼津市	●		
浜松医科大学	浜松医科大学附属図書館			浜松市	●	●	●
浜松大学	浜松大学附属図書館			浜松市	●	●	
浜松学院大学、同短期大学部	浜松学院大学図書館			浜松市	●	●	
富士常葉大学	富士常葉大学附属図書館			浜松市 富士市	●	●	
LEC 東京リーガルマインド大学 静岡キャンパス			株式会社立大学(構造改革特区)、図書館なし 通信教育課程・・・閉校か?	静岡市			
その他の県内所在大学							
光産業創成大学院大学				浜松市			
放送大学 静岡学習センター			サテライトは静岡市、浜松市にも	三島市			

ている。相互貸借担当者会議が毎年度の協会行事として開催されている。

県立中央図書館のサーバでは、2004年4月から「おうだんくん」という名の静岡県横断検索システムが稼動しており、ホームページから誰でも利用できる。検索対象の公共図書館を東部・中部・西部の3地区に分けるなど適宜指定でき、また、大学図書館・その他を含めたりして、一度の検索語入力ですべて検索ができる。検索対象の実態は各館OPACデータベースで、各館ごとのヒット件数が出た後、それぞれの一覧表示が選べる。1件ごとの詳細情報は各館OPACの画面表示になる。なお、参加図書館向けには、このシステムによって相互貸借依頼・受付がオンラインで行われている。

大学からは、このシステムに、静岡県立大学（短大含む）が最初から、続いて静岡文化芸術大学が参加し、静岡大学も2006年6月から参加した。各大学図書館はOPACを直接公開しているが、地域の人々からは、横断検索による間接的公開の方がより多く活用されているかもしれない。ただ、大学図書館の特殊性を理解しないままに公共図書館の延長で目につれてしまうので、うまく利用していただけないのではないかと心配な面がある。

3 公共図書館との連携－静岡大学附属図書館を例として－

(1) 静岡県立中央図書館と本館（静岡）

静岡県立中央図書館は、図書館協力事業として県内公共図書館との間に協力車を運行しており、相互貸借図書の搬送を行っている。対象を大学図書館まで広げられると理想なのだが、平成18年度から、それとは別の枠組み、すなわち静岡大学附属図書館の本館と静岡県立中央図書館とが隔週で個別に車を出し合う相互搬送の形で実現した。あわせて週1便行き来している。職員同士が互いの様子を知るメリットも生まれた。

こうした物流は、理念としては相互貸借を目的と考えるのが常道だろう。しかし、そうした利用が一気に増えるとも思えないので、静岡大学の教職員や学生が県立図書館から借りた図書を附属図

書館本館カウンターでも返却できることとした。案の定、かなりの返却利用が発生した。

平成18年度の利用実績は、以下のとおり。ILL依頼（借用）119冊。ILL受付（貸出）26冊。県立図書館貸出図書の受取り返送1,580冊（1回あたり最大99冊、平均31冊）。

大学所属の利用者は、同じ市内にある2つの図書館を使い分けることができる。借りる場合には出向いて行って現物を手にとってみる必要もあるだろうが、単に返すだけなら足を運ぶのは面倒だ。毎日のように通っている大学キャンパスで返却できるのは悪くない。利用者の手間が少しでも減るならば、それもよいことだろう。

現状では、ILLの量はそれほど増えていない。一般書を借りる大学側からの数だけが増えていて恐縮だ。その逆の貸出が少ないのが寂しい。公共図書館にない専門書を提供できてこそ大学図書館からの貢献といえるので、これからの期待したい。この相互搬送の延長上に県内ネットワークがつかない。県内全域への貢献ができるようになっていけばうれしいと思う。

(2) 浜松市立城北図書館と浜松分館

2006年10月に、静岡大学浜松キャンパスの近くに浜松市立図書館の分館である城北図書館が移転リニューアルオープンした。浜松市は、前年7月に12市町村を統合合併して再出発しており、城北図書館は、それに伴う図書館システム統合のサーバ設置も含め、第2中央館機能を備えたものとなった。図書のICタグ装備も一気に実施したという。自動書庫の設備、閲覧サービス業務への外部委託導入など、話題豊富な新館だ。

静岡大学附属図書館の浜松分館は、工学部分館から出発して、学生数増大や学部増設の変化に対応しきれていない。従来から一般書や実用書の需要は市立図書館を頼りにしてきた面がある。この機会に両館の打ち合わせを行い、データベースや雑誌の品揃えを確認するなど、所蔵資料やサービスについての相互理解を図り、連携を模索した。その流れで、忙しい準備時期にもかかわらず、浜松分館主催の大学教職員向け事前見学会を開催さ

せていただき、PRにも努めた。

(3) 静岡大学附属図書館の一般公開の状況

静岡大学附属図書館では、「一般市民等への公開要領」を1989年12月に定めている。

2002年の途中から日曜・祝日を含む休日全面開館（開館時間9～19時は、全国的にも長時間の例といえよう）を、続けて2003年4月から学外者への図書直接貸出しを開始した。これらの改変は、静岡大学が地域貢献を大学の使命として掲げたのを機に、図書館活動としても地域公開の取り組みを強めたものだ。

平成16年度（2004）の国立大学法人化の際は、情報公開制度との整合性を図る利用規程改正、学外者向け利用案内パンフレット作成を行った。

2006年6月からは、前述のとおり、静岡県横断検索システム「おうだんくん」に参加した。

平成18年度の学外者の利用統計は、以下のとおり。入館者数は、入館フリーにつき記名手続きのみカウントで少なめの数だが、3,969名（本館2,751名、浜松分館1,218名）。貸出冊数は、1,496冊（本館704冊、浜松分館792冊）。

その他の取り組みでは、公開講演会や展示を行ってきているが、必ずしも定例化していない。そんな中、2005年から本館で「のぞいてみよう大学の図書館」と題する図書館公開イベントを開始した。これは、創立記念日行事として、その1日だけでも地域住民や学外者を利用者の中心にすえて通常時間帯対応をしようというものだ。初回は、自治会への案内チラシ配布も行い、館長トークを中心に、書庫内ツアーや図書館利用・OPACガイダンス等多彩な内容で実施した。2006年は、「おうだんくん」参加にあわせて、公共図書館や学校図書館の関係者を主たる対象にし、2007年は、所属学生と学外者との境界に位置する市民開放授業受講生を主たる対象にして実施した。

おわりに

2007年1月12日報告から掲載まで月日の経過があったので、原則として平成18年度末までの状況を示すこととし、一部平成19年度の事項にも触れた。元の構成をほぼ踏襲したが、記述に精粗があることをお断りしておく。

岐阜県内の図書館連携について

岐阜大学学術情報部情報サービス課

木村 晴茂

1. はじめに

岐阜県では、各館種ごとに協議会を持ち、それらを統合する形で岐阜県図書館協会が組織され、館種間の協力体制を構築している。

ここでは、大学図書館の立場から、公共図書館を中心とした県内各図書館との連携協力の状況について報告する。

2. 岐阜県内の図書館協力体制

岐阜県図書館協会

岐阜県内の図書館は館種ごとに公共、大学、学校、専門、公民館の各協議会を組織し連携協力を行なっている。さらに、これら 5 団体で岐阜県図書館協会（以下「岐図協」という。）を構成し、館種を超えた図書館の協力体制を敷いている。岐図協では、図書館活動研究大会、実務講習会の開催や、「岐阜県の図書館」（主要加盟館の利用方法一覧）の発行を行なっている。

また、連携協力の検討組織として、傘下各協議会から選出された委員で構成する「相互協力部会」を設置し、具体的な連携方策の検討を行なっている。しかし、これまでは館の数や日常活動の密接さなどから、公共と学校、公民館の連携協力が中心となり、大学図書館が加わった連携協力は実績をあげてこなかった。この点の反省から、平成 18 年度は「大学図書館との協力」をテーマにおいて

公共図書館連絡網

県内の公共図書館には、岐阜県図書館を中心として従来から強固な連携のネットワークができており、岐阜県図書館を集配館とした物流システムを構築して、同館を中心に維持・運用している。

最近、学校図書館がこれに加わり、物流システ

ムが拡大された。大学図書館は、現在のところは参加していない。

岐阜県総合目録

大学図書館も加わった連携協力としては、平成 13 年 2 月より運用している、館種を超えた横断検索システムである「岐阜県総合目録」（図 1）がある。このシステムも構築に当たっては、5 館種からの委員で構成する岐阜県総合目録研究会を組織し開発を行なった。

書 籍 検 索

ウェブサイト上で蔵書検索のできる県内市町村立図書館の所蔵を一括検索できます。
本サービスのご利用には JavaScript の使用を有効にいただく必要があります。
検索を中断するときには、ブラウザの [中止] ボタンを押してください。

【検索キーワード】

書名		
著者名	(姓)	(名)
出版社名		
検索文字	◎漢字 ○カナ	

検索実行 リセット

キーワード入力を行い、図書館を選択して「検索実行」ボタンを押してください。

【図書館選択】

全選択 全解除

<input checked="" type="checkbox"/> 公共図書館	
<input checked="" type="checkbox"/> 岐阜県図書館	<input checked="" type="checkbox"/> 図書 <input checked="" type="checkbox"/> 雑誌 <input checked="" type="checkbox"/> AV <input checked="" type="checkbox"/> 郷土 <input checked="" type="checkbox"/> 児童
<input checked="" type="checkbox"/> 岐阜地区	<input checked="" type="checkbox"/> 児童研 <input checked="" type="checkbox"/> 分布図 <input checked="" type="checkbox"/> 新聞 <input checked="" type="checkbox"/> 雑誌
<input checked="" type="checkbox"/> 岐阜市立図書館 Link	<input checked="" type="radio"/> 図書検索 <input checked="" type="radio"/> 雑誌検索 <input type="radio"/> AV検索
	<input type="checkbox"/> フォワード

図 1 岐阜県総合目録（横断検索）

現在、公共 26 館、大学 5 館、専門 5 館が参加し広く活用されているが、その機能は所蔵・所在検索にとどまっている。

3. 岐阜県内大学図書館の学外者利用

岐阜県内の大学図書館の学外者利用条件の状況は図 2 のとおりである。

来館利用のうち資料の閲覧、複写は、一部に年齢制限（中高生の利用を制限）をしている館はあるもののほとんどの館で基本的には認めている。しかし、貸出については、年齢等の制限がある館を含めても実施館は全体の半分にとどまる。また、



図2 県内大学図書館の学外者利用条件

相互貸借については、大学図書館間では85%の館で行なっているものの、公共図書館との間で貸借を実施しているのは半数強の館にとどまっている。

ひとくくりに大学図書館といっても、その規模や職員数、大学の方針等、さまざまな条件があり、サービスレベルの統一は難しい。各館がそれぞれの事情に応じて、自館利用者へのサービスを展開しているというレベルにとどまっているというのが実状である。

4. 公共図書館との連携協力

協議会レベルでの検討

しかし、公共図書館・学校図書館から大学図書館の利用について便宜を図ってほしいとの要請もあるため、前述の岐図協相互協力部会では「大学図書館との連携・協力」について検討を行い、また、大学図書館協議会においても、物流システムの構築可能性を中心に検討を開始した。しかし、いずれも具体的な成果を挙げるには至っていない。

各館のサービス状況は「岐阜県の図書館」で確認でき、すでに、完全ではないものの個別に相互貸借は実施されている。そのため、公共図書館全体と大学図書館全体での協力の枠組みの構築は、それにかかる負荷を考えると、享受できるメリットが見えにくいため、具体化しにくいのが実状である。

個別の相互協力協定：

岐阜県図書館－岐阜大学図書館

一方で、岐阜県図書館と岐阜大学図書館のように個別の公共図書館と大学図書館の単館同士で協力協定を締結する例が出てきている。

岐阜県図書館と岐阜大学図書館の場合は、平成15年度に相互協力協定を締結し、相互貸借・文献複写、参考調査、分担保存、研修・人的交流の面で協力していくことになった。ただ、相互貸借・文献複写や参考調査などは従来から実施しており、協力意思の再確認と手続きの明確化の意味が大きかったといえる。なお、研修については、両館が共催して全館種対象の研修会を開始した。

課題としては、経費面を含む物流システムの確立が一番大きい。これが整備できれば、県図書館を通して公共図書館連絡網と連結が可能になる。現在は試行段階であるが、すでに市町村図書館から県図書館経由で公共図書館連絡網を使った相互貸借の依頼も出始めている。

なお、同様の協定は各務原地区でも動きが出ている。

5. 展望－今後の課題

以上、岐阜県における公共図書館と大学図書館との連携協力の現状を概観したが、全体としては、岐阜県内の公共図書館と大学図書館の連携協力は、館種間での組織的な取組には至っていない。

今後、こうした連携協力を進展させるためには以下のような点が課題になる。

- ・サービス内容の周知（大学→公共）
- ・協力協定の拡大（個別館間→協議会レベル）
- ・物流システムの整備（大学図書館網の整備、あるいは公共図書館連絡網への参加）
- ・職員の交流（参考調査への活用）

このうち、物流システムは、大学図書館網の整備、個別の協力協定による公共図書館網との接続の両面から検討が必要である。

また、職員の交流については、研修会等の機会に意見交換の場を設定するような地道な工夫も必要であろう。

いずれにしろ、岐図協の組織を通じた大きな枠組みでの連携協力と、個別協力協定等の近い館同士の顔が見える協力の双方から、持続可能で実効性のある連携協力を構築していきたいと考えている。

東海目録 (TOMcat) - 病院図書室と大学図書館の連携 -

東海地区医学図書館協議会東海目録ワーキンググループ

愛知医科大学医学情報センター (図書館) 坪内政義

I. はじめに

東海地区医学図書館協議会 (以下「協議会」という。) は 2005 年 2 月から、東海地区の医学系大学図書館や病院図書室など医療関連機関の雑誌書誌・所蔵データを搭載した Web 目録 (東海目録 TOMcat = The TOKAI Medical Serials Catalog <http://webcat.sunmedia.jp/tomcat/>) を運営している。この事業をとおして、病院図書室と大学図書館の連携の一例を報告する。

II. 東海地区の医学系図書館 (室)

1. 東海地区医学図書館協議会

協議会は 1972 年に設立された。愛知、岐阜、三重、静岡の大学と病院を中心に医療関連機関図書室の連携を図り、東海地区の医学・医療への貢献をめざす。2007 年 7 月現在の会員は、正会員 13 機関 (大学図書館 9、病院図書館 4)、賛助会員 9 機関である (後述の目録会員を除く)。ただし、活動のほとんどは非会員も含んで行われる。NPO 法人日本医学図書館協会 (以下「JMLA」という。) 東海地区会の関連組織である。

- ① 研修会等の開催 (年 2 ~ 3 回) 及び実務者間の情報交換
- ② 東海目録 Web 版の運営
- ③ 会員・病院向け電子ジャーナルコンソーシアムの運営
- ④ 医師、歯科医師及びその他の医療従事者への文献提供

以上が主な事業である。

2. 東海地区の病院図書室

本協議会以外の組織、例えば「近畿病院図書室協議会」や「日本病院ライブラリー協会」に加盟する図書室が各県それぞれに存在するが、県独自

の組織・ネットワークを有するのは三重県 (三重県病院図書室研究会) と静岡県 (静岡県医療機関図書室連絡会) である。

1998 年に協議会が行った病院図書室の現状に関するアンケート (対象 151 室、回答 72 室) によると、4 県下の病院のほとんどに図書室は存在するが、専任担当者が配置されているのは約半数。文献複写業務は約半数が実施しているが、多くは業者に委託するか利用者に手続きをまかせている。二次資料を所蔵する図書室は半数以下であった。ただし、病院機能評価などが進み、現在の業務環境は改善されていると思われる。

III. 東海目録作成の経緯

1. 発端

1997 年 11 月 27 日に開催された協議会の実務担当者会議「大学図書館と病院図書室の連携を求めて」において、相互貸借の現状が話し合われたことが発端である。当時、病院図書室の文献複写需要が一挙に増加、病院図書室は文献入手に困窮し、大学図書館に依頼する際に混乱をまねいた。大学図書館から相互貸借ルールの徹底が求められ、病院図書室からは小規模図書室の現状に対する理解が訴えられた。病院図書室相互の協力が必要だったがその手立てはない。そこで、東海地区の病院図書室と大学図書館の雑誌所蔵データを合体した総合目録を作ることで、病院と大学の相互理解と協力が得られると考えた。目録運営による病院図書室のバックアップが協議会の役割として大きな意味を持つことになった。

2. 目録作成アンケートと書誌データの準備

1998 年に行ったアンケート (前出) で、目録作成に関する要望を聞いたところ、身近にある病院

図書室間でやりとりをしたい、地区のネットワーク化を計り便宜を図ってもらいたい、病院図書室の実態を理解して欲しい。こうした意見が寄せられた。また、目録の必要性を問うたところ、「必要」が48病院（68%）、「どちらともいえない」が22病院（31%）、「不要」が1病院（1%）であった。

この結果から必要性が認められると判断し、協議会は1998年中にワーキンググループを立ち上げ、目録作成の検討に入った。利用予想や作成手順、費用を検討、データ作成とメンテナンス委託業者を（株）サンメディアに決定した。

また、基本となる書誌データに「近畿病院図書室協議会医学雑誌総目録1997年改訂版」のデータを利用させてもらうこととし、近畿病院図書室協議会に協力を依頼、承諾を得た。

NACSIS-CATに参加する機関については、国立情報学研究所（以下「NII」という。）のデータを流用申請することとした。

3. 目録作成の過程

1999年に活動目的を作成検討から実際の運営へと変えたワーキンググループが発足、再度、病院図書室へのアンケートを実施し、データ提出調査、すなわち目録参加機関を確認した。結果、愛知県21、岐阜県6、三重県9、静岡県22の計53図書室から参加の意志表示があった（のち3室が辞退）。大学及び協議会加盟館は11館が参加した。

2000年6月に近畿病院図書室協議会書誌データの追加点検を行い、10月に参加図書室に対して所蔵データ提出を依頼した。2001年1月からデータ入力と編集に着手、3月にはNACSIS-CAT登録データをNIIから入手、膨大な書誌の整理に時間を費やし、12月に病院と大学両データの合体作業を行った。2002年2月に書誌および所蔵データを校正、同年夏に参加機関データ（利用案内）を再確認、秋に冊子体のデータ校正を行い、2002年12月、ようやく「東海目録2002年版」は出版された。

2003年11月に2003年補遺版を作成、それ以降はJMLAホームページ「地区会活動、東海地区ページ」に東海目録のページを設け、所蔵や機関案内の修正あるいは新規データを掲載した。

IV. 冊子の意義

目録作成にあたり、当初、紙媒体の目録にこだわった理由は、さまざまな業務環境にある図書室が等しく扱える媒体は「紙」であることであった。また、協議会の事業として「形あるもの」を残し、地区ネットワークの「礎（いしずえ）」にしたいという思いもあった。しかし、時代の趨勢と業務の変化に伴って、いずれ目録形態は変えざるを得ないと予想していた。2002年の協議会資料に、今後の展望として以下があげられている。

- ①相互貸借普及のための研修会の実施
- ②病院図書室間での相互協力体制の確立
- ③地区内協力と協議会活動をリンクさせるため、病院図書室の会員化を検討
- ④目録参加館の拡充
- ⑤目録の電子化と電子媒体を使った利用システムの開発

V. Web版の意義

冊子発行時にすでに必要性が認められていたWeb版だが、データ更新、検索機能など、利便性においてその価値は疑いを入れない。また、図書室業務が十分整備されていない機関が存在する場合、その地区独自のWeb目録は有効である。なぜなら、そうした機関が必要とするのは業務整備と他図書室との連携であり、日常的に役立つツールとそれに基づく身近なネットワークがそれぞれの業務を支えて行くからである。

協議会は2004年6月に目録のWeb化を決定。データベース作成と運用メンテナンスを引き続き（株）サンメディアに委託した。10月から11月にかけてWeb化のお知らせとデモ版による説明会を東海4県で開催。12月に正式運用を広報し、改めて目録への参加を呼びかけた。年が明けて、参加機関にIDとパスワードを通知、2005年2月1日に稼働を開始した。

VI. Web版運営と参加の考え方

目録参加を呼びかけた際に確認したのは、データ公開方法と相互貸借への対応である。目録は相互貸借のためのものであるが、各機関の業務対

応はさまざまである。すべての機関が同レベルのサービスを提供できるとは限らない。また、Webでのデータ公開によって業務量がいたずらに増えないよう注意を払う必要もある。東海目録への参加方法（＝文献提供の仕方）は参加機関自身が決める。業務の現状にあわせた参加形態を可能とするところに東海目録の特徴がある。

データ公開と相互貸借への対応を次の3種類用意した。参加機関はいずれかの方法を選ぶことができる。

- ①参加機関及びその他一般に対してデータ公開し、相互貸借業務もすべてを対象に実施する。
- ②参加機関に対してのみデータ公開し、相互貸借業務も参加機関に対してのみ実施する。（一般にはデータは見えない）
- ③参加機関に対してはデータ公開するが、相互貸借業務は行わない。（一般にはデータは見えない）

その他、運営に関する詳細は「JMLA、東海地区、東海目録ページ」の「東海目録 Web 版運営方針」を参照されたい。

<http://wwwsoc.nii.ac.jp/jmla/chikukai/tokai/mokuroku/toukaimokuroku.htm>

参加機関向け Web 画面の例を図 1、2 に示す。データ公開と相互貸借への対応を設定でき、それが検索結果表示に反映される。一般 Visitor 向け画面では、一般にも公開可とした参加機関の所蔵データのみが表示され、機関情報表示も簡略形になっている。



図1 機関情報設定画面
(データ公開と相互貸借業務対応を選択)



図2 雑誌検索結果表示画面

2007年1月時点の参加機関数は、病院図書室68機関、協議会加盟機関12機関、その他の大学4機関の計84機関である。参加機関が選択したデータ公開と相互貸借への対応は、一般にも公開し相互貸借可が25機関、参加機関にのみ公開し相互貸借実施が50機関、参加機関には公開するが相互貸借は行わないが9機関であった。

VII. 運営の課題と実践

1. 運営方法の見直し

東海目録は、協議会が病院図書室との連携・サポートの目的で運営してきた。手本とした近畿病院図書室協議会の目録と異なり、参加機関を組織化せず、会員制を採用していなかった。会則、会費もなく、データ提出さえあれば参加は自由であった。運営は協議会の経費と人員によって行われていたが、組織を持たないだけに、図書室間のコミュニケーション・意志統一を図る手段が重要であった。ユーザー会、ホームページ、メーリングリスト等の活用によって連絡を密にし、運営が協議会の独断にならないよう注意を払ってきた。

その一方、運営が軌道に乗るにつれて、目録の維持とネットワークの確立のために各機関の運営参加が必要と考え、望ましい方法を模索してきた。目録は参加機関の自主性を旨とするもので、理念の上からはデータ提出すること自体がすでに運営に関わっているといえるが、実際の運用においては方法の具体化が求められる。さしあたっては運営経費の問題がある。協議会の予算には限界があ

り、参加機関が無理のない程度に運営費を負担する制度が必要となった。そこで、2006年度に、負担の可否、負担可能額、参加機関が望む費目などをアンケート調査した。その結果、2007年度から協議会に目録会員制度を導入し、会費による年間運営費負担を実施することになった。その準備として、2006年8月には東海目録運営規程を制定、協議会会則の関連条項も改正した。

(研修会後、2007年4月1日から目録会員制度がスタートした。2007年7月31日時点の会員構成は表1のとおりである。)

表1 東海目録会員構成(2007年7月31日時点)
(単位:機関)

会員種別	区分	愛知県	岐阜県	三重県	静岡県	計
正会員	病院	2	0	0	2	4
	大学	5	2	0	1	8
目録会員	病院	22	9	4	24	59
	大学	0	1	0	0	1
予備会員	病院	1	0	0	1	2
	大学	0	0	0	0	0
支援機関	病院	0	0	0	0	0
	大学	0	1	1	1	3

※正会員は目録会員とみなす(正会員は13機関だが、2007年度に新入会した1大学は目録にデータ登録していないため表には含んでいない)

※予備会員は目録に参加して相互貸借業務を行うため準備中の機関

※支援機関は協議会が東海目録事業へのサポートを依頼した機関

2. 目録研修会とコミュニケーション

地区の連携において、研修活動は目録の運用と両輪の関係にある。2005年10月と11月に新規参加図書室(参加希望含む)と相互貸借業務初心者機関を対象とした「文献相互利用入門講座」を開催。2006年度からは、目録ユーザー会の一環として、図書室運営の初心者機関を対象にした入門講座「病院図書室業務の基礎講座シリーズ」を開始した。

そのほか、目録会員はじめ地区の図書室が参加する東海目録メーリングリストが各種連絡やレファレンスに活用されている。また、東海目録を賛助会員(医師会、歯科医師会)への文献サービスに役立てる方策について検討している。

3. システム保守・改善

稼動開始以降、2006年度までに継続して取り組んだ事項は次のとおりである。

- ① 2006年6月にバージョンアップ版を公開。
- ② NACSIS データにより大学を中心に所蔵データを一括更新。今後の更新方法を検討中。
- ③ 電子ジャーナル書誌を作成、Print 版とは別に所蔵登録。NACSIS に書誌がない場合は「EJ あり」等の注記を別枠に表示。
- ④ 医中誌 Web 検索結果に東海目録へのリンクアイコンを表示。
- ⑤ 所蔵データ修正画面の機能改良、所蔵年表示の変更、ILL 状態表示機能の追加。

VIII. おわりに—東海目録の役割

東海目録は、東海地区医学系図書館(室)の相互協力体制を築き、維持して行くための「実用的なシンボル」である。その活動の要点は、病院図書室と大学図書館の連携にある。

こうした地区ネットワークが各所に生まれ、やがて連結されて全国規模の相互協力に発展することが望まれる。東海地区のすべての図書館(室)が館種や規模を問わず同様の水準で業務を行い、全国ネットワークに参加する日が来れば、東海目録は役割を終える。しかし、目録運営をとおして培われた連携の精神は地区の財産として引き継がれて行くと考えている。

本稿は研修会での発表にその後の運営状況を加えた。なお「病院図書館」2005; 25: 160-164.でも同事業の運営を報告しており、両報告の内容には重複があることをお断りする。

図書館の教育支援、地域貢献：豊田高専の英語多読を通して

豊田工業高等専門学校電気・電子システム工学科

西 澤 一

1. 英語多読の教育効果

「専門には強いが、英語は苦手」と言われ続け、JABEE 認定で最大の障害と考えられていた高専生の英語運用能力は、英語多読授業で顕著に改善されました。多読授業 3 年目となる 4 年生（電気・電子システム工学科）の TOEIC 平均点（2006 年度自己ベスト平均は 433 点。英語圏への留学経験者 2 名を除く）は、同年代の全国高専平均より 99 点高く、また、全国大学 1 年平均（工学部だけでなく文系学部も含む）をも上回り、英語に対する学生の苦手意識は消えつつあります。電気・電子システム工学科では、2009 年度に、専攻科を含めて 6 年間、多読授業を継続できる体制が完成します。

Harry Potter 1～6 巻を数ヶ月であっさり読んでしまいます。

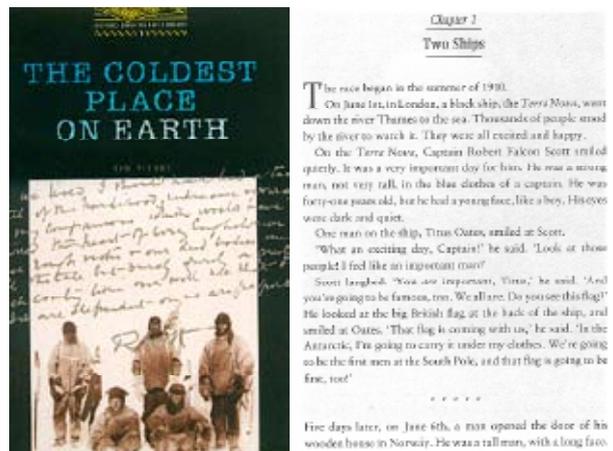


図 2 高校 1 年のリーダー程度の英文 (Oxford Bookworm Stage 1 6,300 語)

E科データでは、留学生、英語圏への留学経験者を対象者から除く公開、団体受験は区別せず、複数回受験者は最高点を採用
高校、大学、高専データは TOEIC テスト 2006 DATA & ANALYSIS より

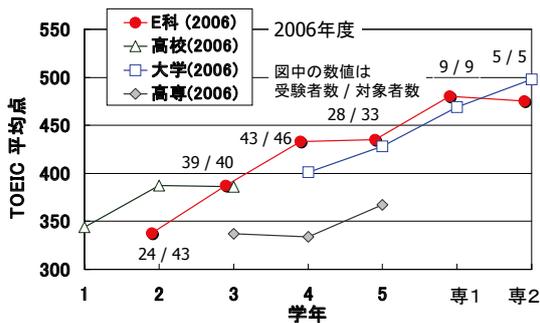


図 1 電気・電子システム工学科 (E科) 学生の学年別 TOEIC 平均点 (2006 年度)¹⁾

2 年：多読 1 年目、3 年：多読 2 年目
4 年～専 2 年：多読 3 年目

3 年間で 45 万語の英文を読んだ平均的な学生は、高校 1 年のリーダー程度の（初見）英文、例えば 6,000 語くらいの英文（図 2）を 1 時間で読んでも疲れず、300 万語を読んだ意欲的な学生は、

従来、外国人講師による小人数授業や最新の LL 教室、マルチメディア学習システムによっても改善できず、創立から 40 年が経過した懸案を、3 単位の多読授業が解決したことに、担当者も驚いています。

また、TOEIC 受験対策授業を計画する必要が無いことも、嬉しい限りです。

この変化をもたらした英語多読授業は、電気通信大学の酒井邦秀先生が提唱、SSS 英語学習法研究会のホームページ²⁾や「教室で読む英語 100 万語」³⁾等の関連図書で紹介され、社会人を中心に全国に広まりつつある 100 万語多読（以下、多読と略称）の実践例です。受講学生は多読三原則（辞書はひかない／分らないところはとばす／つまらなくなったらやめる）に従って、やさしい英文を大量に読みます。英語に関する（日本語で表現された）知識を学ぶのではなく、文脈から切り離された単語や短文を覚えるのでもありません。既習の

知識で理解できるやさしい英文を楽しみながら大量に読むことで、英文の意味を（日本語を介することなく）直接、無意識に素早く理解できるようになることを目指すのです。

2. 英語多読の成否を分ける要因

我々の実践によると、学生自らが日本語に翻訳せず、英文を直接理解する多読の効果を実感できるには、約30万語の英語多読が必要です⁴⁾。毎分80語の速度で読んで62.5時間、45時間の学修時間を全て読書に充てれば1.4単位の授業で読むことのできる量です。累積読書量が30万語以上の学生は、30万語未満の学生に比べて読書速度が速く、読書中に、あまり日本語が思い浮かばないと答えています。3年継続の多読授業では、75%の学生が30万語以上の英文を読んでいます。

しかしながら、読書量が少ない場合は、多読の効果を学生が実感することも、客観試験で有意な差がでることもないようです。例えば、年間3万語程度の英文読書を行う「多読授業」では、30万語に達するのに10年かかりますから、効果は期待できません。従来、「多読」の効果が上がらなかったとすれば、累積読書量が少なすぎたものと推定できます。

多読では、英文図書のやさしさも、特に導入時には大切です。我々も、高1レベル、中2レベル、中1レベルと、年々、導入時の英文図書をやさしくし、ようやく大部分の学生を無理なく多読に導入できるようになりました。



図3 英語多読用図書の一部

日本語に翻訳して読めるレベルと、英文を直接読めるレベルには大きな差がありますが、実際に読んでみないとこの差に気付くことは難しいようです。高めのレベルの英文を読むときは、知らず知らずのうちに日本語に翻訳しているため、なかなか気軽に読めるようになりません。また、快適な速度で読むこともできないので、読書が楽しくなりません。

そこで、本校では図書館に約7,000冊の英語多読用図書（図3）を集めました。導入時に必要な、一冊数十語の薄い絵本が1/3程度を占めます。授業が重ならないように時間割を工夫し、クラスを丸ごと図書館に移動させることで、複数クラスの授業を実現しています。

3. 英語多読による図書館利用の活性化

多読授業は、学生の図書館利用も活性化させました。長期低落傾向にあった図書館の年間館外貸出し冊数（本校学生）は、2003年度から反転急増し、2006年度には2002年度の3倍弱になりました（図4）。特に、図書館で毎週多読授業のある電気・電子システム工学科では、英文多読以外の本の館外貸出し冊数も長期減少に歯止めがかかりました。

さらに、2005年度に始めた、一般市民向けの公開講座をきっかけに、図書館の一般利用者、貸出し冊数も増加しました。2006年度の館外貸出し冊数（学外）は、5,299冊まで増加、全貸出し冊数の15%を占めています。

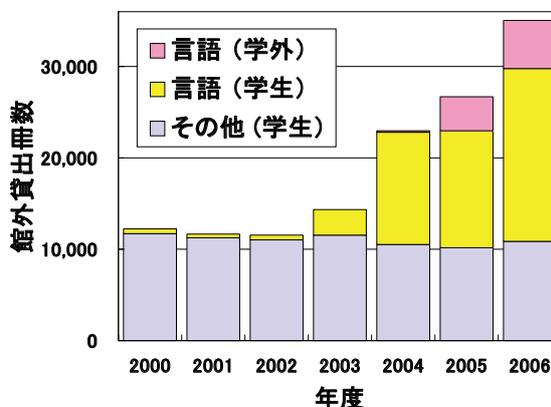


図4 館外貸出し冊数の経年変化

この結果、近頃は学外入館者のない日は珍しい状態となっていますが、授業時間にも学外利用者が多読用図書を探している姿が散見され、学生の学習意欲向上にも貢献していると考えています。

4. 英語多読を通じた地域貢献

本校では、2005年度以降、英語多読を主題とした公開講座を4回実施しています（表1）。

表1 英語多読関連の公開講座実施状況

年月	場所	実施日	参加数	備考
2005 8月	豊田高専	平日3日	15 (7)	
10月	豊田市施設	週末2日	33 (0)	共催
2006 8月	豊田高専	平日3日	8 (8)	
10月	豊田図書館	週末2日	28 (2)	共催

参加者（内数）は小中学生、共催は豊田市との共催

8月の講座（平日開催）の受講者は中学生が多いですが、10月の講座（豊田市との共催講座）は、社会人・一般が受講者の大部分を占めています。

社会人受講者は、英語利用の必要性が高く、実効ある学習法を探している、英語多読を知っている等の理由から、講座に対する期待も高い傾向があります。また、自らの英語学習体験と照らし合わせて多読の考え方に賛同を得られる場合が多く、中には講座期間中に多読の効果を実感できる受講者もいます。講座後に本校図書館に利用登録し、英語多読を継続している方も少なくありません。

また、本校図書館の多読用図書の学外利用が急増していることを背景に、地元の豊田市中央図書館でも多読用図書を導入し、市民向けの新しいサービスを開始しました。本校は、地域の図書館と連携しながら、この新しいサービスを支援していく予定です。

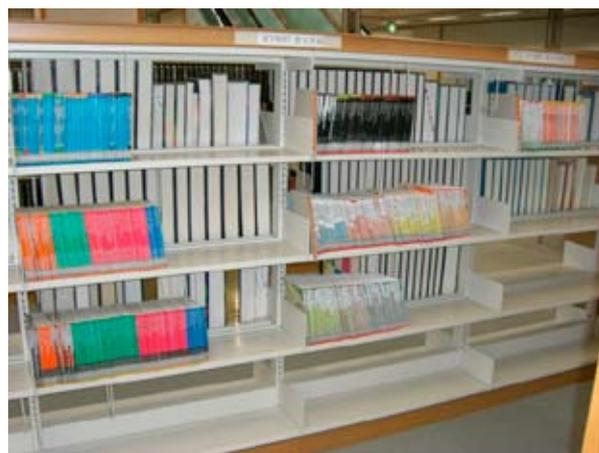


図5 豊田市中央図書館の英文多読用図書

5. ひとつの提案

英文図書を豊富に所蔵する大学図書館は多いと思いますが、学生の利用は低調ではないでしょうか。「勉学の息抜きに英文小説を読む」ことがジョークになってしまうほど、学生は英文を読めないからです。そこで、多読用のやさしい英文図書（Graded Readers：難易度を段階的に変化させた学習用読本や、ネイティブの小学校低学年用児童書等）を追加してみてもどうでしょうか。挿絵でストーリーを追えるため辞書を引く必要もないほどやさしい絵本から、既蔵の一般小説まで、読みやすさが連続して変化する英文図書群を準備するのは、日本語に翻訳しない多読の読み方を紹介すれば、図書館を利用して英語多読を始める意欲的な学生が現れるでしょう。もちろん、英語の授業として多読を導入するのが最善ですが、多読授業の前提は、レベル、ジャンル、数とも豊富なやさしい英文図書群が完備していることです。

愛知県内では、豊田市中央図書館に加え、蒲郡、小牧市立図書館⁵⁾、愛知県図書館等が、英語多読用図書を所蔵していますが、地域の図書館にやさしい英文図書が不足している場合には、豊田高専図書館のように、一般市民による多読用図書の利用も期待できます。大学図書館が、多読用図書の提供を通じて、地域の生涯学習社会に貢献できる可能性もあります。

参考文献・サイト

- 1) 西澤、吉岡、伊藤：英語多読を通じた図書館の授業支援と地域貢献, 平成 19 年度高専教育講演論文集, (2007)
- 2) <http://www.seg.co.jp/sss/>
- 3) 酒井、神田：教室で読む英語 100 万語 - 多読授業のすすめ -、大修館書店 (2005)
- 4) 西澤、吉岡、伊藤：苦手意識を自信に変える、英語多読授業の効果, 高専教育 30 号, pp.439-440 (2007)
- 5) 玉置、小牧市立図書館の多言語図書と英語多読用図書について、愛知図書館協会会報 178 号, pp.3-4 (2006)

行 事

第 61 回（2007 年度）東海地区大学図書館協議会 総会・研究集会

【 総会の部 】

日 時：平成 19 年 8 月 1 日（水）10:30～12:00
 会 場：愛知県立大学学術文化交流センター 2 F 小ホール
 総会当番館：愛知県立芸術大学附属図書館
 出 席 者：43 大学 67 名

	図 書 館 名	職 名	氏 名
[岐阜県]			
1	岐阜大学図書館		
2	岐阜聖徳学園大学岐阜キャンパス図書館		
3	岐阜薬科大学附属図書館		
4	中部学院大学附属図書館		
5	岐阜保健短期大学図書館		
[静岡県]			
6	静岡県立大学附属図書館		
7	静岡県立大学短期大学部附属図書館		
8	静岡文化芸術大学 図書館・情報センター		
9	静岡理工科大学附属図書館		
10	東海大学付属図書館清水図書館		
11	東海大学短期大学部静岡図書館		
[愛知県]			
12	愛知学院大学図書館情報センター		
	愛知学院大学歯学・薬学図書館情報センター		
13	愛知教育大学附属図書館		
14	愛知県立大学学術情報センター図書館		
15	愛知県立看護大学看護学術情報センター		
16	愛知工業大学附属図書館		
17	愛知淑徳大学図書館		
18	愛知東邦大学図書館		
19	金城学院大学図書館		
20	自然科学研究機構 岡崎情報図書館		
21	椋山女学園大学図書館		

	図 書 館 名	職 名	氏 名
22	大同工業大学図書館		
23	中京女子大学図書館		
24	中部大学附属三浦記念図書館		
25	同朋学園大学部附属図書館		
26	東海学園大学図書館		
27	豊田工業高等専門学校図書館		
28	豊橋技術科学大学附属図書館		
29	名古屋外国語大学・名古屋学芸大学図書館		
30	名古屋工業大学附属図書館		
31	名古屋女子大学学術情報センター		
32	名古屋市立大学総合情報センター		
33	名古屋造形芸術大学図書館		
34	名古屋柳城短期大学図書館		
35	南山大学図書館		
36	名城大学附属図書館		
[三重県]			
37	皇學館大學附属図書館		
38	三重大学附属図書館		
39	三重県立看護大学附属図書館		
40	三重短期大学附属図書館		
41	四日市看護医療大学図書館		
[会長館]			
42	名古屋大学附属図書館		
[当番館]			
43	愛知県立芸術大学附属図書館		

総会議事要録

I 開会

愛知県立芸術大学の石黒初美芸術情報グループ長による開会宣言に続いて、愛知県立芸術大学音楽学部弦楽専攻学生によるモーツァルト ディヴェルティメント ニ長調 K.136 の演奏があった。

II 挨拶

愛知県立芸術大学長 磯見 輝夫

愛知県立大学学術情報センター長 加藤 義信

東海地区大学図書館協議会長 伊藤 義人

III 議長選出

愛知県立芸術大学附属図書館長 森田 義之

IV 協議事項

1 新規加盟館の承認、退会館について

事務局から、四日市看護医療大学図書館、及び岐阜保健短期大学図書館の本協議会への加盟について提案があり、また、愛知江南短期大学附属図書館から退会の申請があったとの説明があり、ともに承認された。

続いて、新規加盟館から挨拶があった。

V 報告事項

1 平成 18 年度事業報告

事務局から、平成 18 年度の事業について下記のとおり報告があった。

(1) 総会（平成 18 年 7 月 7 日、会場：名城大学、50 大学 72 名参加）

1) 平成 17 年度事業報告及び平成 17 年度決算・同監査報告、平成 18 年度事業計画（案）及び予算（案）等について協議

2) 永年勤続者表彰（5 名）

(2) 研究集会（平成 18 年 7 月 7 日）

テーマ「知の連携と大学図書館の整備」

基調講演：

「書名が与える研究への影響、冬虫夏草とは？」

名城大学副学長 原 彰

講演：

「私立大学における学術情報基盤整備の現状：早稲田大学の事例を中心として」

早稲田大学図書館総務課長 中元 誠

パネルディスカッション：

講演者

助言者 協議会会長 伊藤 義人

名城大学附属図書館長 小嶋 仲夫

(3) 研修企画小委員会（第 18-1 回、平成 18 年 10 月 24 日、会場：名古屋大学）（第 19-1 回、平成 19 年 5 月 10 日、会場：名古屋大学）

(4) 研修会（第 1 回）（平成 19 年 1 月 12 日、会場：岐阜県図書館、研修会担当館：岐阜県立看護大学図書館）51 大学・機関 70 名参加。内、公共図書館 11 名、学校図書館 1 名参加
テーマ「大学図書館の地域連携」

事例報告 1 「相互利用協定と愛知県内図書館の ILL 定期便設置実証実験」

愛知県図書館資料支援課広域グループ

村上 昇平

事例報告 2 「静岡県内の大学図書館における連携について」

静岡大学附属図書館 図書館情報課長

大石 博昭

事例報告 3 「岐阜県における公共図書館との連携」

岐阜大学図書館 情報サービス課長

木村 晴茂

事例報告 4 「東海目録（TOMcat）：病院図書室と大学図書館の連携」

愛知医科大学医学情報センター（図書館）・

東海地区医学図書館協議会東海目録ワーキンググループ

坪内 政義

事例報告 5 「図書館の教育支援、地域支援：豊田高専の英語多読を通して」

豊田工業高等専門学校電気・電子システム

工学科教授 西澤 一

(5) 研修会（第 2 回）（平成 19 年 3 月 7 日、会場：名古屋大学）42 大学・機関 90 名参加。内、公共図書館 12 名参加

テーマ「Web2.0 時代の図書館サービス」

基調講演「Web2.0 時代の図書館」

Academic Resource Guide

岡本 真

講演「図書館利用者の情報探索活動に関する実証的研究」

名古屋大学附属図書館研究開発室

寺井 仁

講演「Web2.0 時代の新たな図書館サービスの展開」

農林水産省農林水産研究情報センター

林 賢紀

パネルディスカッション

講演者

司会 名古屋大学附属図書館事務部長

早瀬 均

(6) 機関誌編集委員会 (19-1回、平成19年7月6日、会場：名古屋大学)

(7) 平成19年度監事会 (平成19年7月2日、会場：名古屋大学)

監事館：愛知県立芸術大学、南山大学

(8) 平成19年度運営委員会 (平成19年7月9日、会場：名古屋大学)

(9) 「東海地区大学図書館協議会誌」51号発行 (平成18年12月25日)

(10) 東海地区図書館協議会

理事会 (第4回) (平成19年7月5日、会場：名古屋大学)

連携・協力検討部会 (18-2回、平成18年11月17日、会場：名古屋大学)、(19-1回、平成19年6月7日、会場：名古屋大学)

2 平成18年度決算報告・同監査報告

事務局から、平成18年度の決算について、研究集会、研究会等で講師に支払う原稿料等の源泉徴収を行い、過去3年遡って納税した、との報告があった。続いて、監事館を代表して愛知県立芸術大学から、平成18年度の監査をした結果、経理は正確に処理されていることを確認したとの報告があった。

平成18年度の決算報告について、報告のとおり承認された。

3 図書館職員基礎研修について

事務局から、「新規採用職員研修」アンケート集計結果及び「図書館職員基礎研修」実施要項(案)に基づき報告があった。

4 その他

(1) 米国国立公文書館に関する講演会について

事務局から、運営委員会で本協議会が共催することが承認された標記講演会の案内があった。

(2) 国公立の各大学図書館の活動状況、当面の課題等について

国公立の各協議会の理事校・幹事校 (名古屋大学、三重県立看護大学、愛知淑徳大学) から報告があった。

VI 協議事項

2 役員館について

事務局から、役員館の任期は2年であり、昨年度の総会で平成19年度までの役員館が選出されたため、確認していただきたいとの説明があり、確認された。

3 平成19年度事業計画(案)及び予算(案)について

事務局から、平成19年度事業計画(案)及び予算(案)について説明があり、協議の結果、提案どおり承認された。

4 平成20年度総会当番館について

第62回(平成20年度)総会・研究集会の当番館として愛知淑徳大学が選出され、同大学図書館長から挨拶があった。

5 東海地区図書館協議会の事業について

事務局から、東海地区図書館協議会の事業について説明があり、資料相互利用に関する協定への参加、及びレファレンスにおける連携協力事業への提案の依頼があった。

VII 永年勤続者表彰

平成19年度の永年勤続者として4名が表彰された。

鈴木 卓美 (金城学院大学図書館)

田中美代子 (津市立三重短期大学附属図書館)

福井 千都 (愛知教育大学附属図書館)

吉崎 久 (皇學館大学附属図書館・文学部図書館)



永年勤続表彰



VIII 閉会

愛知県立芸術大学芸術情報グループ長

石黒 初美

【昼休み：施設見学】

日時：平成19年8月1日（水）12:50～13:30
会場となった愛知県立大学の学術情報センター図書館の見学が昼休みを利用して行われた。

【研究集会の部】

日時：平成19年8月1日（水）13:30～16:00
会場：愛知県立大学学術文化交流センター
2F小ホール
テーマ：「芸術とヨーロッパの図書館－過去と現在－」

基調講演：

「ルネサンス期の図書館とパトロネージ」

愛知県立芸術大学附属図書館長 森田 義之

講演：

「新大英図書館：音楽書と稀覯本読書室」

愛知県立芸術大学音楽学部 中巻 寛子

ディスカッション：

講演者

助言者 協議会会長

伊藤 義人



第61回（2007年度）東海地区大学図書館協議会 総会・研究集会 出席者



愛知県立大学学術情報センター図書館の見学



基調講演



講演

平成 18 年度決算報告

(平成 18 年 4 月 4 日～平成 19 年 3 月 31 日)

科 目	予 算 額 a	決 算 額 b	過△不足額 b - a	備 考
収入の部	円	円	円	
1. 前年度繰越金	1,122,963	1,122,963	0	
2. 会 費	430,000	430,000	0	平成 18 年度分： @5,000 × 86 館 = 430,000
3. 会誌売上費	462,000	444,000	△ 18,000	51 号分：@2,000 × 222 部 = 444,000
4. 雑 収 入	58,000	295,000	237,000	協議会誌 51 号広告掲載料 @30,000 × 4 社 = 120,000 @25,000 × 1 社 = 25,000 @20,000 × 6 社 = 120,000 @10,000 × 3 社 = 30,000
5. 預 金 利 息	11	504	493	
計	2,072,974	2,292,467	219,493	

科 目	予 算 額 c	決 算 額 d	過△不足額 d - c	備 考
支出の部	円	円	円	
1. 総会補助金	120,000	120,000	0	第 60 回総会 (名城大学)
2. 研究会補助金	40,000	60,000	20,000	講演謝金 (2 名) (名城大学)
3. 研 修 会 費	150,000	167,590	17,590	当番館経費 (名古屋大学), 講師謝金等 (2 回分 8 名)
4. 源泉所得税納付	0	69,096	69,096	平成 15 年度～ 18 年度講演料, 原稿料
5. 会誌刊行費	490,000	606,375	116,375	51 号 (78p. 内カラー 27p. 論文等 12, 紹介記事等 9) 350 部 (50 号は 85p. 内カラー 7p. 300 部 論文等 9, 紹介記事等 4)
6. 役員会経費	12,000	11,844	△ 156	運営委員会ほか役員会
7. 事 務 費	80,000	27,095	△ 52,905	封筒印刷, 総会補助金の振込手数料
8. 通 信 費	50,000	51,935	1,935	会誌送付等郵便料金
9. 表 彰 記 念 費	35,000	24,975	△ 10,025	表彰記念品 (ネーム印付きボールペン 5 本, 表彰状丸筒, 総会写真)
10. 予 備 費	1,095,974	0	△ 1,095,974	
11. 次年度繰越金	0	1,153,557	1,153,557	
計	2,072,974	2,292,467	219,493	

平成 19 年 3 月 31 日締め
 預金残高 1,124,147 円
 現金残高 29,410 円
 資産総額 1,153,557 円

会計監査 平成 19 年 7 月 2 日

愛知県立芸術大学
 南山大学

監査済み

平成 19 年度予算

(平成 19 年 4 月 1 日～平成 20 年 3 月 31 日)

科 目	前年度 決算額 a	本年度 予算額 b	前年度決算額 よりの増△減 b - a	備 考
収入の部	円	円	円	
1. 前年度繰越金	1,122,963	1,153,557	30,594	
2. 会 費	430,000	430,000	0	平成 19 年度分： @5,000 × 86 館 = 430,000
3. 会誌売上費	444,000	444,000	0	52 号分：@2,000 × 222 部 = 444,000
4. 雑 収 入	295,000	200,000	△ 95,000	協議会誌広告掲載料 52 号分
5. 預 金 利 息	504	500	△ 4	
計	2,292,467	2,228,057	△ 64,410	

科 目	前年度 決算額 c	本年度 予算額 d	前年度決算額 よりの増△減 d - c	備 考
支出の部	円	円	円	
1. 総会補助金	120,000	120,000	0	第 61 回総会（愛知県立芸術大学）
2. 研究集会補助金	60,000	20,000	△ 40,000	講師謝金（1 名）（愛知県立芸術大学）
3. 研 修 会 費	167,590	200,000	32,410	当番館経費（名古屋大学，中部大学），講 師謝金等（2 回分）
4. 源泉所得税納付	69,096	20,000	△ 49,096	研究集会，研修会での講演料，原稿料に 対して
5. 会誌刊行費	606,375	600,000	△ 6,375	52 号 300 部
6. 役員会経費	11,844	12,000	156	運営委員会ほか役員会等
7. 事 務 費	27,095	30,000	2,905	事務用品等
8. 通 信 費	51,935	52,000	65	会誌送付等郵便料金
9. 表 彰 記 念 費	24,975	20,000	△ 4,975	記念品（ネーム印付きボールペン 4 本） 等
10. 予 備 費	0	1,154,057	1,154,057	
11. 次年度繰越金	1,153,557	0	△ 1,153,557	
計	2,292,467	2,228,057	△ 64,410	

岐阜保健短期大学図書館

〒500-8281 岐阜市東鶉2丁目92

<http://toyota.ac.jp/kango.html>

岐阜保健短期大学（看護学科）は、平成19年4月1日に文部科学省の認可を得て開設されました。本学は昭和53年に調理師学科を始めとして、その後看護学科・介護福祉学科・リハビリテーション（理学療法士・作業療法士）学科・東洋医療（はりきゅう科・柔道整復科）学科があり、それぞれ資格取得ができる職業専門学校（専修学校）として発展してきましたがその中の一つである看護学科が短期大学として開設されたわけです。本学は交通の便もよく、今から440年前には織田信長が築城したという岐阜城が金華山に聳え、その麓には鶉飼で名高い長良川が市内を貫流しております。眺望は北には乗鞍・日本アルプス、西には伊吹・養老山脈・東には恵那山・御岳山が四季折々の景色がみられます。

本大学の建物は鉄筋コンクリート5階建てで、現在は1階から3階までを使用しております。建物全体が明るくて、カラフルであり各教室の使用目的にあった趣きを取り入れており、学生からも大変評判がよく、綺麗で清潔感があるという声を聞きうれしく思っています。

1階が図書館になっており、面積が250㎡、可能冊数は20,000冊であり、現在の蔵書は5,000冊あり、主に看護・医学系ですが・保育・栄養・福祉・一般教養と多種多様にあります。定期的な購読雑誌は25種類と外国雑誌5種類、新聞も数種類あります。

閲覧室は40席であり、パソコンは16台あります。パソコンを使っての文献検索は可能です。視聴覚コーナーにはAV機器6台、DVD機器6台あり、ビデオテープ103本用意してあります。また、学生や教員の学術研究及び教育のためのレファレンスサービスとして、文献検索案内、参考文献紹介、関係資料の収集、文献資料の所在確認及び関係機関等の連絡調整をしております。

平成19年7月末に東海地区大学図書館協議会に加盟申請させていただき8月1日の総会で承認が得られたことに対して本当に有難く今後ともよろしくご指導のほどお願いいたします。



四日市看護医療大学図書館

〒512-8045 三重県四日市市萱生町1200
<http://www.y-nm.ac.jp/shisetsu/library.html>

四日市看護医療大学は、「高齢化社会の進展」および「生活習慣病の増加」といった社会変化を背景に高まりつつある健康ニーズに対する地域社会の要請を受けて、平成19年4月に三重県四日市市の北西部の東名阪四日市東インターすぐ近くに開学しました。

本学は、人々の健康の回復・保持・増進への支援することで生活の質を高め、その結果として社会の質の向上を図り、地域の活力向上に貢献できる看護師・保健師・助産師の育成を目指しています。

図書館は、本学開学と同時に開館し、利用者の便を考慮し実習棟1階にあり、コンピュータ室を併設しています。図書システムは、「情報館V6」を導入し、館内の蔵書は、学内LANおよびインターネットを介して学内外からの検索が可能です。国立情報学研究所（NII）や東海地区医学図書館協議会の相互貸借サービスに加入し、図書館間の連携にも積極的に取り組んでいます。

地域貢献としては、三重県内の看護・医療福祉等に従事する関係者に学外開放しています。

最後になりましたが、東海地区大学図書館協会への加盟をご承認頂いたことにより、本館の活性化につながることを大変うれしく思っています。

今後とも、加盟館の皆様のご指導とご鞭撻をよろしくお願い申し上げます。

【図書館概要】

床面積	718.81 m ²
座席数	98席
蔵書冊数	5,999冊
雑誌種数	50種
視聴覚資料	261点
開館時間	月～金 9:00～21:00
	土 9:00～17:00

(平成19年9月1日現在)



金城学院大学図書館

〒463-8522 名古屋市守山区大森2-1723

<http://opc.kinjo-u.ac.jp>

名古屋の北東部、緑豊かなキャンパスを持つ金城学院大学は1949年に英文学部英文学科が認可されたのが始まりです。図書館も時を同じくして、大学本館の1階で12坪の図書閲覧室と6坪の書庫から始まりました。その後、書庫の増設や閲覧室の増改築を経て、1981年にレンガ造りの近代的な図書館が建てられました。しかし、2005年4月に薬学部が開設されたことにより、資料が増加し、書庫の狭隘化や、教員・学生数に対する座席数の不足が顕著となりました。また、耐震工事の必要もあり、2006年1月より大がかりな増改築に着手し、2007年4月にリニューアルオープンしました。



(上) 新館と旧館 (下) 書架照明

新館は大きな窓と白い外壁が印象的な、開放感あふれるデザインです。バリアフリーとなるよう2階にあった入口を1階に移し、館内にはエレベ-

ータを設置しました。読書ルームと図書館ラウンジを新設し、勉強のためだけでなく、より気軽に図書館に足を向けてもらえるようにしました。ラウンジでは若干の飲食も可としたので、お茶を飲みながら新聞を広げる学生も増えてきました。AVコーナーは学生からの要望もあって、グループで視聴出来るブースを設け、順番待ちが出る程の人気となっています。利用者用端末とコピー機は閲覧室の各階に設置しました。書庫を開放し、全面開架にしたことにより、利用者自身で資料を探す必要がでてきました。各階の端末で、必要な資料を検索してすぐに探し出せる利便性が、学生にとって自律して学習するための大きな助けになることを期待しています。その他にも、大きなガラス窓から採光する代わりに、書架照明を採用して、目に優しい環境にしたり、館内にモニターを設置し、空席状態が確認できるようにするなど、心地よい空間になるような工夫をしました。

図書館は利用者に情報を提供するだけでなく、その情報を活用してもらえるように、積極的にアピールする必要を感じています。このリニューアルを機に、今まで以上に教員・学生へのサービスを向上させ、教育・学習の支援をしていきたいと思っています。

床面積	6,194 m ² *
座席数	589席 *
蔵書冊数	466,543冊 **
雑誌点数	7,083種 **
開館時間	9:00~20:00(月~金) 9:00~16:30(土)
奉仕対象教職員数	833人 ***
奉仕対象学生数	5,324人 ***

*2007年9月現在 **2007年3月現在
***2007年5月現在

名古屋学院大学学術情報センター

〒456-8612 名古屋市熱田区熱田西町1-25
<http://www2.ngu.ac.jp/white/Libra/libra-j00.html>

2007年4月、本学は名古屋市熱田区に白鳥学舎と日比野学舎からなる名古屋キャンパスを開設しました。新しい学術情報センターは、白鳥公園・白鳥庭園に囲まれた都心のオアシス白鳥学舎にあります。

学術情報センターは曙館東側の情報・交流ゾーンにあり、1・2階がレストラン、3・4階部分が学術情報センターとなっています。建物の北側(国際会議場方向)は弧を描いて、全面ガラス張りのため採光がよく、3階部分は吹き抜けとなっていることで開放感があります。3階・4階をあわせた面積は1,773㎡、座席数は417席です。白鳥学舎は敷地面積が狭く、学術情報センターの面積も限られたため、収容冊数は7万冊となりました。必要な資料は、随時、瀬戸キャンパス図書館より取寄せることでサービスを行っています。

学術情報センターは、図書館のほかに、情報教育・語学教育・基礎教育の機能を持ち、教育・研究を総合的にサポートする役割を担っています。

センター設計段階より、学生の学習スタイルに合わせて学べる空間を創ろうというコンセプトのもと、3階と4階のスペースを意識的に違う空間としました。

3階は“読む・書く”を基本とした一人で静かに学ぶ「静的学習空間」、4階は“見る・聞く・話す”仲間と一緒に楽しく学ぶ「動的学習空間」としました。3階は、図書・雑誌・新聞などがある従来からのLibraryです。ここには、本学が開学以来収集してきた「会社史コーナー」があり、現在経済団体史も含めて6,000冊を所蔵しています。4階は、50台のパソコン・ノートパソコン利用コーナー・メディアコーナー、パソコン関係図書・語学教材などがあり、ネットでの情報収集・レポート作成・メディア視聴・グループ学習・語学学習

など多目的に利用できる Learning Commons となっています。ここでは、学生たちが自由に机を組み合わせて、グループで利用できるように、可動式の一人用机と椅子が設置してあります。また、4階には基礎教育センターがあり、基礎から英語を学びたい、留学や就職のために英語力をつけたいという学生のために、一人一人の学力や学習状況にあわせて教員や先輩学生同士と一緒に考え学習する場となっています。また、隣のセミナールームでは授業とは別に、英会話教室を行っています。このように4階 Learning Commons は、話して学ぶ空間でもあるため、ペットボトル(ふたのついた飲み物)の持ち込みを許可し、仲間と気楽に話ができる自由な空間で、学生の人気の場所となっています。



3階 Library



4階 Learning Commons

名古屋工業大学附属図書館

〒466-8555 名古屋市昭和区御器所町

<http://www.lib.nitech.ac.jp/index.html>

名古屋工業大学附属図書館は、昭和37年に北館が大学創立50年記念事業として建設されました。昭和55年には、南館が増築され、北館と南館はエレベータホールでつながりました。

昨年度から、耐震基準を満たすために、開館しながら、北館・南館と順番に改修を行っております。改修前は、南館(4階建)は開架閲覧室、北館(3階建+塔屋)はエントランス・学習スペース・積層書庫・事務スペースなどとして使用してきました。南館は、改修後も従来どおりの使用方法となりますが、北館は大きく見直して「学習・研究の場」「情報収集・発信の場」「寛ぎの場」など個人・グループ利用者の多様な要求を満たす「場」の提供ができるよう改善いたしました。

	北館	南館	合計
床面積	2,627㎡	2,880㎡	5,507㎡
閲覧席数	285席	195席(予定)	480席

北館改修でのコンセプトは、「図書館正面は、隣接する講堂(創立50年記念事業)とバランスを取ったデザインとなっているので大きく変えないということでした。また、3層あった積層部分が撤去され、2階となりました。

従来南館は、1～2階に図書、3～4階に雑誌を配架していることから、下の階は低学年の学生用、上の階は、高学年の学生・教員用というゾーニングができていました。北館の改修も、このゾーニングを維持して各スペースの配置をいたしました。

北館の主なスペースは、以下の通りです。

- ・集密書庫：積層書庫分の収蔵能力を確保するために1階と2階に設置。
- ・教育用端末：1階に5台・2階に8台。台数は少ないが、情報基盤センター等で設置している机よりも広いものを用意した。資料を机に積んで

端末を使用している学生もおり、図書館ならではの利用方法に即した環境となっている。

- ・地域連携コーナー(2階)：学内・学外者が産業に関する情報を得るコーナーである。同窓会寄贈図書・産業分野の図書・JIS規格を配架し、学内研究成果パネルを展示する。
- ・AVルーム(2階)：改修前は、ブラウジングルームの一角に、プラズマディスプレイを設置していたが、音量の問題もあり、改修後は、専用の部屋を用意した。BBC放送を放映している。
- ・セミナー室(3階)：主にグループ学習用として、8名・8名・12名収容の3室を設置した。
- ・大学資料室(3階)：学内の学術情報を公開。
- ・研究ブース(3階)：席数を確保するため、個室ではなく、低パーティションの仕切とした。席数は、16席。

今年度は、南館の改修を行っております。一部の資料を利用停止にしておき、ご迷惑をおかけしているかと思いますが、ご協力お願いいたします。



2階 パソコンコーナー



北館正面

会 則 等

東海地区大学図書館協議会会則

(名 称)

第1条 本会は、東海地区大学図書館協議会と称する。

(目 的)

第2条 本会は、東海地区大学図書館の発展を図ると共に、図書館員の教養と技術の向上及び相互の親睦をはかることを目的とする。

(会 員)

第3条 本会は、前条の目的に賛同する東海地区（静岡、愛知、岐阜、三重）の国立、公立、私立の大学図書館その他これに準ずる図書館を以て組織する。

(事 業)

第4条 本会は、第2条の目的を達するために、次の事業を行う。

- 一 会員相互間の連絡提携
- 二 図書及び図書館に関する研究会、講習会、
展覧会等の開催並びに後援
- 三 図書館運営に関する相談、指導
- 四 機関誌の発行
- 五 その他必要と認める事業

(会 長)

第5条 本会に会長を置く。

2 総会において会長館を選出し、その会長館の図書館長が会長となる。

3 会長の任期は、2年とする。但し、重任を妨げない。

(委員会)

第6条 本会に運営委員会及び機関誌編集委員会を置く。

2 委員会に関する事項は、別に定める。

(総 会)

第7条 会長は、毎年一回総会を招集する。

2 会場は、加盟館の輪番とする。

第8条 会長館は、協議事項（議題及び承合事項）をとりまとめ、審議運行の手続きを計る。

第9条 総会の票決権は、一館一票とし議決は出席館の過半数の賛成を要する。

(会 計)

第10条 本会の経費は、会費その他の収入をもって当てる。

2 会員の会費は、年額5,000円とする。

第11条 本会の会計事務を監査するため、監事を置く。

2 総会において監事館を選出し、その監事館の図書館長が監事となる。

3 監事の任期は2年とする。但し、重任を妨げない。

第12条 本会の予算は、毎年総会の議決を経て決定し、決算は監査を受けたのち、次の総会において承認を得るものとする。

第13条 本会の会計年度は、4月1日に始まり、翌年3月31日に終る。

(事務局)

第14条 会長館に、本会の事務局を置く。

2 事務局に、事務局長及び職員を置く。

3 会長館の事務部長、又はこれに準ずる者が事務局長となる。

(会則の変更)

第15条 この会則の変更は、総会の承認を得なければならない。

(附 則)

本会則は、昭和25年5月1日から施行する。

(附 則)

この改正は、昭和50年7月23日より施行する。

東海地区大学図書館協議会

運営委員会規程

第1条 運営委員会は、本会の運営に関する事項を審議する。

第2条 運営委員会の構成は、国立大3、公立大3、私立大4、(短大1を含む)とする。

第3条 運営委員は、総会において選出する。

2 運営委員の任期は2年とする。ただし、再任を妨げない。

3 前項の任期が満了しても、後任者が就任するまでは、なお、その任にあるものとする。

第4条 運営委員会に、委員長をおく。

2 運営委員長は、会長がこれに当たる。

3 運営委員長は、必要に応じ委員会を招集することができる。

第5条 運営委員会に、必要に応じて小委員会を置くことができる。

第6条 運営委員会の事務は、事務局内において行う。

附 則

この改正は平成12年7月19日から施行する。

東海地区大学図書館協議会

機関誌編集委員会規程

1 機関誌の発行について、編集委員会を設ける。

2 編集委員は、会長の指名による。

3 編集委員会に、委員長を置く。

4 編集委員長は、会長がこれにあたる。

5 編集委員長は、必要に応じ委員会を招集することができる。

6 編集委員会の事務は、事務局内において行う。

東海地区大学図書館協議会

研修企画小委員会内規

平成12年10月6日

運営委員会

(目的)

第1 この内規は、東海地区大学図書館協議会(以下「協議会」という。)の研修に関し、必要な

事項を審議するため、運営委員会の下に研修企画小委員会(以下「小委員会」という。)を置き、必要な事項を定めることを目的とする。

(審議事項)

第2 小委員会は、次に掲げる事項を行う。

一 協議会が行う研修の企画に関すること

二 その他研修に関し、必要な事項

(小委員会の構成)

第3 小委員会は、次に掲げる委員館をもって構成する。

一 協議会会長館

二 国立、公立、私立の運営委員館から各1館

三 研修会会場館

2 小委員会に委員長館を置き、小委員会の互選による。

(小委員会の庶務)

第4 小委員会の庶務は、協議会事務局において処理する。

附 則

この内規は、平成12年10月6日から施行する。

東海地区大学図書館協議会

ホームページ小委員会内規

平成12年10月6日

運営委員会

(目的)

第1 この内規は、東海地区大学図書館協議会(以下「協議会」という。)のホームページ(以下「ホームページ」という。)に関し、必要な事項を審議するため、運営委員会の下にホームページ小委員会(以下「小委員会」という。)を置き、必要な事項を定めることを目的とする。

(審議事項等)

第2 小委員会は、次に掲げる事項を行う。

一 ホームページの運用・管理に関すること。

二 ホームページの企画・編集に関すること。

三 その他ホームページに関し、必要な事項。

(小委員会の構成)

第3 小委員会は次に掲げる委員館をもって構成する。

- 一 協議会会長館
 - 二 国立、公立、私立の運営委員館から各1館
- 2 小委員会に委員長館を置き、小委員会の互選による。

(小委員会の庶務)

第4 小委員会の庶務は、協議会事務局において処理する。

附 則

この内規は、平成12年10月6日から施行する。

東海地区大学図書館協議会ホームページ による情報発信に関わる申し合わせ

平成12年10月6日
運営委員会

1 情報発信の範囲

ホームページを通じて発信する情報は、次の各号に該当するものとする。

- ①協議会事業に関する情報
- ②協議会加盟館に関する情報
- ③その他ホームページ小委員会（以下「小委員会」という。）が必要と認めた情報

2 情報発信できる者の範囲

ホームページを通じて情報発信できる者は協議会加盟館とする。

3 情報発信の手続き

- ①ホームページを通じて情報発信しようとする者は、協議会事務局宛にHTML形式の文書をメールで送付するものとする。
- ②加盟館から送付された文書の内容は原則として変更しない。
- ③ホームページに掲載する文書の登録及び削除の決定は、小委員会が行う。但し、疑義があるときは、小委員会は運営委員会委員長と協議する。
- ④ホームページを通じて情報公開している者で、公開する情報の変更又は停止等の事由が生じた時は、速やかに協議会事務局に連絡する。
- ⑤小委員会は公開されたホームページの情報が不相当と判断した場合は、そのファイルを削

除し、リンクを切断することができるものとする。

4 ホームページ

当分の間、ホームページは名古屋大学附属図書館内のサーバーに置く。

表彰規程

第1条 東海地区大学図書館協議会会則第4条第5号に基づき加盟館の職員に対して行う表彰はこの規程の定めるところによる。

第2条 毎年総会の前日までに通算20年図書館に在職する者。

第3条 この規程による表彰は加盟館長の推薦により総会において行う。

第4条 表彰者には記念品及び感謝状を贈呈する。

第5条 この規程の改正は総会の議決によって行う。

附 則

この規程は、昭和44年10月29日から実施する。

表彰者推薦に関する申合せ

(昭和53年9月4日)

東海地区大学図書館協議会の加盟館に在職する者のうち、つぎの各項のいずれかに該当する者を推薦することとする。

(1) 毎年総会の前日までに通算20年以上加盟館に在職する者。

(2) 毎年総会の前日までに通算25年以上図書館に在職し、かつ3年以上加盟館に在職する者。

なお、(1)、(2)のいずれについても事務補佐員としての在職期間も加算するものとする。

総会当番館一覧

東海地区大学図書館協議会 総会当番館一覧

回	年月	館名	県別	回	年月	館名	県別
1	昭和 25. 6	名古屋大学	愛知	33	54. 9	静岡女子大学	静岡
2	26. 6	金城学院大学	〃	34	55. 9	名古屋学院大学	愛知
3	26.11	三重大学	三重	35	56.10	浜松医科大学	静岡
4	27. 5	愛知学芸大学	愛知	36	57. 9	名古屋女子大学	愛知
5	27.10	名古屋工業大学	〃	37	58.10	静岡薬科大学	静岡
6	28. 5	三重県立大学	三重	38	59. 9	南山大学	愛知
7	28. 8	名古屋市立大学	愛知	39	60.10	豊橋技術科学大学	〃
8	29.10	静岡大学	静岡	40	61. 6	中京大学	〃
9	30. 9	岐阜大学	岐阜	41	62. 6	愛知県立大学	〃
10	31. 5	愛知大学	愛知	42	63. 6	愛知学院大学	〃
11	32.10	日本大学（三島）	静岡	43	平成 元. 6	愛知教育大学	〃
12	33. 6	名城大学	愛知	44	2. 6	愛知大学	〃
13	34. 9	岐阜薬科大学	岐阜	45	3. 7	静岡県立大学	静岡
14	35.11	名古屋大学	愛知	46	4. 6	中部大学	愛知
15	36.11	南山大学	〃	47	5. 6	岐阜大学	岐阜
16	37. 6	岐阜県立医科大学	岐阜	48	6. 7	名古屋学院大学	愛知
17	38. 6	名古屋工業大学	愛知	49	7. 6	岐阜薬科大学	岐阜
18	39.10	愛知県立大学	〃	50	8. 7	愛知大学	愛知
19	40.10	日本福祉大学	〃	51	9. 7	浜松医科大学	静岡
20	41.10	中京大学	〃	52	10. 7	日本福祉大学	愛知
21	42.11	岐阜薬科大学	岐阜	53	11. 7	愛知県立看護大学	〃
22	43.11	愛知学院大学	愛知	54	12. 7	愛知工業大学	〃
23	44.10	三重大学	三重	55	13. 7	三重大学	三重
24	45. 9	同朋大学	愛知	56	14. 7	金城学院大学	愛知
25	46.10	名古屋市立大学	〃	57	15. 6	岐阜県立看護大学	岐阜
26	47.10	中部工業大学	〃	58	16. 7	南山大学	愛知
27	48.10	愛知教育大学	〃	59	17. 7	名古屋工業大学	〃
28	49.10	大同工業大学	〃	60	18. 7	名城大学	〃
29	50. 7	愛知県立芸術大学	〃	61	19. 8	愛知県立芸術大学	〃
30	51. 6	市邨学園女子短期大学	〃	62	20 予定	愛知淑徳大学	〃
31	52. 6	静岡大学	静岡	63	21 予定	名古屋大学	〃
32	53. 9	愛知工業大学	愛知	64	22 予定	名古屋外国語大学・ 名古屋学芸大学	〃

加盟館一覽

東海地区大学図書館協議会加盟館一覽

平成 19 年 12 月 1 日現在

図書館名	法人名	館長	郵便番号	住所	電話	FAX	ホームページ
(87)							
<input type="checkbox"/> <input checked="" type="checkbox"/> 岐阜県 <input checked="" type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> (13)							
朝日大学図書館	学校法人 朝日大学	藤下 昌己	〒501-0296	瑞穂市穂積1851-1	(058)329-1051	(058)329-0021	http://library.asahi-u.ac.jp/
岐阜大学図書館	国立大学法人	森 秀樹	〒501-1193	岐阜市柳戸1-1	(058)293-2184	(058)293-2194	http://www1.gifu-u.ac.jp/~gulib/
岐阜医療科学大学・ 岐阜医療技術短期大学 図書館	学校法人 神野学園	藤垣 康子	〒501-3892	関門市平賀字長峰 795-1	(0575)22-9401	(0575)23-0884	http://www.u-gifu-ms.ac.jp/tosyokan/
岐阜経済大学図書館	学校法人 岐阜経済大学	中村 共一	〒503-8550	大垣市北方町5-50	(0584)77-3527	(0584)77-3528	http://www.gifu-keizai.ac.jp/lb/index.html
岐阜県立看護大学 図書館		北山 三津子	〒501-6295	羽島市江吉良町 3047-1	(058)397-2304	(058)397-2304	http://www.gifu-cn.ac.jp/library/
岐阜市立女子短期大学 附属図書館		宮本 教雄	〒501-0192	岐阜市一日市場北町 7-1	(058)296-3123	(058)296-3130	http://www.gifu-cwc.ac.jp/tosyo/libtop_3.htm
岐阜聖徳学園大学 図書館	学校法人 聖徳学園	安田 徳子	〒501-6194	岐阜市柳津町高桑西 1-1	(058)279-6416	(058)279-1242	http://lib.shotoku.ac.jp/
岐阜女子大学図書館	学校法人 杉山女子学園	林 佐喜生	〒501-2592	岐阜市太郎丸80	(058)229-2212 (422)	(058)229-2222	http://libwww.gijodai.ac.jp/
岐阜保健短期大学 図書館	学校法人 豊田学園	小野 桂子	〒500-8281	岐阜市東鶉2-92	(058)274-5001	(058)274-5260	http://www.toyota.ac.jp/kango.html
岐阜薬科大学附属 図書館		平野 和行	〒502-8585	岐阜市三田洞東 5丁目6-1	(058)237-3931	(058)237-3631	http://www.gifu-pu.ac.jp/tosho/index.html
情報科学芸術大学院 大学附属図書館		安藤 泰彦	〒503-0014	大垣市領家町3-95	(0584)75-6803	(0584)75-6803	http://libsrv02.iamas.ac.jp/
中部学院大学附属 図書館	学校法人 岐阜済美学院	秦 安雄	〒501-3993	関市桐ヶ丘2丁目 1番地	(0575)24-2243	(0575)24-2434	http://lib.chubu-gu.ac.jp/jhkweb_jpn/top.html
東海学院大学・東海女 子短期大学附属図書館	学校法人 神谷学園	神谷 和孝	〒504-8511	各務原市那加桐野町 5	(058)389-2969	(058)389-9851	http://www.tokaigakuin-u.ac.jp/library
<input type="checkbox"/> <input checked="" type="checkbox"/> 静岡県 <input checked="" type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> (13)							
静岡大学附属図書館	国立大学法人	加藤 憲二	〒422-8529	静岡市駿河区大谷 836	(054)238-4474	(054)238-5408	http://www.lib.shizuoka.ac.jp/
静岡県立大学附属 図書館	静岡県公立 大学法人	小幡 壯	〒422-8526	静岡市駿河区谷田 52-1	(054)264-5801	(054)264-5899	http://www.u-shizuoka-ken.ac.jp/~library/
静岡県立大学短期大学 部附属図書館	静岡県公立 大学法人	田中丸 治宣	〒422-8021	静岡市駿河区小鹿 2-2-1	(054)202-2617	(054)202-2620	http://lib.t.u-shizuoka-ken.ac.jp/lib/newindex.htm
静岡産業大学図書館	学校法人 第二静岡学園	野崎 耕一	〒438-0043	磐田市大原1572-1	(0538)36-8844	(0538)36-3580	http://www.iwata.ssu.ac.jp/lib/index.html
静岡文化芸術大学 図書館・情報センター	学校法人 静岡文化芸術 大学	伊坂 正人	〒430-8533	浜松市中区中央 二丁目1番1号	(053)457-6124	(053)457-6125	http://www.suac.ac.jp/library/

図書館名	法人名	館長	郵便番号	住所	電話	FAX	ホームページ
静岡理工科大学附属図書館	学校法人 静岡理工科大学	宮岡 徹	〒437-8555	袋井市豊沢2200-2	(0538)45-0231	(0538)45-0230	http://www.sist.ac.jp/lib/
聖隷クリストファー大学図書館	学校法人 聖隷学園	大場 浩	〒433-8558	浜松市北区三方原町3453	(053)439-1416	(053)414-1146	http://collib.seirei.ac.jp/
東海大学付属図書館 清水図書館	学校法人 東海大学	赤川 泉	〒424-8610	静岡市清水区折戸3-20-1	(054)334-0414	(054)334-0862	http://www.scc.u-tokai.ac.jp/library/lib-top.htm
東海大学付属図書館 沼津図書館	学校法人 東海大学	古賀 邦正	〒410-0395	沼津市西野317	(055)968-1114	(055)968-1153	http://www.ncc.u-tokai.ac.jp/home3/library/
東海大学短期大学部 静岡図書館	学校法人 東海大学	坂本 雅子	〒420-8511	静岡市葵区宮前町101	(054)261-9527	(054)261-6865	http://web.sjc.u-tokai.ac.jp/~library/
常葉学園大学附属 図書館	学校法人 常葉学園	織田 元泰	〒420-0911	静岡市葵区瀬名1-22-1	(054)261-4499	(054)263-1164	http://www.tokoha-u.ac.jp/library/
日本大学国際関係学部 図書館	学校法人 日本大学	田中 徳一	〒411-8555	三島市文教町2丁目31-145	(0559)80-0806	(0559)88-7875	http://www.ir.nihon-u.ac.jp/lib/
浜松医科大学附属 図書館	国立大学法人	鈴木 修	〒431-3192	浜松市東区半田山一丁目20-1	(053)435-2169	(053)435-5140	http://www2.hama-med.ac.jp/w3a/toshokan/homepage.html

■ 愛知県 ■ (51)

愛知大学図書館	学校法人 愛知大学	渡辺 和敏	〒441-8522	豊橋市町畑町1-1	(0532)47-4181	(0532)47-4182	http://plato.aichi-u.ac.jp/index.html
愛知医科大学医学情報 センター(図書館)	学校法人 愛知医科大学	岡田 忠	〒480-1195	愛知郡長久手町大字 岩作字雁又21	(0561)62-3311	(0561)62-3348	http://www2.aichi-med-u.ac.jp/micli/index.html
愛知学院大学図書館 情報センター	学校法人 愛知学院	大野 栄人	〒470-0195	日進市岩崎町阿良池12	(05617)3-1111 (代表)	(05617)3-7810	http://www.lib.aichi-gakuin.ac.jp
愛知学泉大学図書館	学校法人 安城学園	武藤 宣道	〒471-8532	豊田市大池町汐取1	(0565)35-7097	(0565)35-1003	http://www.gakusen.ac.jp/library/
愛知教育大学附属 図書館	国立大学法人	松田 正久	〒448-8542	刈谷市井ヶ谷町 広沢1	(0566)26-2683	(0566)26-2680	http://www.auelib.aichi-edu.ac.jp
愛知県立大学学術情報 センター図書館	愛知県公立 大学法人	加藤 義信	〒480-1198	愛知郡長久手町 大字熊張字茨ヶ廻間 1522-3	(0561)64-1111 (代表)	(0561)64-1104	http://www.aichi-pu.ac.jp/library/
愛知県立看護大学 看護学術情報センター	愛知県公立 大学法人	赤塚 大樹	〒463-8502	名古屋市守山区 上志段味字東谷	(052)736-1401 (代表)	(052)763-1504	http://libaikan.aichi-nurs.ac.jp/
愛知県立芸術大学附属 図書館	愛知県公立 大学法人	森田 義之	〒480-1194	愛知郡長久手町大字 岩作字三ヶ峯1-114	(0561)62-1180 (代表)	(0561)62-0244	http://www.aichi-fam-u.ac.jp/library/library_unit.html
愛知工科大学附属 図書館	学校法人 電波学園	松原 十三生	〒443-0047	蒲郡市西迫町馬乗 50-2	(0533)68-1135	(0533)68-0352	http://www.aut.ac.jp/
愛知工業大学附属 図書館	学校法人 名古屋電気学園	井 研治	〒470-0392	豊田市八草町八千草 1247	(0565)48-8121	(0565)48-2908	http://aitech.ac.jp/lib
愛知産業大学・短期 大学図書館	学校法人 愛知産業大学	中山 將	〒444-0005	岡崎市岡町字原山 12-5	(0564)48-4591	(0564)48-5113	http://asu-g.net/univ/index.html
愛知淑徳大学図書館	学校法人 愛知淑徳学園	秦 忠夫	〒480-1197	愛知郡長久手町大字 長湫字片平9	(0561)62-4111 (代表)	(0561)64-0310	http://www2.aasa.ac.jp/org/lib/
愛知新城大谷大学・ 愛知新城大谷大学短期 大学部図書館	学校法人 尾張学園	池田 勝昭	〒441-1306	新城市川路字萩平 1-125	(0536)23-3311	(0536)23-8477	http://www.owari.ac.jp/shinshiro2/otani-top/index.htm
愛知東邦大学図書館	学校法人 東邦学園	安保 邦彦	〒465-8515	名古屋市名東区 平和ヶ丘3-11	(052)782-1243	(052)781-0931	http://www.aichi-toho.ac.jp/05unit/01lib.html

図書館名	法人名	館長	郵便番号	住所	電話	FAX	ホームページ
愛知文教大学附属図書館	学校法人 足立学園	増田 孝	〒485-8565	小牧市大字大草 字年上坂5969-3	(0568)78-2211	(0568)78-2240	http://www.abu.ac.jp/abulib/
愛知みずほ大学附属図書館	学校法人 瀬木学園	松井 和弘	〒470-0394	豊田市平戸橋町波岩 86-1	(0565)43-0116	(0565)46-5220	http://amc.mizuho-c.ac.jp/hp/shisetsu/tosyokan.html
桜花学園大学 保育学部・名古屋短期 大学図書館	学校法人 桜花学園	小川 雄二	〒470-1193	豊明市栄町武侍48	(0562)97-1306	(0562)97-1703	http://libwww.nagoyacollege.ac.jp/
桜花学園大学桜堂記念 図書館	学校法人 桜花学園	大澤 伸雄	〒471-0057	豊田市太平町七曲 12-1	(0565)36-4432	(0565)36-4433	http://www.ohkagakuen-u.ac.jp/toshou/index_tosyokan.htm
金城学院大学図書館	学校法人 金城学院	柴田 道子	〒463-8521	名古屋市守山区大森 2-1723	(052)798-0180	(052)768-1066	http://opc.kinjo-u.ac.jp
自然科学研究機構 岡崎情報図書館	大学共同利用 機関法人	岡田 清孝	〒444-8585	岡崎市明大寺町西郷 中38	(0564)55-7191	(0564)55-7199	http://www.lib.orion.ac.jp
椋山女学園大学図書館	学校法人 椋山女学園	石川 勝二	〒464-8662	名古屋市千種区星が 丘元町17-3	(052)781-6452	(052)781-3094	http://www.sugiyama-u.ac.jp/univ/lib/
星城大学図書館	学校法人 名古屋石田学園	法雲 俊邑	〒476-8588	東海市富貴ノ台2-172	(052)601-6000 (代表)	(052)601-6010	http://www.seijph-u.ac.jp/
大同工業大学図書館	学校法人 大同学園	水澤 富作	〒457-8530	名古屋市南区滝春町 10-3	(052)612-6873	(052)612-6108	http://lis.daido-it.ac.jp/
中京大学図書館	学校法人 梅村学園	安村 仁志	〒466-8666	名古屋市昭和区八事 本町101-2	(052)835-7157	(052)835-1249	http://www.chukyo-u.ac.jp/toshou/
中京女子大学図書館	学校法人 中京女子大学	高橋 昭弘	〒474-8651	大府市横根町名高山 55	(0562)46-1239	(0562)46-3860	http://www.chujo-u.ac.jp/
中部大学附属三浦記念 図書館	学校法人 中部大学	足達 義則	〒487-8501	春日井市松本町1200	(0568)51-1111 (代表)	(0568)52-1510	http://www.bliss.chubu.ac.jp/
同朋学園大学部附属 図書館	学校法人 同朋学園	栗原 幸江	〒453-8540	名古屋市市中村区稲葉 地町7-1	(052)411-1951	(052)411-1120	http://lib.doho.ac.jp/
東海学園大学図書館	学校法人 東海学園	中島 邦夫	〒468-8514	名古屋市天白区中平 2丁目901	(052)801-1528	(052)804-1192	http://www.tokaigakuen-u.ac.jp/lib/
豊田工業大学総合情報 センター	学校法人 トヨタ学園	田中 周治	〒468-8511	名古屋市天白区久方 2-12-1	(052)809-1743	(052)809-1744	http://libwww.toyota-ti.ac.jp/
豊田工業高等専門学校 図書館	独立行政法人 国立高等専門 学校機構	吉利用邦	〒471-8525	豊田市栄生町2-1	(0565)36-5904	(0565)36-5920	http://www.toyota-ct.ac.jp/~jimut/tosyo/
豊橋技術科学大学附属 図書館	国立大学法人	加藤 史郎	〒441-8580	豊橋市天伯町 字雲雀ヶ丘1-1	(0532)44-6562	(0532)44-6566	http://www.lib.tut.ac.jp
豊橋創造大学附属 図書館	学校法人 藤ノ花学園	中野 一豊	〒440-8511	豊橋市牛川町松下 20-1	(050)2017-2105	(050)2017-2115	http://www.sozo.ac.jp/slic/
名古屋大学附属図書館	国立大学法人	伊藤 義人	〒464-8601	名古屋市千種区 不老町	(052)789-3666	(052)789-3693	http://www.nul.nagoya-u.ac.jp/
名古屋外国語大学・ 名古屋学芸大学図書館	学校法人 中西学園	久山 紀彦	〒470-0188	日進市岩崎町竹ノ山 57	(0561)75-1726	(0561)75-1727	http://library.nakanishi.ac.jp/
名古屋学院大学学術 情報センター	学校法人 名古屋学院大学	新熊 清	〒456-8612	名古屋市熱田区 熱田西町1-25	(052)678-4092	(052)682-6826	http://www2.ngu.ac.jp/white/Libra/libra-j00.html
名古屋経済大学・ 名古屋経済大学短期 大学部図書館	学校法人 市邨学園	秋田 量正	〒484-0000	犬山市宇樋池61-22	(0568)67-3798	(0568)67-9321	http://www.nagoya-ku.ac.jp/lib/
名古屋芸術大学附属 図書館	学校法人 名古屋芸術大学	橋本 裕明	〒481-8503	北名古屋市熊之庄 古井281	(0568)24-0315 (代表)	(0568)26-3122	http://www.nua.ac.jp/index.html
名古屋工業大学附属 図書館	国立大学法人	多田 豊	〒466-8555	名古屋市昭和区 御器所町	(052)735-5098	(052)735-5102	http://www.lib.nitech.ac.jp

図書館名	法人名	館長	郵便番号	住所	電話	FAX	ホームページ
名古屋産業大学・名古屋 経営短期大学図書館	学校法人 菊武学園	安積 紀雄	〒488-8711	尾張旭市新居町 3255-5	(0561)55-3081	(0561)55-5985	http://www.lib.nagoya-su.ac.jp/
名古屋商科大学中央 情報センター	学校法人 栗本学園	浅野 一明	〒470-0193	日進市米野木町 三ヶ峯4-4	(05617)3-2111 (代表)	(05617)4-0341	http://www.joho.nucba.ac.jp
名古屋女子大学学術 情報センター	学校法人 越原学園	越原 洋二郎	〒467-8610	名古屋市瑞穂区 汐路町3-40	(052)852-9768	(052)852-1830	http://lsic.nagoya-wu.ac.jp/
名古屋市立大学総合 情報センター	公立大学法人 名古屋市立 大学	鋤柄 増根	〒467-8501	名古屋市瑞穂区 瑞穂町字山の畑1	(052)872-5795	(052)872-5781	http://www.cc.nagoya-cu.ac.jp/lib/index.html
名古屋造形芸術大学 図書館	学校法人 同朋学園	森田 紘	〒485-8563	小牧市大字大草 字年上坂6004	(0568)79-1255	(0568)47-0361	http://www.nzu.ac.jp/~lib/
名古屋文理大学付属 図書館	学校法人 滝川学園	奥村 純市	〒492-8520	稲沢市稲沢町前田 365	(0587)23-2400 (代表)	(0587)21-2844	http://www.nagoya-bunri.ac.jp/library/top.html
名古屋柳城短期大学 図書館	学校法人 柳城学院	夏目 恒雄	〒466-0034	名古屋市昭和区 明月町2-54	(052)841-2635	(052)841-2697	http://ryujo.opac.jp/homepage/
南山大学図書館	学校法人 南山学園	水谷 重秋	〒466-8673	名古屋市昭和区 山里町18	(052)832-3163	(052)833-6986	http://www.nanzan-u.ac.jp/TOSHOKAN
日本赤十字豊田看護 大学図書館	学校法人 日本赤十字 学園	石黒 士雄	〒471-8565	豊田市白山町七曲 12-33	(0565)36-5119	(0565)37-7897	http://www.rctoyota.ac.jp/library/index.htm
日本福祉大学付属 図書館	学校法人 日本福祉大学	小泉 純一	〒470-3295	知多郡美浜町大字 奥田字会下前35-6	(0569)87-2325	(0569)87-2795	http://library.n-fukushi.ac.jp/
人間環境大学附属 図書館	学校法人 岡崎学園	奥田 栄	〒444-3505	岡崎市本宿町字上 三本松6-2	(0564)48-7815	(0564)48-7815	http://www.uhe.ac.jp/outside/library/l_index.html
藤田学園医学・保健 衛生学図書館	学校法人 藤田学園	原田 信広	〒470-1192	豊明市沓掛町 田染ヶ窪1-98	(0562)93-2420	(0562)93-2649	http://library.fujita-hu.ac.jp/index.html
名城大学附属図書館	学校法人 名城大学	高橋 友一	〒468-8502	名古屋市天白区 塩釜口1-501	(052)832-1151 (代表)	(052)833-6046	http://toshomeijo-u.ac.jp

□■ 三重県 ■□ (10)

皇學館大学附属図書館	学校法人 皇學館	渡辺 寛	〒516-8555	伊勢市神田久志本町 1704	(0596)22-6322	(0596)22-6329	http://www.kogakkan-u.ac.jp/html/traip05-1.html
鈴鹿医療科学大学附属 図書館	学校法人 鈴鹿医療科学 大学	中野 勝麿	〒510-0293	鈴鹿市岸岡町1001-1	(059)383-8991	(059)383-9915	http://www.suzuka-u.ac.jp/lib/
鈴鹿国際大学附属 図書館	学校法人 享栄学園	氷見 潔	〒510-0298	鈴鹿市郡山町 663-222	(059)372-3950	(059)372-2827	http://www.suzuka-iu.ac.jp/study/library.html
鈴鹿短期大学図書館	学校法人 享栄学園	山田 芳子	〒513-8520	鈴鹿市庄野町1250	(059)378-1020	(059)379-4693	http://www.suzuka-jc.ac.jp
三重大学附属図書館	国立大学法人	小林 英雄	〒514-8507	津市栗真町屋町1577	(059)231-9083	(059)231-9086	http://www.lib.mie-u.ac.jp/
三重県立看護大学附属 図書館		斎藤 真	〒514-0116	津市夢が丘1-1-1	(059)233-5608	(059)233-5668	http://www1.mcn.ac.jp/
三重短期大学附属 図書館		雨宮 照雄	〒514-0112	津市一身田中野157	(059)232-2341	(059)232-9647	http://www.tsu-cc.ac.jp/toshokan/library.html
三重中京大学図書館	梅村学園	浜谷 英博	〒515-8511	松阪市久保町1846	(0598)29-1122	(0598)29-4986	http://lib.mie-chukyo-u.ac.jp/
四日市大学情報センター	暁学園	植田 栄二	〒512-8512	四日市市萱生町1200	(059)365-6712	(059)365-6619	http://www.yokkaichi-u.ac.jp/tosyo/
四日市看護医療大学 図書館	暁学園	山崎 正人	〒512-8045	四日市市萱生町1200	(059)340-0705	(059)361-1401	http://www.y-nm.ac.jp/shisetsu/library.html

役員館一覧

東海地区大学図書館協議会役員館変遷一覧（平成8年度～平成19年度）

年度	会長館	運営委員会	機関誌編集委員会	監事会
平成8～ 9年度	名古屋大学	名古屋工業大学 静岡大学 豊橋技術科学大学 愛知県立看護大学 名古屋市立大学 名古屋市立大学看護短期大学部 日本福祉大学 朝日大学 岐阜経済大学 愛知女子短期大学	愛知教育大学 岐阜大学 名古屋工業大学 愛知県立大学 愛知学院大学	愛知教育大学 愛知県立芸術大学 名城大学
平成10～ 11年度	名古屋大学	愛知教育大学 岐阜大学 浜松医科大学 愛知県立看護大学 名古屋市立大学 名古屋市立看護短期大学部（平成10） ／三重短期大学（平成11） 愛知工業大学 岐阜女子大学 金城学院大学 名古屋短期大学	愛知教育大学 岐阜大学 名古屋工業大学 愛知県立大学 愛知学院大学	愛知県立芸術大学 名城大学
平成12～ 13年度	名古屋大学	三重大学 名古屋工業大学 静岡大学 愛知県立看護大学 名古屋市立大学 三重短期大学 椋山女学園大学 大同工業大学 岐阜聖徳学園大学 名古屋短期大学	愛知教育大学 岐阜大学 名古屋工業大学 愛知県立大学 愛知学院大学	愛知県立芸術大学 名城大学
平成14～ 15年度	名古屋大学	愛知教育大学 岐阜大学 豊橋技術科学大学 愛知県立看護大学 名古屋市立大学 岐阜市立女子短期大学 椋山女学園大学 金城学院大学 皇學館大学 愛知女子短期大学	愛知教育大学 岐阜大学 名古屋工業大学 愛知県立大学 愛知学院大学	愛知県立芸術大学 名城大学
平成16～ 17年度	名古屋大学	浜松医科大学 三重大学 名古屋工業大学 愛知県立看護大学 名古屋市立大学 静岡県立大学短期大学部（平成17） 南山大学 中京大学 東海女子大学 名古屋経済大学短期大学部	愛知教育大学 岐阜大学 名古屋工業大学 愛知県立大学 愛知学院大学	愛知県立芸術大学 金城学院大学
平成18～ 19年度	名古屋大学	静岡大学 豊橋技術科学大学 愛知教育大学 愛知県立看護大学 名古屋市立大学 静岡県立大学短期大学部（平成18） ／三重短期大学（平成19～21） 名城大学 中部大学 中京女子大学 名古屋柳城短期大学図書館	愛知教育大学 岐阜大学 名古屋工業大学 愛知県立大学 愛知学院大学	愛知県立芸術大学 南山大学

研修会一覧

東海地区大学図書館協議会研修会一覧（平成元年度～平成18年度）

年度	年月日	会場	演題	講師	所属
元	元.12.5	名城大学	学術情報サービスの展開と大学図書館	門條 司	化学情報協会
			アダム・スミスの蔵書をめぐって	水田 洋	名城大学
	2.1.31	名古屋大学	大学図書館の未来像	丸山 昭二郎	鶴見大学
2	2.11.29	名古屋大学	Collection building について	川原 和子	三重大学
			大学図書館とニュー・メディア	橋爪 宏達	学術情報センター
3	3.1.30	大同工業大学	『経済学文献季報』のデータベース化について－KEIS から KEIS II へ	山内 隆文	名古屋学院大学
			私の日本の古典文献とのつきあい	朝倉 治彦	四日市大学
3	3.11.8	名古屋学院大	ドイツ及び英国の図書館事情	牧村 正史	名古屋大学
			江戸時代の出版	長島 弘明	名古屋大学
4	4.1.17	愛知県図書館	目録システムにおけるハイパーテキストの適用可能性	石塚 英弘	図書館情報大学
			新図書館概要説明及び見学	鈴木 康之	愛知県図書館
4	4.10.21	南山大学	慶應義塾大学の新しい試み－マルチメディアの統合－	原田 悟	慶應義塾大学
			図書館の施設計画に関連して	加藤 彰一	名古屋大学
5	5.3.19	名古屋大学	カリフォルニア大学バークレー校の図書館システム	棚橋 章	名古屋大学
			電子情報サービスの新しい展開	寺村 謙一	丸善㈱
5	6.1.26	施設見学会：けいはんなインフォザール			
		6.3.23	愛知医科大学	シーボルトと中京の学者たち	武内 博
6	6.12.6	愛知学院大学	アメリカ図書館最新事情	渡辺 和代	名古屋アメリカンセンター
			地域・館種を越えた図書館サービス－すべての図書館をすべての利用者に－	川瀬 正幸	名古屋大学
	7.2.22	施設見学会：三重県図書館			
7	7.10.27	名古屋大学	鯨と捕鯨の文化史	森田 勝昭	甲南女子短期大学部
			研究図書館としての電子図書館の事例－機能と運営－	渡辺 博	奈良先端科学技術大学院大学
	7.12.7	愛知工業大学	シンポジウム：利用者教育の在り方－方法と問題点－	光斎 重治 高橋 一郎 四谷 あさみ 堀 茂 金子 豊	中部大学 愛知県立大学 愛知淑徳大学 名古屋大学 名古屋大学
8	8.10.24	名古屋大学	インターネット、イントラネットを前提とした図書館情報サービスの将来	後藤 邦夫	南山大学
			電子図書館の諸相：US Berkeley Digital Library Project と Ariadne97	谷口 敏夫	光華女子大学
	8.12.4	愛知淑徳大学	シンポジウム：NDC 新版9版について	石山 洋 万波 涼子 中井 えり子 酒井 信	東海大学 名古屋市立大学 名古屋大学 名城大学

年度	年月日	会場	演 題	講 師	所 属
9	9.10.30	名古屋大学	英国大学図書館における電子情報サービスの進展	尾城 孝一	東京工業大学
			フランス国立図書館 BNF	篠田 知和基	名古屋大学
	9.12.10	朝日大学	講演 歌うコンピュータ・描くコンピュータ－マルチメディア時代への布石－	板谷 雄二	朝日大学
			フォーラム：マルチメディアと電子図書館－図書館機能におけるホームページ－	津田 明美 林 哲也 鈴木 康生 三浦 基	愛知工業大学 浜松医科大学 名古屋大学 南山大学
10	10.12.5	名古屋大学	テーマ：電子ジャーナルの”いま”と”こんご” 講演 デジタルメディアの現状と今後	逸村 裕	愛知淑徳大学
			電子ジャーナルの事例報告 EES, Science Direct FirstSearch, FirstSearch ECO Journals@ovid, HighWire Press	エルゼビア 紀伊國屋書店 ユサコ	
	10.12.16	岐阜経済大学	テーマ：大学図書館における電子情報サービスの実際 ネット時代の教育・研究環境と図書館の活用	松島 桂樹	岐阜経済大学
			電子情報サービスの事例報告	安田 多香子 野村 千里 夏目 弥生子	愛知県立大学 南山大学 名古屋大学
11	11.11.2	名古屋大学	テーマ：著作権法と大学図書館 大学図書館にかかわる著作権問題	石倉 賢一	千葉大学
			電子図書館サービスと著作権	山本 順一	図書館情報大学
	11.12.7	岐阜女子大学	テーマ：大学図書館と学生用図書 大学教育改革と学生用図書	柴田 正美	三重大学
			事例報告	江口 愛子 吉根 佐和子 福井 司郎	浜松医科大学 名古屋市立大学 中京大学
12	13.1.18	愛知教育大学	テーマ：大学図書館における相互協力 大学図書館における相互協力	石井 啓豊	図書館情報大学
			事例報告	平井 芳美 濱口 幾子 加藤 直美	名古屋大学 愛知県立看護大学 愛知工業大学
	13.3.9	名古屋大学	テーマ：大学図書館の管理・運営 大学図書館の管理・運営	長谷川 豊祐	鶴見大学
			コンソーシアムを視野においた大学図書館の運営	松下 鈞	国立音楽大学
13	13.12.20	大同工業大学	テーマ：古文書の整理と保存： 電子メディア変換（画像）による利用について 講演 古文書の整理と保存	秋山 晶則	名古屋大学
			事例報告 徳島大学附属図書館貴重資料高精細デジタルアーカイブ－21世紀地域ネットワークへの試み－	岡田 恵子	徳島大学
	14.1.24	名古屋大学	テーマ：図書館の電子化と所蔵資料を核とした地域との連携 デジタル時代の図書館	逸村 裕	名古屋大学
			所蔵資料の高度活用を目指して－地域の博物館・図書館等の連携－	種田 祐司	名古屋市博物館
14	14.12.13	名古屋大学	テーマ：学術情報の電子化を考える 講演 学術情報の電子化が意味するもの－研究者の立場から考える－	倉田 敬子	慶應義塾大学
			事例報告 名古屋大学における電子ジャーナルの現状について	澄川 千賀子 川添 真澄	名古屋大学

年度	年月日	会場	演題	講師	所属
14	15. 3. 4	名古屋市立大学	テーマ：現代の大学図書館と著作権 講演 現代の大学図書館と著作権	土屋 俊	千葉大学
15	15.12.15	名古屋大学	テーマ：図書館のサービス・マネジメントと評価 講演 図書館のサービス・マネジメント：顧客の選好と評価	永田 治樹	筑波大学
	16. 2.19	椋山女学園大学	テーマ：SPARC の現状と SPARC/JAPAN の今後について 講演 SPARC の現状と SPARC/JAPAN の今後について	安達 淳	国立情報学研究所
16	16.12.17	名古屋大学	テーマ：電子的学術情報利用の進展と今後の展望 事例報告 名古屋大学の電子図書館化計画－機関リポジトリ構築計画を中心にして－ 医学系図書館の電子ジャーナル状況と日本医学図書館協会電子ジャーナルコンソーシアムの現状 電子ジャーナルの利点と課題－サイエンス・ダイレクトを例に－	郡司 久 坪内 政義 高橋 昭治	名古屋大学 愛知医科大学 エルゼビアジャパン
	17. 3. 3	ぱるるる プラザ GIFU	テーマ：大学図書館におけるアウトソーシング 事例報告 日本福祉大学付属図書館におけるアウトソーシング アウトソーシングを活用した大学図書館運営－立命館大学における現状と課題－ アウトソーサーからみたアウトソーシング	岡崎 佳子 田中 康雄 図書館流通センター	日本福祉大学 立命館大学
17	17.12.2	中京大学	テーマ：図書館情報リテラシー指導の現状－各大学の事例報告－ 基調講演 大学図書館と情報リテラシー	逸村 裕	名古屋大学
			事例報告 名古屋大学附属図書館における情報リテラシー教育 図書館情報リテラシー教育－小さな図書館、小さな学部での試み－ 中京大学図書館 情報リテラシー教育の現状 ニッチ戦略（隙間産業）で、大学に貢献できる情報リテラシー教育支援を目指す－三重大学附属図書館の取組－ 岐阜県立看護大学図書館における利用教育 大学ポータルを中心とした名古屋学院大学の情報環境	次良丸 章 原 泰子 春日井 正人 杉田 いづみ 井上 貴之 中田 晴美	名古屋大学 名古屋市立大学 中京大学 三重大学 岐阜県立看護大学 名古屋学院大学
	18.1.30	名古屋大学	テーマ：利用者サイドに立つ図書館サービス 講演 北米大学図書館における利用者中心の図書館サービス 利用者の利用行動に基づいた図書館サービス	シャロン・ドマイヤー 越塚 美加	マサチューセッツ大学 学習院女子大学
18	19.1.12	岐阜県図書館	テーマ：大学図書館の地域連携 事例報告 相互利用協定と愛知県内図書館の ILL 定期便設置実証実験 静岡県内の大学図書館における連携について 岐阜県における公共図書館との連携図書館 東海目録（TOMcat）：病院図書室と大学図書館の連携 図書館の教育支援、地域支援：豊田高専の英語多読を通して	村上 昇平 大石 博昭 木村 晴茂 坪内 政義 西澤 一	愛知県図書館 静岡大学 岐阜大学 愛知医科大学 豊田工業高等専門学校
	19.3.7	名古屋大学	テーマ：Web2.0 時代の図書館サービス 基調講演 Web2.0 時代の図書館 講演 図書館利用者の情報探索活動に関する実証的研究 Web2.0 時代の新たな図書館サービスの展開	岡本 真 寺井 仁 林 賢紀	Academic Resource Guide 名古屋大学 農林水産省

「東海地区大学図書館協議会誌」掲載記事の電子的公開，転載，学術機関リポジトリでの公開について

- ・著作権は著作者本人にあります。
- ・著作者本人が，ホームページ等で電子的公開，転載，あるいは学術機関リポジトリへ搭載する場合，著作者本人からの申請書等の提出は必要ありません。

(平成19年7月9日 東海地区大学図書館協議会運営委員会(第19-1回)決定)

東海地区大学図書館協議会誌 第52号(2007)

平成19年12月14日印刷

平成19年12月20日発行

編集・発行 東海地区大学図書館協議会事務局
名古屋市千種区不老町 名古屋大学附属図書館内
電話 052-789-3666

ホームページ <http://www.nul.nagoya-u.ac.jp/tokai/>

振込先 U F J 銀行今池支店 普通預金 口座 1747229